日本キリスト改革派教会　大会教育委員会

教会学校教案誌

church school curriculum

Church School Curriculum Since 2001

vol.64
2017年1~3月
「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル　第２年

教会・国家・平和・人権（５）…… 木下裕也
絵本に心を耕されて…… 望月鈴子
神様に信頼するということ…… 保田広輝
【日曜学校・教会学校訪問】新所沢伝道所のご紹介

2017年1～3月カリキュラム（第64号）

―『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル　第2年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月1日	祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か	問84, 85	ハイデ116、ウ小98
		サムエル記上3:1～10	フィリピ4:6
	祈りによって神様とお話しし、神様と心を合わせて一年を過ごそう		
1月8日	祈りに生きる道・ 神との会話	問86	ウ小98、ハイデ116, 117
		ルカ11:1～13	ルカ11:13b
	父に対する信頼をもって全てをゆだねて祈る		
1月15日	祈りに生きる道・ 主の御名による祈り	問87	―
		イザヤ44:15～17	ヤコブ5:16
	イエスさまの十字架によってわたしたちを救ってくださる本当の神様に祈る		
1月22日	祈りに生きる道・ 祈りの内容	問88	―
		マタイ6:5～9	マタイ6:8～9
	神様を信頼して祈ることで神様と結びつく		
1月29日	主の祈り・ わたしたちの父よ	問89	ウ小100、ウ大189、ハイデ120
		マタイ6:5～9	マタイ7:11
	神の子として天の父に祈る		
2月5日	主の祈り・ 御名を崇める祈り	問90	ウ小101、ハイデ122
		詩編67:3～4	詩編67:4
	神様のみ名をたたえることで、私たちも幸いを得る		
2月12日	主の祈り・ 御国を求める祈り	問91	―
		ルカ12:31～32	ルカ12:32
	世界が神様の国となるように祈る		
2月19日	主の祈り・ 御心を求める祈り	問92	ウ小103、ハイデ124
		ルカ22:39～46	ローマ12:2
	私たちを愛してくださる神様の御心に委ねる		
2月26日	主の祈り・ ゆだねる祈り	問93	―
		申命記8:2～10	申命記8:3
	全てを与えてくださる神様を信頼して全てのことをゆだねて祈る		
3月5日	主の祈り・ 赦され、赦す祈り	問94	ウ小105、ウ大194、ハイデ126
		マタイ18:21～35	マタイ6:12
	赦されている恵みを覚えて、人を赦せるように祈る		
3月12日	主の祈り・ 神の子の勝利の祈り	問95	ウ小26、36、106
		ヨハネ17:12～19	ヨハネ17:12b
	イエスさまが天にいても私たちをいつも守ってくださるように		
3月19日	主の祈り・ 確信の祈り	問96	ウ小107、ハイデ128
		歴代誌上29:10～20	ヨハネ一5:14
	私たちの全てを支えてくださる主をたたえる		
3月26日	主の祈り・ 神の真実による祈り	問97	ウ小4
		コリント二1:15～22	コリント二1:20b
	真実である方に全てをゆだねる		

日本キリスト改革派教会大会教育委員会　2017年1・2・3月号
教会学校教案誌　第64号

もくじ

2017年1・2・3月カリキュラム
まえがき……小宮山裕一……4
日曜学校・教会学校訪問
　新所沢伝道所の紹介……長田　詠喜……5
絵本に心を耕されて
　「きこえる」……望月　鈴子……7
教会・国家・平和・人権
　―とくに若い人々のために（5）……木下　裕也……10
神様に信頼するということ……保田　広輝……13

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……15
　1月 1日……16
　1月 8日……22
　1月15日……28
　1月22日……34
　1月29日……40
　2月 5日……46
　2月12日……52
　2月19日……58
　2月26日……64
　3月 5日……70
　3月12日……76
　3月19日……82
　3月26日……88

2017年4・5・6月カリキュラム……94
2017年度年間カリキュラム……95
「子どもと親のカテキズム」案内……97
教案誌自由募金案内……98
執筆者よりひとこと・あとがき……99

まえがき

崖っぷちに立つ教案誌

相馬伸郎（大会教育委員会委員長）

第64号をお届けすることが許され心から神と皆さまに感謝致します。と同時に第62号そして63号と発行が大幅に遅れてしまい、多大なるご迷惑、ご心配をお掛けしてしまいましたことを心からお詫び申し上げます。

この16年間、綱渡りではありましたが事故なく発行することが許されてまいりました。確かに第62号は、編集実務者の突然の離職に伴うものでした。しかしその後も不安定な状況を克服することができませんでした。私どもの力不足が露呈しました。

加えて、経済の面でも危機的な状況に立たされています。昨年の大会で、50万円自由募金の提案は満場一致で受け入れて頂きました。毎号、募金の訴えを掲載していました。ところが、大会移管後、掲載しない状況が続いてしまいました。発行原資は、これまで通り「売り上げと募金」が両輪です。大会議場で配布した募金願いの裏面には、会計担当者からの悲痛な訴えが記されています「崖っぷちです！　教案誌の財政　～ここに来て2015年度終了時の繰越金が30万余りとなり、創刊以来最大の財政的危機を迎えております。2015年度は収入と支出の差額がマイナス46万円ほどでしたので、このままでは今年度中に資金がショートしてしまいます～」。

弊誌の創刊は、中部中会教育委員会によってなされました。当時、中会も大会も定期刊行物としての教案誌発行はまったく考えていないという現状を知らされました。そこで、若い教師と中堅教師たちさらに信徒たちの力を一束に集めて創刊したのです。つまり、内実はすべて有志によるものでした。創刊時、中会教育委員会の委員は小生のみでした。日本キリスト改革派教会は、委員会や中・大会会議の決議なくして公的な活動は担えません。その堅実な面は言うまでもなく強みです。創刊号は、有志がすべておぜん立てをし、教育委員会がこれを認可、監督するというカタチを整え、中会決議を受けて、刊行しました。神のみがご存じですが、その背後には莫大な時間と犠牲的な労力が捧げられました。しかしそのヒズミは編集部の痛みであり悲鳴でした。それだけに大会でこれを発行できるようにとの悲願となりました。

14年春、内容はともかく、どの刊行物にも勝るとも劣らないすばらしい装丁で刊行が始まりました。しかし、大会教育委員会もまた弊誌刊行を主務とする実力はありませんでした。それだけに結局、基本的には有志で担うというあり方を踏襲せざるを得ませんでした。そして突然のアクシデントを受け、遂に前委員会は、現状での継続的発行は極めて困難との認識を持ちました。そこで次号より一年間、救済史カリキュラムを編み、加えてこれまでの原稿を再利用する形で発行することと致しました。この期間内に体制を立て直すか、もしくは休・廃刊とするかを定めることと決議致しました。

今回大幅に改組された委員会は、18年度に継続発行するかどうかを議論しなければなりません。現状の教会を見渡せば、結局、強い志を持つ有志でしか担えないと思わざるをえません。教会学校教案誌の将来のため、新しい教育委員会と新たな有志が起こされるよう、ぜひお祈り下さい。そして最も大切なことは、次代を担う世代の教育の営みが祝福されることです。教会奉仕はすべて召しと委託を受けた「有志」の営みです。同志、有志の皆様とさらに同伴を続けられますように。Soli Deo Gloria!

日曜学校・教会学校訪問

新所沢伝道所教会学校のご紹介

新所沢伝道所　教会学校教師会

1. 新所沢教会について

新所沢伝道所は1960年にCRCミッションによって伝道が始められて以来、所沢市で伝道を続けております。2012年に伝道所に種別変更いたしましたが、会堂の新築、牧師招聘などを経て、引き続き伝道と教会形成に取り組んでいます。

教会学校は契約の子が中心で、未就学時から中・高校生まで、フルメンバーで10人ほど、常時6〜7名の子どもが参加しています。教会学校の教師は、宣教教師を始め6名ほど、加えて日頃から数人の教会員特に元教会学校の先生だった婦人たちが礼拝に出席し子どもたちを見守っていくてくれます。全体では常に20名近い人数での礼拝を持つことができており感謝です。

2. 教会学校について

通常の礼拝は、9時半からで、教材として教会学校教案紙のカリキュラムで礼拝を守っています。プログラムは下記の通りです。

1. 前奏
2. お祈り
3. 賛美歌
4. 主の祈り（月一回十戒）
5. 子どもと親のカテキズム
6. 聖書
7. お話し
8. お祈り
9. 賛美歌
10. 献金
11. 賛美歌（ふくいんこどもさんびか80）
12. 祝祷
13. 後奏

メッセージは基本的には宣教教師が行っていますが、第五主日には、教会員の方々にお話いただいています。カリキュラムに沿ったお話をされる方もおられますが、それぞれの方の経験にもとづく証しなどをお話くださる方もおられます。子どもたちに取っても普段あまり聞くことのない大人の方の様々な経験をお聞きする貴重な機会であるとともに、大人の教会員の方達を近く感じる良い機会になっていると思います。

礼拝の後には分級を持っています。以前から年齢別に「マタイクラス（未就学科)」「マルコクラス（小学低学科)」「ルカクラス（小学中学科)」「ヨハネクラス（小学高学科)」「使徒クラス（中学科)」の後クラスに分けていましたが、現在は子どもの数も少なく、必ずしも年齢だけでなくそれぞれの子どものニードに応じてクラスを分けています。逆に、教師一人が、一人から三人ほどの子どもに対応できています。普段は、教案誌の分級展開例などを用いてメッセージを深めています。

またクリスマス礼拝の後の祝会では、子ども達の賛美や合奏が恒例となっていますので、クリスマス前二ヶ月ほどは、トーンチャイムやリコーダーでの賛美を練習します。

3. 子どもの集会について

礼拝に出席している子ども達は、牧師家庭を除けば、それぞれ、電車などで通う距離から集まっています。地域の子ども達への伝道を目指して、年に数回、「子どもの集会」を行ってい

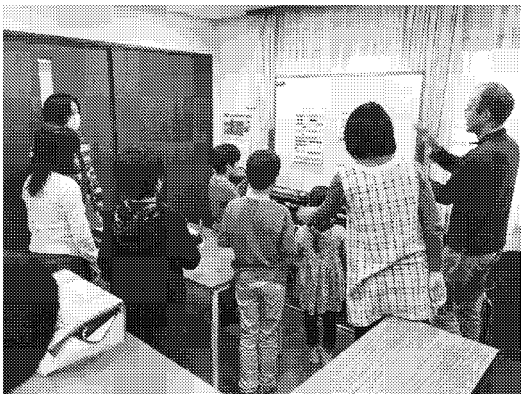
ます。教会学校の教師を中心に企画し、聖書のお話と、簡単な工作を行っています。2016年度は、7月に「ザアカイ木登り人形を作ろう」、12月に「アドベントカレンダーを作ろう」として開催しました。

10人余りの出席で、教会はほとんど初めてという子ども達が多いですが、聖書の話もよく聞き、工作なども一生懸命にしています。中にはいつもは都内の教会に出席しているという子どももおりますが、多くの子どもは日曜日の礼拝に出席するのは難しいようです。それでも、長い目で教会に興味を持ってくれるように、取り組んでいきたいと思っています。

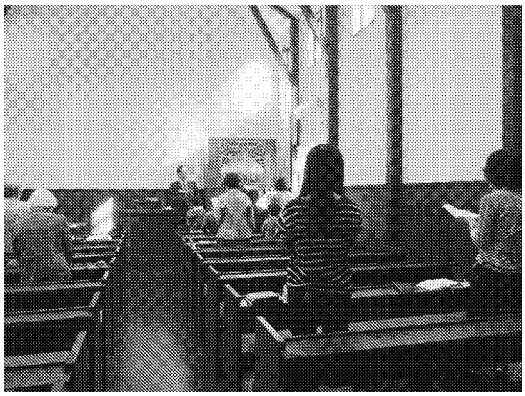
4. 教師会について

教師会は、毎月一回開いています。月ごとの予定について協議したのち、宣教教師より、翌月のカリキュラムに則って短くそれぞれの箇所のポイントをまとめて、分級の指針を学んでいます。子ども達の親が中心の若い教師会ですが、子供達の成長と信仰が養われることを祈りつつ、準備しています。

最近は、中会のキャンプなどへの参加者も与えられており、少しずつではありますが確実に信仰に導かれていることを感謝しています。



トーンチャイムの練習中



子どもの礼拝のようすです

絵本に心を耕されて

「きこえる？」

（はいじま　のぶひこ　福音館書店）

望月鈴子（浜松伝道所信徒）

「ねえ、お母さん！　聞こえてる？　わたしの話聴いてる？」「ぅーん……聞こえてる、聴いてるよ……」「じゃあ、ちゃんと返事してよ！」

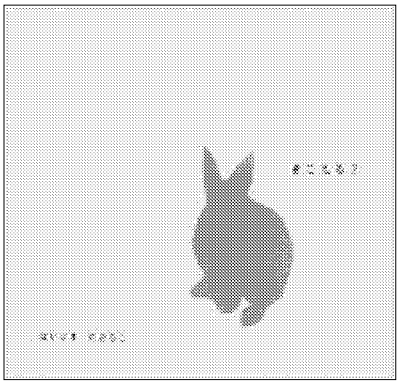
聞いてるんだか聞いてないんだかわからない生返事をする母親。まだ子どもたちが小さかった頃、こんなやりとりを幾度となく繰り返していたような気がします。

折々に脳裏によみがえる景色があります。時間のやりくりをしながら非常に多忙な日々を過ごしていた時期がありました。見たり聞いたりすることに深く心を寄せるゆとりのない日々でした。もう20年以上前のことです。

そんな中である秋の日、出かけ先で所用をすませての帰り道、ふと見上げると空は茜色に染まり、ねぐらに帰る鳥たちが羽ばたき、家々のシルエットが夕焼けの中に美しく浮かび上がっていました。ひと時足を止め、深呼吸をして夕映えの空に見入っていると、心地よい風が頬を撫でて通り過ぎ、秋の虫たちが心を和ませるような音色を奏でていました。

夕焼けの中に佇み、葉ずれの音に耳を澄ませ、鳥の羽ばたきを聴き、虫の奏でる音色に耳を傾けた時、忙しさで心が一杯になっていて、目にいろいろなことが映っているのに、見るべき大切なものを何も見ていない、たくさんの声が聞こえているのに本当に聴きとるべき声を何も聴きとっていないことにハッと気付かされ、涙がこぼれそうになったことを覚えています。

絵本「きこえる？」を初めて手に取り読んだ時、再びその光景とその時の思いが鮮やかによみがえりました。作者・はいじまのぶひこ氏は現代美術家として活躍中で、初めて描いた絵本



がこの「きこえる？」だということです。2年に一度スロヴァキアの首都ブラティスラヴァで開催される世界絵本原画展は、世界最大規模の絵本原画コンクールでもあるということです。そのコンクールで、初めて描いたこの絵本「きこえる？」で、2012年に準グランプリに相当する「金のりんご賞」を受賞しました。

やわらかな色あいで大変シンプルなシルエットのような絵です。静謐さをたたえた絵を見ていると、「見る」という行為であるのに、「きこえる？」と言葉が添えられることによって「聴く」という感覚が研ぎ澄まされ、引き込まれていきます。

表と裏表紙の見開きは満天の星、次は冴え冴えと満月……、そしてピンとそばだてたうさぎの大きな耳。

きこえる？　はっぱの　ゆれる　おと
はなの　ひらく　おと
ほしの　ひかる　おと
きこえる？　いきを　すう　おと
いきを　はく　おと
しんぞうの　うごく　おと

きこえる？　　かわの　ながれる　おと
　　なみの　よせる　おと
きこえる？
　　きみの　なまえを
　　よぶ　こえ
きこえる？

目を閉じると、目から得られない情報を得るために、耳の感覚がより鋭く研ぎ澄まされると言われますが、私はこの絵本を見ていると、じっと耳を澄ませて音を聴きとろうとするだけでなく、目までが音を聴きとろうとする感覚になります。絵によって心が静まって整えられていく、そして音が響いてきます。

この絵本「きこえる？」は、わたしに今一度、心を全開にして魂の底から主なる神さまの声を聴いているか、救いを求める人の呻きの声に深く心を寄せて聴いているかと問いかけてきました。ただ聞いているだけ、聞くふり、聞き流しているだけではないかと思わず自問せざるをえませんでした。

旧約の神の民イスラエルは、神さまの声に聞き従わない、神さまから離れるという罪を繰り返したため、主なる神さまの宝の民であったにもかかわらず、「行け、この民に言うがよい　よく聞け、しかし理解するな　よく見よ、しかし悟るな、と。この民の心をかたくなにし　耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく悔い改めていやされることのないために。」（イザヤ書6章9,10節）と厳しく断罪されました。

今、主イエス・キリストを私の救い主と信じていますが「耳の聞こえない人よ、聞け。　目の見えない人よ、よく見よ。　わたしの僕ほど目の見えない者があろうか。　わたしが遣わす者ほど耳の聞こえない者があろうか。　わたしが信任を与えた者ほど　目の見えない者　主の僕ほど目の見えない者があろうか。多くのことが目に映っても何も見えず　耳が開いているのに、何も聞こえない」（イザヤ書42章18～20節）とイエス様に言われそうです。

近年、介護の分野、カウンセリングなどで「傾聴」することが重視されるようになり、「傾聴ボランティア」の養成講座が設けられるようになりました。「聴」の字源には「耳」「目」「心」が含まれていますが、「耳と目と心できく」のが「傾聴」の基本ということです。耳できく……語る相手の言葉によるメッセージに最後まで耳を傾け、理解する事。目できく……語る相手の言葉以外の動き、姿勢や表情、しぐさ、声の調子に注意を払う事。心できく……語る相手の背後にある感情に心を向け、受け止め、共感を示すこと。

幼児・子どもの虐待事件、少年・少女の事件・犯罪、育児疲れや介護疲れによる事件、さまざまのハラスメントによる事件などが起きるたびに、私たちは当事者たちが苦しみ、悩み、訴える声に真摯に耳を傾け聴いただろうか、必要な助けの手を差し伸べただろうかと検証し、反省します。再び同じことが起こらないようにと気を付けますが、そんな努力は無駄だとあざ笑うかのように似たような事件が続きます。

誰もが「傾聴」し、「適切」な支援をすることの難しさを感じているのではないかと思っています。相手が語る言葉の奥にある考えや心情までを聞く側は汲み取り、言葉を差しはさまないでじっくりと聞き、それを受け止めるとはなんと至難の業でしょう。

ところが、神さまはこの「傾聴」をしてくださっています。もともと私たちのすべては神さまに知られていますが、「祈り」においてさらに深く「傾聴」してくださっています。傾聴してやがてその祈りに応えられる神さまの「恵みの時」を用意してくださいます。絵本「きこえる？」はあまり強く意識していなかった神さまの「傾聴」に気付かせてくれました。神さまへの感謝の思いを深めています。

さまざまの音、膨大な情報が溢れ、私たちをとりまく社会の進化のスピードは加速し、慌た

だしさがつきまといます。丁寧に人の話に耳を傾けにくい状況になり、神さまの御声を聞き逃しそうになります。御声を「静まって聴い」て「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」、隣人との関わりの中で謙遜に、丁寧に人に向き合い、「隣人を自分のように愛しなさい。」（マタイによる福音書22章34〜40節）との主イエス・キリストの御言葉を行う者でありたいと願っています。

教会・国家・平和・人権
—とくに若い人々のために（5）

木下裕也（名古屋教会牧師）

戦争とキリスト教会

十五年戦争の時期は日本の教会にとっても最大の試練の時期でした。教会も戦争に協力させられ、クリスチャンたちも神社や神棚の参拝、戦勝祈願、君が代を歌うこと等を強制されました。礼拝堂には天皇の肖像がかかげられ、礼拝説教において滅私奉公[注1]の精神が説かれました。

1940年、宗教団体法が施行されます。宗教団体を国家が支配し、管理統制し、戦争に加担させるための法律です。この法律のもと、翌年には日本基督（キリスト）教団が設立されます。当時のほぼすべてのプロテスタント教会が合同してできた教会です[注2]。ただ、この合同は自発的なものではなく、軍部の圧力によるものでした。「日本基督教団戦時布教指針」という文書には、この教団は国体の本義に徹し、忠君愛国の精神に立って戦争の目的をとげることに邁進（まいしん）し、必勝を祈願するとうたわれています。あきらかに戦争に奉仕する団体となってしまっていたのです。この時期には神道とキリスト教とを折衷（せっちゅう）した皇国主義的キリスト教なるものも現れます[注3]。

当時の教会や信徒たちは、決して自分からすすんで戦争をしかけたわけではなかったと思います。戦争へとなだれ込んでいく国家のありかたに疑問をもち、国家に奉仕することにためらいを覚え、苦悩したと思います。また、あるところまで信仰のたたかいを担ったと思います。戦争はもとより十戒の第六戒[注4]に、いな十戒すべてに背く罪です。

しかし結論として教会は戦争の嵐の中にまき込まれ、じゅうぶんなしかたで抵抗することができなかったと言わなければなりません。聖書に「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」[注5]とあります。戦時下の教会はこの御言葉に立ちおおせることができなかったのです。

わたしたちは、戦争の時代に教会がおちいった罪と弱さを正面から見据える目をもたなければなりません。そして、なぜ教会がキリストの主権に立ち得なかったのかを、歴史を検証する中でしっかり考え抜かなければなりません。
1984年から10年間ドイツの大統領を務めたリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー[注6]は、ドイツ敗戦40周年にさいして「荒れ野の40年」と題する演説をなし、その中で「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在においても盲目となります」との有名な言葉をのこしました。この演説は、戦争の罪をまっすぐに見つめています。罪を告白する人々は幸いです。キリストの赦しの恵みにあずかり、そこから新しい歴史を歩み出すことをゆるされるからです。

注1　自分を捨てて国家に尽くすこと。
注2　34の教派が参加しました。
注3　古事記と聖書の中身は一致しており、皇国日本と聖書の言う神の国は同じであると主張し、キリスト教こそ日本の国体を最も鮮明に映し出すものであると訴え、戦争を聖戦として正当化しました。
注4　「殺してはならない」。
注5　使徒言行録5章29節。

注6　1920～2015。

神のはかりをもつ

人はだれしも、自分こそが正しいというはかりを宿しています。このはかりに照らすなら、いつも自分は正しく、他人は間違っているということになります。もちろん、このはかりそのものが最初から曲がっているのです。人間を超えたお方、正義そのものであられる神のはかりを知るとき、人は初めて自分の曲がったはかりから抜け出して、自分や他者や世界を正しく見つめ、はかることができるのです。神のはかりをもって生きるということはきわめて大切なことです。国家の場合にも、このことは言い得ると思います。

戦時下にあっても受難と抵抗の歴史を刻み込んだ教会やクリスチャンたちがありました。内村鑑三門下、無教会の信徒であった矢内原（やないはら）忠雄[注1]はしばしば日本の軍国主義化を憂い、国のありかたを批判しました。1937年、講演会の席上で神よ、理想を失ったこの国を一度葬ってくださいと語ったことがきっかけで、大学教授の職を負われます。戦後は復職し、日本が平和国家となることにも力を尽くしました。

愛国心ということがよく言われます。クリスチャンにとって国を愛するということが成り立つかどうかということには議論があります。クリスチャンはキリストにあって、もはや自分の国だけを愛するという次元を超えているとも考えられるからです。そこではもはや「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女も」[注2]ないからです。

当時の無教会の人々の場合には、みな国を愛する思いをもっていました[注3]。ただ重要なのは、彼らの場合にはキリスト教信仰の立場から、神のはかりに立って愛国心を考えるまなざしをそなえていたという点です。

矢内原は、国を愛するとは自分の国のありかたをそのまま正当化し、良い部分だけを見て都合のわるいところは隠すということではない、国を神の正義のもとに立たせ、神の正義と平和を映し出す歩みへと導くことこそ真の愛国心であると論じました。そして、神のはかりのもとに置かれていることを忘れ、偏狭なナショナリズムをふりかざして自己中心的なふるまいに走るなら、その国はいかに軍備をかため、経済的に豊かになっても滅びを免れ得ないと警告したのです。

これは預言者的警告そのものです。事実矢内原は旧約聖書の預言者たちの信仰と行動をきわめて重んじていたのです。

注1　1893～1961。

注2　ガラテヤの信徒への手紙3章28節。

注3　内村鑑三自身も、自分は「ふたつのＪ」すなわちイエスと日本に命をささげると語り、無教会主義とはこの日本に真のキリスト教を根づかせるための取り組みであると主張していました。

日本国憲法（1）

太平洋戦争は日本の無条件降伏をもって終わります。日本の敗戦は、明治の時代からずっと続いてきた大日本帝国憲法のもとでの国のありかたの終わりをも意味していました。連合国[注1]軍最高司令官総司令部（GHQ）はただちに日本の占領[注2]を開始し、軍国主義と国家主義を除き去り、日本を民主主義国家にするための政策をすすめました。敗戦の年、1945年の12月には神道指令によって国家神道が廃止され、神社は宗教法人となり、宗教団体法も廃止されてあらたに宗教法人法が制定されました。46年1月には天皇はみずから神格を否定する詔書を出しました。翌年5月には大日本憲法にかわって日本

国憲法が施行されました。

日本国憲法は明確な立憲主義に立っています。つまり、政治のありかたを最高法規である憲法に定め、憲法に反する権力の濫用を排していこうという意志をはっきり持っているのです。政治をつかさどる者はいつも国民の幸せのために権力を用いるとはかぎりません。もっぱら自分の利益をもとめ、そのために国民の権利や自由を奪ったり、ときには戦争を起こして多くの人々を苦しめ、傷つけるということも起こります。そうした権力の暴走をおさえる仕組みが大日本憲法ではきわめて不十分でした。その点が、日本国憲法では大きく変わったのです。

日本国憲法は三つの原理のもとに成り立っています。第一に、国民主権です。主権とは国を治めるための権力です。大日本帝国憲法ではこれを天皇が持つ[注3]とされており、そのため国民の権利や自由はおおはばに制限されていました。

日本国憲法は、主権は国民の一人一人の手にあると定めています。つまり政治をゆだねられている者たちは国民により選ばれ、それゆえ国民の意志にしたがい、国民が幸せな生活をいとなむために責任を負っているということです。国民主権とは、憲法は国民自身の手になるという意味でもあります。たとえば政治家が最高法規である憲法を軽んじたり、これを勝手に変えたりすることはゆるされていないのです。そういう点でも、国民のひとりひとりが政治のありかたを見守る必要があります。憲法も政治家も一部の権力者のものではなく、国民のものです。国民が政治家たちに憲法の定めのとおりの政治をさせなければならないということです。

国民主権とともに大切な定めは、三権分立（さんけんぶんりつ）です。国を治める権を政府が用いる場合、これを立法権[注4]、司法権[注5]、行政権[注6]の三つに分けて、それぞれの機関に担わせるというものです。こうすることによって権力が特定の場に集中し、濫用されることを防ぐのです。

注1　日本と太平洋戦争をたたかった国々。敗戦後から数年の間、日本は連合国の占領下に置かれました。

注2　ある国が他の国を軍事力によって支配すること。

注3　日本国憲法のもとでは、天皇は「日本国の象徴」「日本国民統合の象徴」であり、その地位は「主権の存する日本国民の総意に基く」と定められています（1条）。

注4　法律を定める権。国会が有します。

注5　裁判を行う権。裁判所が有します。

注6　法律にしたがって政治を行う権。内閣が有します。

神様に信頼するということ

保田広輝（長丘教会員）

【新改訳 詩篇 62篇5〜8節】

「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。
神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。
私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。
民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。セラ」

アメリカで2006年に公開された「フェイシング・ザ・ジャイアント」という信仰の映画があります。ジョージア州のバプテスト教会が自主製作し、話題になった映画ですが、とあるミッションスクールのアメリカン・フットボール部の成長物語です。

一度も試合に勝ったことがない万年最下位の弱小チームのコーチである主人公は、日々熱意を持って指導していましたが、部員たちは弱気で、いつも集中力に欠けていて、授業の成績が悪く居残りさせられる部員もいる中で、成果が上がらず思い悩む日々を過ごしていました。小さな不幸が立て続けに起こったり、部員の保護者たちからはコーチを解雇しようとされたり、子供ができない原因が主人公自身にあると医者から告げられたりと、全てが悪い方向に向かい、人生に対する希望を失いかけていた主人公が、老紳士クリスチャンの助言をきっかけにして、悔い改め、み言葉に基づいた祈りの生活を始めることにより、自分だけでなく、周りも変えられていきます。

そして、主人公は新しいチームの指針を作ります。「聖書の教えに従うこと、全て神様の栄光のために生きること」という明確な方針を部員に示します。それだけでなく、まず自分が模範となりながら、部員たちの生活全般にわたる指導も始めていきます。そうして、ひとりひとりの部員が、持っているものを全力で神様のために使いながら、自分の置かれた場所でキリストの弟子に造り変えられていく、という素晴らしい映画です。

この映画に、このようなフレーズが出てきます。「勝敗は小さなこと……神様をあがめるため、我々はここにいる……人生で最も大事なのは、神様を愛し、他者を愛すること。全勝しても、それができないなら無だ……イエスは人のために死に、人はイエスのために生きる……プレーだけではなく、人間関係や目上の人への敬意で神様をたたえよう。教室でもネットを使う時でもだ。このチームで神様のみ業を示そう。常に全力を尽くせ。勝って神様をたたえ、負けても神様をたたえる。どちらでも、態度で神様をあがめよう。私は全力で神様を敬い、結果はお任せする」

私はこの映画から、「たとえそうでなくても」の信仰、どんな試練の時も、たとえ勝負に負けても、人生に挫折したとしても、神様から与えられている人生を感謝し、神様を賛美して、神様を愛することの大切さを学びました。これが神様を信頼することなのだと思います。しかし、私たちが試練に遭うとき、苦しいとき、病気になったとき、生きる希望がなくなってしまったとき、神様は生きておられるのだろうか、神様

は私の祈りを聞いておられるのだろうか、と苦悩します。

私たちの信仰生活を脅かすものは失望だと思います。「あぁ、今日も神様は祈りを聞いてくれなかった」、「まだ神様はこの苦しみから解放してくれないのか」と落ち込む、そのような失望です。失望というのは長引くものです。ですから、失望と向き合うことが大切です。

失望と向き合うためにすることは、まず自分の願いや叫びを包み隠さずにさらけ出して、神様に自分の心をすべて注ぎ出すことです。その後に手放す自由が与えられます。心を注ぎ出すことなしに、私たちは自分の願いや叫びを手放して、「御心がなりますように」と神様に委ねることはできないと思います。

多くの人たちは、苦しみに対して誤った態度を取ってしまいます。苦しみを受け入れないで、向き合おうとしない。しかし、クリスチャンにとって苦しみは、産みの苦しみです。苦しみを受け入れて初めて、産みの苦しみとなります。私たちは、たとえ神様がくださる良いものであっても、自分の願い通りのものでなければ、受け取ることを拒否してしまいます。

確かに苦しみは味わいたくないものですが、み言葉に支えられながら、苦しみを忍耐していく中で、私たちの祈りが聖別されて、「私の人生はこうでなくてはいけない！」という執着がなくなるとき、私たちは自由にされて、どんな苦しみを抱えていたとしても、神様が与えておられる自分の人生を感謝できるように変えられていくのだと思います。

そうして今まで見えずにいた、神様がくださる多くの恵みを感じられるようになって、「神様は真実なお方だ。み言葉は真実だ。神様は決して私たちをお見捨てにはならない。神様は、私たち我が子にかかわる全てのことに、心を注いでくださる」というような神様への信頼が芽生えてきます。

私たちは、思い通りにならない時に忍耐することで謙遜にされて、神様への信頼を学びます。そうして、平凡な日常でも感謝する心が生まれてきます。苦難を乗り越えた時はもちろん、平凡な日常でも感謝することで、神様への信頼はますます深められていくのだと思います。

信仰とは、何かの行いではなく、神様に対する信頼です。祈りが叶えられたから、祝福されたから、自分が幸せだから、信頼が生まれるのではなく、神様への信頼は試練の中でこそ生まれるのです。死のような試練から生き返り、絶望の中でも、キリストの力がまた私を生き返らせてくださるのです。

【新改訳 ヘブル人への手紙12章2節】

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」とあるように、信仰の創始者はイエス・キリストです。ただイエス様を見ていればいいのです。すべて失い、すべて諦めたとしても、目には何の証拠が見えなくても、最後の瞬間までイエス様を見上げることが大切なのだと思います。

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

1月1日　　祈りの手本、主の祈り。祈りとは何か　聖書黙想

テキスト	サムエル記上3章1〜10節、マタイによる福音書6章5〜7節
子どもと親のカテキズム	問84，85
参考教理問答	ハイデルベルク信仰問答 問116
	ウェストミンスター小教理問答 問98

問84　神さまが聖書を通して示された祈りの規準はどこにありますか。

答　イエスさまが祈りの手本として教えてくださった「主の祈り」の中にあります。

問85　それでは、祈りとは何ですか。

答　祈りとは、まことの神さまに私たちの心を向け、神さまとの交わりの中で神さまとお話しすることです。

〈主イエスの教えられた「祈り」のあり方〉

わたしたちの主イエス・キリストは、弟子たちに祈るときの心と正しい態度とその理由を、よく教えられた。それは、第一に、「偽善者のようであってはならない」(マタイ6章5節）ことである。それは、人の目や体面を気にして祈るのではなく、ただ神に心を向けることである。「隠れたところにおられるあなたの父に祈」ること（マタイ6章6節）である。それは、まことの神への信仰を知らず、人間本位に願い事を重ねる「異邦人のようにくどくどと述べてはならない」(マタイ6章7節）ことである。その理由は、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じ」(マタイ6章8節）だからである。

このように、主イエスの教える祈りのあり方は、まことの神の御前に祈ることを教えると同時に、神が祈りを聞かれる御方であり、また、祈る前からわたしたちに必要なものを知っておられることを信じて祈ることである。

主の祈りは、その意味で、単なる祈りの定式ではなく、わたしたちが絶えず、祈りの「手本」として覚えるべき、祈りの規準である。

旧約聖書において、アブラハムは、神と対話しつつ、ソドムのために執り成しをした（創世記18章16〜33節)。また、モーセは、燃える柴の中からの神の声を聞き、自分の性格の不安を口にして、神と対話した（出エジプト記4章10節)。サムエルは、主からの呼びかけに答えて、「どうぞお話しください。僕は聞いております」と言い、主と対話した（サムエル記上3章10節)。

このように、祈りは、神への人間の定式化された宗教的行為が第一ではなく、本来は、神と人間の間の対話であり、それは、親しく神を呼び、また、不安や恐れの中でも、神に率直にそれを申し述べつつ、神の声（御言葉）に応えること、人格的応答関係そのものである。

〈「まことの神」を信じて「祈る」私たち〉

『子どもと親のカテキズム』そのものが、その題名の示しているとおり、子どもと親の対話を想定し、家庭礼拝において、聖書の言葉とともに、子どもと親が、教理問答について、語り合うことを促している。人間的に言えば、それは、ちょうど、親子が親しく語り合うように、神と、キリストのあがないのゆえに、神の子とされた私たちが親しく対話することそのものである。

「まことの神さま」とは、このカテキズムにおいて繰り返し用いられている大切な言葉であり、この「まことの神さま」を「知る」ことの必要がはじめから教えられている（問2、6、7)。そして、問8では、「聖書の語っているまことの神さま」について、「目には見えない霊なる方で、『あなた』と呼んで、お話できる神さまです。……」と教えられている。そして、問9では、「生きたまことの神さまはただひとりだけです」と告白され、偶像礼拝を戒め（問10)、「三位一体の神さまを信じます」との告白に続く（問11)。

このように、カテキズムにおいて、まことの神を信じることと、祈りの結びつきが教えられてい

る。

この意味で、「まことの神さまに心向け、神さまとの交わりの中で、神さまとお話しすること」こそ、まことの、真実の祈りと言える。

〈「まことの神」への祈りと導かれる〉

それでは、私たちは、どのようにして「まことの神に心を向ける」ことへ導かれるだろうか。それは、この後の問答において解説・展開されていくように、主イエスのあがないを知り、聖書の御言葉によく耳を傾けることによってである（問86,87)。そして、「神さまとの交わり」をともにする教会の礼拝をともにすることである。なぜなら、「わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わり」（ヨハネ一1章3節）であるからである。

そして、まことの「神は、わたしたちの心よりも大きく、すべてをご存じだから」「わたしたちは心に責められることがなければ、神の御前で確信を持つことができ、神に願うことは何でもかなえられ」（ヨハネ一3章20,21節）る。それは、「わたしたちが神（キリストの愛）の掟を守り、御心に適うことを行っているから」（ヨハネ一3章22節）である。「その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うことです」（ヨハネ一3章23節)。

この意味で、聖霊降臨の日に、使徒たちが、祈りを一つにしていたことを思い起こすことは、とても大切である。なぜなら、福音書において、主イエスと共にいながら、弟子たちが心を一つにして祈っていたことを認めることは一度もない（かえって、だれが一番偉いかと議論したこともあった：ルカ22章24節）のであり、主イエスの復活と昇天と、聖霊降臨において、ついに、祈りの交わりを一つにして、福音宣教の御業に派遣されることとなったからである（使徒言行録1章15節、2章1節、4章24節)。

それは、この『子どもと親のカテキズム』において、第一部：信じて歩む道(神・キリスト信仰)、第二部：教会と共に歩む道（聖徒の交わり)、第三部：感謝しつつ歩む道（十戒と主の祈り）という構造において、とくに、第二部が据えられていることに注意し、思い起こしたい。

そこでは、「教会の礼拝」において「お祈りし賛美歌を歌い、信仰を告白し、献金をささげて教会の働きに仕える」ことが教えられ（問46)、「恵みを与える方法としての祈り」(問55）について、「イエスさまは、祈り求める者に聖霊を与えることを約束されました。復活のイエスさまは、とくに祈りによって、聖霊において私たちと共にいてくださいます。ですから、いつでもどこでも祈りながら御国への道を歩んでいきます」と結ばれ、感謝しつつ歩む道へと導入されている。

〈「祈り」のもう一つの本質「呻き」に留意して〉

子どもたちに対して、「祈る」ことを教えることは、人間が、神のかたちに造られたことの光栄を教える喜びでる。それは、他の被造物にまさって、神の栄光をあらわす者としての光栄であり、責任であることを積極的に伝えたい。

また、私たちには「祈り」が必要であること、それは、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに臨んでおられることです」（テサロニケ一5章16～18節）と命じられ、約束されているように、呼吸のように、また、事あるごとに、ささげられるもの、そして、「神がわたしたちにお求めになる感謝の最も重要な部分」（ハイデルベルク信仰問答問116）であることを心に留めたい。

そして、このカテキズムで教えられているように、「祈り」は、本来、神との対話であり、それは、神を見るようにお話することであることを伝えたい。しかしながら、そこにある困難は、大人向けといえるハイデルベルク信仰問答では、「神が御自分の恵みと聖霊とを与えようとなさるのは、心からの呻きをもって絶えずそれらをこの方に請い求め、それらに対してこの方に感謝する人々に対してだけ、だからです」とあるとおり、子どもであれ、その魂の葛藤や悩み、不安がないとは限らず、そこに祈りのもう一つの本質があることである。「まことの神に心を向ける」ことが、日毎の神さまとの交わり」と、日曜日の「教会の礼拝」において、具現していることの恵みを感謝して、祈りの交わりと子どもたちを招きたい。そして、主イエスの十字架と復活の恵みによって、祈る子どもとされることを切に祈り求めたい。　　（宮武輝彦）

1月1日　　祈りの手本、主の祈り。祈りとは何か 説教展開例

テキスト　　サムエル記上3章1〜10節
子どもと親のカテキズム　問84，85

〔単元のねらい〕

はじめに　「お祈り」を学ぶことへの招き……「祈りに生きる道」
1　サムエルの母、ハンナの祈りを知る
2　サムエルをとおして、神さまの声を聞き、応答することを知る
3　日曜日の教会学校礼拝におけるお祈りの大切さ……わたしたちの祈りは一つ
おわりに　詩編の御言葉とともに　一日、一年の祈りへの招き

お祈りは、神さまとお話しすること

神さまの御名を賛美し、みなさんのお一人お一人に、神さまの祝福が、この新しい年も豊かにありますように、祈りつつお話したいと思います。

今日から、カテキズムの最後のまとまり（単元）になります。そこでは、「祈りに生きる道」が教えられています。そして、とくに、イエスさまが、わたしたちのために教えてくださった、『主の祈り』をいっしょに学んでいきます。

今、お祈りを「学ぶ」と言いましたけれども、皆さんは、お祈りは、心の中で、一生懸命、神さまに心の願い事を言うことだと思っていませんか。もちろん、それが間違いというのではないのですが、聖書には、「主の祈り」だけではなくて、お祈りの言葉がたくさん書いてあります。

ちょうど、新約聖書と旧約聖書がいっしょになっている『聖書』の真ん中あたりには、「詩編」と言う一番長い書物があります。そこには、お祈りの言葉がたくさん書かれています。神さまの祝福を求めるお祈り、苦しい時に助けを求めるお祈り、また、神さまを悲しませることをして、悔い改めを求めるお祈り、神さまの栄光をほめたたえるお祈りなど、わたしたちのお祈りの心をよく導いてくれるのが、この詩編です。

また、神さまとお話をした人のことも出てきます。アブラハムさんは、ソドムの町が滅びないように、「まことにあなたは、正しい者と悪い者と一緒に滅ぼされるのですか」と訴えながら、とりなしの祈りをしました。

そして、イエスさまご自身が、十字架の上でも、お祈りをされたように、最もよくお祈りをする人として、福音書に書かれています。使徒言行録には、聖霊が降ったとき、弟子たちがお祈りを一つにして集まっていたことも書かれています。

ところで、みなさん、「お祈り」って一体何でしょうか。改めて問いかけてみると、ちょっと、難しいかもしれません。けれども、今日のカテキズムはともてわかりやすく、「神さまとお話しすること」ですと、教えています。

今、一緒に読んだ聖書の御言葉は、サムエルさんのお祈りのことが書かれています。じつは、サムエルさんのお母さんのハンナさんも、とてもよくお祈りをする人でした。そのことも、同じサムエル上の1章と2章に書かれています。

ハンナさんには、長い間、子どもが与えられなかったので、ハンナさんは、言葉にならないほど、うめくように、神さまにお祈りをして、生まれた男の子に、「主に願って得た子供なので、その名をサムエル（その名は神）と名付けた」(サムエル上1章20節）のでした。そして、「主にあってわたしの心は喜び　主にあってわたしは角を高く上げる」(サムエル上2章1節）と、神さまをほめたたえてお祈りをささげました。

このハンナさんのお祈りの中で、サムエルは成長して、「少年サムエル」(サムエル上3章1節）となり

ました。「お祈り」は、神さまとお話することですが、イエスさまが来られる前までは、神さまの声を直接聞いた人たちがいました。それでも、しばらく、その声を聞いた人はありませんでした。サムエルは、神殿で、主なる神さまに仕えていた祭司のエリのもとで、いっしょに主なる神さまに仕えていました。そして、ある夜、サムエルは、エジプトからイスラエルの民が脱出したときのしるしである、「神の箱」が置かれた神殿で寝ていました。

その時です。三度、主なる神さまが、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれ、その度ごとに、エリのもとへサムエルは行くのですが、エリはサムエルを呼んでいませんでした。

祭司のエリは、3章8，9節に書いてあるように、「少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った」のです。「戻って寝なさい。またもし呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい」と、サムエルをさとして教えました。

そして、「主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれました。『サムエルよ。』サムエルは答えました「どうぞお話しください。僕は聞いております」。

わたしたちは、今、このサムエルと同じように、神さまとお話しすることができます。どのようにしてできるでしょうか。それは、神さまの言葉が書いてある聖書の言葉に聞くことによってです。

そして、大切なことは、神さまは、聖書の言葉とともに、わたしたちの心に、聖霊を与えてくださって、サムエルと同じように、わたしたちに、「神さま、どうぞお話しください。僕は聞いております」という、へりくだった、謙遜（けんそん）な心を与えてくださることです。

今の時代、旧約の時代とちがって、直接、神さまの声を聞くことはありません。でも、これは、神さまが、わたしたちにお話してくれないということではなく、聖書の言葉をとおして、聖霊によって、わたしたちの心に、神さまが語りかけ、お話をしてくださるということです。

ですから、わたしたちのお祈りは、聖書の御言葉にしたがって、お祈りするときに、必ず、聞かれます。それは、これまで学んできたように、十戒の言葉に聞き従うことです。そこでは、「ただひとりのまことの神さまだけを、私たちの神さまとしてあがめ、信頼し、心から礼拝すること」が求められています（問63）。また、「私たちの安息日は、キリストが復活された日曜日です。神さまは、この日を主の日として、特別に取りわけ、教会で礼拝をささげ、救いの祝福を喜び、きよく休んで六日間の歩みに備えること」が求められています（問69）。

ですから、私たちのささげる「お祈り」は、独りよがりなものではなくて、イエスさまの救いにあずかる人たちが皆で、一つの心でささげるお祈りであることを忘れないようにしましょう。聖霊降臨の日に、弟子たちが、一つの心で、エルサレムに集まっていたように、今、ここで、私たちも、お祈りの心を一つにしましょう。お祈りの心を合わせるところに、イエスさまがいっしょにいてくださいます。

今日は、一年の始まりの日でもあり、日曜日でもありますが、今年も、365日、毎日、どんな時でも、お祈りをまことの神さまにささげつつ歩みましょう。そして、サムエルさんのように、「主よ、お話しください。僕は聞いております」という、言葉と心と態度で、神さまに心を向けるようにしましょう。その時、必ず、神さまは、わたしたちの心の願いを、救い主イエスさまの恵みによって、聞き上げてくださいます。最後に詩編の御言葉に聞きましょう。「昼、主は命じて慈しみをわたしに送り　夜、主の歌がわたしと共にある　わたしの命の神への祈りが。」（詩編42篇9節）「床に就くときも御名を唱え　あなたへの祈りを口ずさんで夜を過ごします。」（詩編63篇7節）　（宮武輝彦）

〔今週の暗唱聖句〕　フィリピの信徒への手紙 4章6節

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。
何事につけ、感謝を込めて祈りと願いとをささげ、
求めているものを神に打ち明けなさい。

1月1日　　祈りの手本、主の祈り。祈りとは何か 小学科下級

サムエル上3:1～5をよみましょう。

1. 少年の名前は何ですか？だれにつかえていましたか？

2. 主によばれた時、サムエルはだれによばれたと思ったのですか？

サムエル上3:6～10をよみましょう。

3. サムエルが3回目に呼ばれた時、エリが教えてくれたことは何でしたか？

4. サムエルは主に何とこたえましたか？

5. あなたにも、神さまはよびかけてくださっているでしょうか？

1月1日　　祈りの手本、主の祈り。祈りとは何か　中学科

サムエル上3:1～5を読みましょう。

1. サムエルは誰に仕えていましたか？

2. この時、」サムエルとエリはそれぞれ何をしていましたか？

3. なぜ、サムエルはエリに呼ばれたと思ったのですか？

サムエル上3:5～10を読みましょう。

4. 呼ばれているのは主であるということに、誰が気付きましたか？

5. エリはサムエルに何と助言しましたか？

6. あなたにも、主は呼びかけておられるでしょうか？その言葉に、素直に耳を傾けることができますか？

1月8日　祈りに生きる道・神との会話　聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 11章1〜13節
子どもと親のカテキズム　問86
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問98
ハイデルベルク信仰問答 問116，問117

問86　私たちは罪人なのに、神さまと交わり、神さまとお話しすることができるのです。
答　はい、できます。私たちは、イエスさまによって罪を赦され、神さまの子どもとされ、神さまと交わり、お話しできるようにされています。ですから、私たちはイエスさまのお名前によって、子どもらしく素直になんでもお祈りします。

〈聖書テキストの解説〉

1節から4節までで主イエスは弟子たちの求めに答えるかたちで祈りの手本となる「主の祈り」を教えられた。ルカ版の「主の祈り」は私たちがよく知っている「主の祈り」とは異なっている。それに二つのたとえ話とその間に9節と10節の有名な御言葉が続いている。最初のたとえ話は夜中に友の家にパンを求めて来る訪問者のたとえである。ここでは熱心に求めることの大切さが教えられている。真夜中でその家の者がみんな寝てしまった後という願いをするのにはとても困難な状況であろうとも一生懸命に願い求めることの重要さを教えられているのである。

そして続く二番目のたとえ話では最初のたとえ話の友達よりさらに近い関係である父親が求める相手である。父親は愛する子どもに対してはその願いをかなえる。たとえその父親が罪人であったとしても自分の子どもの願いであるのならかなえるはずであるということを教えている。

13節では、相手は父親よりもさらに近い天の父である。人間の父親、それも罪人である父親が自分の子どもに対してはその求めに応ずるのならましては天の父は私たちに対して全てのものを上回る最上の存在である聖霊を私たちに与えてくださるのであることが教えられる。聖霊とは私たちを励まし、慰め、力づけ、導くお方である。それは救われ神の子どもとされた私たちへの神さまの愛の証である。

〈子どもカテキズムの解説〉

本問は前の問85の祈りとは私たちが神さまへ心を向けて神さまとの交わりの中でお話しすることであるという答えを受けて、では私たち罪人であり神さまとの交わりを絶たれた存在がどうして再び神さまとのお話しすることができるという交わりの中に回復されるのかを問うている。それは主イエスにより罪が赦されて神さまの子どもとされることによるからである。神の子としての特権である神さまとの交わりを回復され、そのことによって神さまとのお話しができるすなわち神さまに対して祈りを献げられるという特権に与るようになるのである。

「イエスさまのお名前によって」とは、主イエスは神の御子であられるので私たちの祈りをとりなして下さるお方である。その主イエスの執り成しによって私たちの祈りは神さまに届けられるのである。神の御子である主イエスがとりなしてくださるので私たちは素直になんでも神さまに対して祈り求めることができるのである。まるで父親にねだるように父なる神さまの愛を信頼して願い求めることができるのである。ハイデルベルグ信仰問答問117の答えには「ただ主キリストのゆえにこの方がわたしたちの祈りを確かに聞き入れてくださるという、揺るぎない確信と持つ」ことが求められているとある。

別の言い方をすれば、神さまの御心を私たちの側が忖度して、神さまの御心を推し量り、その神さまの御心にかなうような祈りをする必要がないのである。もしかしたらこんなお願いをしたら神

さまから叱られるのではないだろうかとか、こんな願いをしたらもう神さまは私との関係を断ってしまわれるのではないだろうかというような心配は一切無用なのである。恐怖心を持ちながらではなく、ビクビクしながらでもなく神さまの絶大な愛を信頼して祈ることが大切なのである。自分の祈りを神さまの御心に合わせる必要はない。それは行き過ぎた敬虔と言えるのではないだろうか。神さまの御心を推し量ることは（人間には不可能なことであるが）絶大にして無限な愛をお持ちである神さまを信頼していないということになるのではないだろうか。また、それはこの程度なら神さまはかなえてくださるのではないかと神さまと交渉していることにならないだろうか。よそ行きの祈り、着飾った祈り、心にもない祈り、他者に受け入れられる祈り、教科書的で出来が良く優等生の祈り、他の人に聞かせるための祈りを献げることは本来必要ではないはずである。ただし祈りを共にする者のことを配慮する必要はある。

〈黙想〉

10節から13節のたとえ話で出てくる「卵」にこだわって黙想してみた。ここでは新共同訳聖書は（口語訳、新改訳とも）たまごを「卵」としている。日本語では「卵」と「玉子」とは別物である。「卵」とは調理されていないたまごであり、「玉子」とは調理されたたまごのことである。「生卵」であり、「玉子焼き」なのである。ギリシア語原典では「won」となっている。この言葉自体には日本語にある「卵」と「玉子」の区別、すなわち調理されたものか、あるいは生のものであるかの区別はないようである。参考までにイスラエルを含め諸外国においてはたまごを生で食べる習慣は古くからなかったようである。

子どもが父親に求めるたまごとは、父親が子どもに与えるたまごとは「卵」であろうか、それとも「玉子」であろうか。与えるのが母親であればほぼ間違いなく「玉子」の方であろう。ここでの卵は魚と並列的に用いられているので食物という意味に他ならない。しかも、害を与える蛇やサソリとの対比の中で言われている。それらを考え合わせると、たまごは子どもにとって食物として益となるものとして、すなわち空腹を満たしさらに栄養となるものとして言われているのである。親が子どもに与える食物であるのだからそれは子供を養い育てるものである。ここまで考えれば、たまごが「卵」であろうと「玉子」であろうと大差はないように思える。しかしあえて言えば調理する技量も手段も持たない子どもにとっては「玉子」の方がより親の愛情を感じられるものであろう。個人的なことではあるが、母が夜勤で家にいない時に父が下手ながら作ってくれた玉子焼きを思い出した。

天の父は人間の父以上の存在である。その天の父が与えてくださるのは最上なもの、それは聖霊である。この聖霊は子どもたちを含めわたしたちの霊的な栄養であり、聖霊によって私たちは霊的に養い育てられる。そして、聖霊は常に私たち共にあり励まし、慰め、進むべき道を示し、導く存在である。

〈子どもたちに対して〉

子どもたちは無意識のうちに親をはじめとした周囲の大人たちの視線を気にしており、また期待に応えようとまでしているはずである。本心を見せまいと自分を繕っている子どもも少なくはないのではないだろうか。しかし、神の子どもとされ、神さまを本当の父親として神さまに向かう時にはそのような仮面をかぶったり、鎧を身にまとう必要はないということを伝えたい。なぜなら、神さまはその子自身の本当の姿を、その子以上に、その子が祈る前からご存じだからである。また、神さまはありのままの存在をすべて受け入れてくださるからである。真っ裸な姿をさらけ出して神さまと向き合い、神さまに素直にどんなことでも祈ることが祈りの本質である。「祈ってごらんわかるから」というプレイズソングがある。この曲の歌詞がまさにこれに当たる。「君は神さまにね、話したことあるかい、心にあるままを打ち明けて、天の神さまはね、君のことなんでも知っておられるんだ、何でもね」(後は省略)。

父親がいない家庭の子がいるかもしれない、そのような場合は言葉使いに細心の配慮が必要となる。しかし、基本的には神さまが人間の父親を超える存在であり、その子のことを最も愛する存在であることを伝えたい。　（坂部　勇）

1月8日　　祈りに生きる道・神との会話　　説教展開例

テキスト　　ルカによる福音書 11章1〜13節
子どもと親のカテキズム　　問86

〔単元のねらい〕

主イエスの十字架の贖いにより私たちは罪赦され、神の子とされたことを伝えたい。さらに神の子とされたということは天の神さまが私たちの父親になってくださったことであり、その天の父は人間の父親以上の愛を私たちに注いでくださっている。祈りとはその天の父とお話しすることあり、天の父に対して感謝し、素直に願い求めることであり、そして天の父は主イエスの執り成しによりその祈りに答えてくださることを伝えたい。天の父は最上なものである聖霊を与えてくださることを伝えたい。

素直に祈りましょう。

イエスさまはある時にお弟子さんたちから「お祈りの仕方を教えてください」とお願いされました。そこで、イエスさまはみんながよく知っている「主の祈り」をお弟子さんたちに教えました。

その後でイエスさまは夜遅くにお友達の家に訪ねて行ってパンをくださいとお願い人のたとえ話をされて、一生懸命にお願いすることの大切さを教えられました。また、子どもの願いに応えるお父さんのたとえ話をされて、お父さんは大切な子どものためなら良い物をあげることをお話しされました。

イエスさまは子どもとお父さんのたとえ話でお父さんは子どもの願いに応える。頼もしくて優しい人であることを教えられています。お父さんは子どもがお魚をほしがっているのに恐い蛇を与えません。お父さんは子どもが卵をほしがっているのに毒をもったサソリを与えません。お父さんは子どもが願っている通りに食べることができて栄養になる食べ物を与えてくれる存在です。決して子どもの害となるようなものを与えません。自分の子どもには良い物を与える存在です。

お父さんは子どものことを愛しています。子どもに何をどんなふうにあげたら良いかいつも考えています。子どもにとって大切なものはなんであるのか、子どもの役に立つものはなんであるのかいつも考えています。その子がどんな性格なのか、どんなことを考えているのか、子どものことをよく知っていて、それで子どもに一番良い物をあげようとします。

天の父、天の神さまはそんなお父さんよりももっともっと私たちのことを愛してくれていて、もっともっと私たちのことを大切にしてくれています。私たちのことを全部知ってくださっています。だから、私たちに聖霊という最高のものを与えてくださっています。

みんなにとってお父さんってどんな人ですか。恐い人、優しい人、遊んでくれる人、色々とお父さんのイメージはありますね。この中でお父さんに何かほしいと頼んだことがある人はいますか。かわいい服がほしい、テレビゲームがほしい、ペットを飼いたいなどなど。そのときお父さんはどう答えていましたか。「いいよ」と言ってくれましたか、それとも「それはだめ」と言いましたか、「誕生日のプレゼントに買ってあげる。」と言うかもしれませんね。

それでは、みんなにとって天の神さまはどんな方ですか。恐い、優しい、何でもできて、何でも知っている。神さまにもいろいろなイメージを私たちは持っていますよね。神さまはお父さんに似た存在です。でも、お父さんよりももっともっと偉大で、もっともっとみんなのことを大切に思っている方です。神さまのことを天の父なる神さまって言うよね。なんで「父なる」っていうか知っている人はいますか。それはね、みんなが神さま

の子どもにされたからです。「どういうこと。私には、僕にはお父さんがいるよ。」と思う人がいるかもしれないね。そうだね、私たちにはお父さんがいるよね。でもね、私たちには人間のお父さん以上のお父さんである天の神さまがいるんだよ。

それはどうしてかというと、みんなイエスさまのことは知っているかな。イエスさまは十字架にかかって死んで、三日目によみがえり、私たちみんなの罪を赦してくださいました。そればかりではなくて、イエスさまはご自分と同じようにみんなを神さまの子どもして下さいました。だから、みんなは天の神さまにお父さんと同じようになんでもお話しすることができます。神さまとお話しするなんてできるのかなと思う人もいるかもしれないね。神さまとお話しすることは神さまにお祈りすることです。イエスさまはみんなのお祈りを天の神さまに伝えてくださっています。

「でも、神さまとどんなお話をしたらいいのわからないよ」、「どうお祈りしたらよいかわからないよ」という子もいるかもしれないね。でも心配する必要はありません。神さまはみんなのことを何でも知ってくださっています。神さまはみんながお祈りする前からみんなのことは何でも知っています。だらか、みんなは神さまになんでもお祈りしていいのですよ。お父さんとお話しするのと同じように神さまとお話しすればいいのですよ。「神さま、おはよう」「神さま、行ってきます。」「神さま、ありがとう」「神さま、ごめんなさい」でいいんですよ。神さまはそんなみんなのことが大好きです。

だから、上手にお祈りしなくてもいいんですよ。お友達が上手にお祈りするから僕も、私ももっと上手にお祈りしようなんて考えなくていいんですよ。神さまには素直になんでもお祈りすることができるのですよ。

そして、神さまのことを恐がる必要はないんですよ。自分の事をかっこよく見せることはないんですよ。だって神さまはみんなの本当の姿を知っていますからね。かっこつけても神さまにはすぐにわかってしまうんですよ。

それから、こんなこと神さまにお祈りしたら怒られるかな、こんなお願いをしたら叱られるかななんて思わなくていいんですよ。イエスさまがみんなのお祈りを神さまに伝えてくださいます。神さまが聞いて下さるようにしてくださいます。だから、神さまはみんながお祈りすることを何でも受け入れてくださるのですよ。

もっと大切なことを言うと、神さまは何でも全てご存知です。もちろん、みんなのことも全部ご存知です。みんなにとって何が大切なのか、みんなとって一番良い物は何なのかを知っていらっしゃいます。そして、みんなにとって一番大切なものを与えてくださるのですよ。それは聖霊なる神さまです。

聖霊も神さまなんですよ。聖霊は目に見えません。でもね、聖霊はいつもみんなのそばにいらっしゃるんですよ。みんなが悲しんでいる時や落ち込んでいる時にはみんなと一緒に泣いてくれます。そして、「大丈夫だよ、僕がついているから」と言ってくれます。うれしい時や楽しい時はいっしょに喜んでくれて、「うれしいね」と言ってくれます。道に迷ったら正しい道を教えてくれます。聖霊とはそんな素晴らしいお方なのです。神さまからの最高の贈り物だよね。神さまはみんなの祈りに応えて、みんなの願いをかなえるために聖霊を与えてくださっています。

(祈り)

天の父なる神さま。今日も素直に神さまに何でもお祈りすることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

(坂部　勇)

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 11章13節 b

天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。

1月8日　　祈りに生きる道・神との会話　　小学科下級

ルカ11:1〜4をよみましょう。

1. でしはイエスさまに何をおねがいしましたか？それはなぜですか？

2. イエスさまはどのようにおしえてくださいましたか？

ルカ11:5〜8をよみましょう。

3. だれかにぜひ聞いてもらいたいおねがいがある時、どのようにしたら、きいてもらえると思いますか？

ルカ11:9〜13をよみましょう。

4. 「もとめる」「さがす」「もんをたたく」とどうなりますか？

5. イエスさまは、どのようなおいのりをしなさいと、わたしたちにおしえてくださったのですか？

6. 天の父がわたしたちにあたえてくださるよいものは、何ですか？

1月8日　　祈りに生きる道・神との会話　　中学科

ルカ11:1〜4を読みましょう。

1. 弟子はイエス様に何を願いましたか？それはなぜですか？

2. イエスはどうお答えになりましたか？

3. 私たちの日頃の祈りと比べて、共通点や違いはありますか？

ルカ11:5〜8を読みましょう。

4. イエスさまは、このたとえ話で私たちの祈りについて、何を教えられましたか？

ルカ11:5〜13を読みましょう。

5. 祈りについての、三つの教えは何ですか？そうすれば、どうなるのですか？

6. 父親は子供に、何を与えるのですか？

7. 天の父が与えてくださるものは何ですか？

1月15日　祈りに生きる道・主の御名による祈り　聖書黙想

テキスト　　イザヤ書 44章15〜17節
子どもと親のカテキズム　問87

問87　この世の人たちもお祈りをしますが、神さまの子どもたちのお祈りと、どうちがうのですか。
答　この世の人たちのお祈りは、神さまのことではなく、自分の益のためだけの願いごとです。神さまの子どもたちである私たちは、神様をあがめ、神さまの御心を求めて祈ります。ですから、聖書の言葉に耳を傾けつつ、祈ることが大切です。

聖書をとおして、わたしたちはまことの神と偽りの神々とがあることを知ります。偽りの神々とは、つまり人間がこしらえ上げた神々です。聖書ではこうした神々を偶像と呼びます。

人間は偶像―自分の願いをかなえてくれる、自分を安心させてくれる神を自分の手でこしらえます。けれども偶像の神々には命がありません。それゆえ、人間に慰めも平安も与えることはできません。それゆえ次々に偶像を作り、とりかえても人はついに魂の平安を得ることはないのです。救いの喜びを得ることはないのです。

イザヤ書44章15〜17節は、偶像礼拝の愚かさを実に印象的なしかたで描写しています。偶像を礼拝する者たちは木を伐り出し、薪をつくって温まり、パンを焼き、肉をあぶり、その残りの木で偶像を造ってそれにひれ伏すというのです。

コヘレトの言葉3章11節は、人には生まれつき永遠を求める思い、すなわち永遠なる神、造り主を求める思いがあると語ります。人間ははじめから造り主を求める者として造られているのです。自分の存在の根元であり、故郷である神を求めずにはおれない、そのようにできているのです。

けれども始祖アダムにあって神に背き、神のもとを離れた罪ゆえに、人間の霊の目は曇らされてしまいました。造り主が見えなくなったのです。それでも、永遠なるお方を求める思いはなお残っています。そして、今やそれはゆがんだしかたで働いているのです。つまり造り主を礼拝するのではなく、造り主によって造られたものを礼拝する。造り主と被造物とを取り違え、本来神でも何でもないものを神だと思い込み、それにひれ伏すのです。愚かな、倒錯したすがたです。

偶像を造るというのは、つまりは自分を神とすることです。自分の勝手な欲望を満足させるために、自分の言うことを聞く神々を自分の手でこしらえる。生きておられる永遠の神と、物を言うことも、人間を救うこともできない、逆に人間のほうであれこれと世話を焼かなければならない無力な神々、命のない、死んだ神々とを取り違える。それは何と愚かなふるまいだろうかとイザヤは語るのです。

この偶像礼拝の愚かさと罪から救い出すために、神は聖書を与えてくださいました。聖書は罪によってゆがんでしまった霊の視力をもとどおりにする、いわば眼鏡です。聖書という眼鏡をかけるなら、神をまっすぐに仰ぐことができるようになる。まことの神と偽りの神々との区別もつくようになる。偶像にひれ伏すことがいかにみじめなふるまいであるのかもわかってくる。そうなれば、人はすでに魂の健康を取り戻しつつあるのです。あるべき、祝福された、すこやかな、幸いな人間のすがたを取り戻しつつあるのです。

そして、聖書はイエス・キリストについて証しをする書物です。聖書は神の独り子、救い主キリストが、わたしたちのために語ってくださった御言葉と、わたしたちの救いのためになしてくださったみわざとを語り示すのです。

神はわたしたちを御子キリストの十字架の贖いによって救ってくださいました。御子キリストにあって、神はわたしたちにとって近き神です。わたしたちはキリストにある神の愛を、救いの恵みを、あたかも手で触るように感じ取ることができます。神さまの愛の命の息吹を身をもって、あふれるほどに覚えることができます。

だから聖書は言います「我らは神の中に生き、動き、存在する」(使徒言行録17章28節)。

そのとおりです。神はわたしたち人間をご自身のかたちに造られました。ご自身に似せて造られました。わたしたちは神の作品です。そして、神に造られただけではなく、神に贖われ、赦され、生かされている存在です。ご自身を見失い、自分勝手に偶像を造り、そのみじめさにも気づかず、生きながら死んでいたわたしたちを、天の父はキリストをとおして生かして、ご自分のもとに取り戻してくださいました。このキリストにあって、神はわたしたちに近い。わたしたちの中におられる。

そうであれば、もはや遠い、あてどもない場所に神を探す必要はありません。聖書をとおして、聖書の証しするイエス・キリストをとおして造り主、贖い主なる神と出会ったなら、だれであっても偶像を捨てて、父なる神のもとに戻っていくでしょう。生けるまことの神のもとに立ち帰らずにおれないでしょう。それが救いです。人間の根本的な方向転換。人生の根本的な方向転換。それは、偶像の神々を捨てて、まことの神に立ち帰ることです。

偶像礼拝にとらえられているかぎり、人間には平安がありません。しかし生けるまことの神のふところに戻り行くなら、わたしたちは安心です。天の父は大いなる愛をもって、わたしたちの不安と恐れを根本的に取り除いてくださるからです。どんな苦しみもわざわいも、どんな恐れも聖書によって、わたしたちの主イエス・キリストによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないからです。

そして偶像の支配から解き放たれ、まことの神にたちかえるとき、わたしたちの祈りは変わるのです。真にすこやかな祈りとなるのです。偶像に向けた祈りは「自分の益のためだけの願いごと」(『子どもと親のカテキズム』問87) にすぎません。命のない神への祈りが真の対話とならず、独り言のようなものにしかならないのは当然です。しかし救われた者の祈りは「神さまをあがめ、神さまの御心を求め」(同) る祈りです。

このような祈りを祈り得るところに、人間の幸いがあります。主は生けるお方であり、主の御名には力があるからです。　(木下裕也)

1月15日　祈りに生きる道・主の御名による祈り 説教展開例

テキスト　　イザヤ書 44章15〜17節
子どもと親のカテキズム　問87

〔単元のねらい〕

救いとは生けるまことの神を知ることにより、偽りの神々の支配から解き放たれることである。そして生ける神との交わりに招き入れられることで、わたしたちのうちに真にすこやかな祈りのいとなみが与えられる。主の御名によって祈ることができる。これが人間の幸いである。真の祈りに生きる者とされたことの祝福をともに確かめ合いたい。

ほんとうの祈り

祈り。それは神さまとの対話です。わたしたちは神さまの子どもです。神さまはわたしたちに「子よ」と呼びかけてくださいます。わたしたちも神さまに「父よ」と呼びかけます。このように神さまとわたしたちとの対話が成り立つのは、神さまが生きておられ、わたしたちも生きているからです。

ただ、祈りにならない祈りもあるのです。それは、偽りの神々にささげられる祈りです。偽りの神々には命がありません。それゆえ人間に呼びかけることもできず、人間が呼びかけてもこたえることができません。

聖書にも、そのような偽りの神々（「偶像」と呼ばれます）のことが出てきます。旧約聖書イザヤ書44章15〜17節で、預言者イザヤは偶像を礼拝する人々の姿を描いています。人々は生活のために森から木を伐り出してきます。そして薪をつくって暖をとります。パンを焼き、肉をあぶり、料理をこしらえます。そして、その残りの木で偶像の神を造り、それにひれ伏し、祈ります—お救いください、あなたはわたしの神。

偽りの神々にささげられる祈りは、偽りの祈りにしかならないのです。

人はだれでも、神さまを求める思いを宿しています。神さまが人を創造されました。それゆえ人は、自分の存在の源であり、魂の故郷である神さまを求めずにはおれない。そのようにできているのです。

けれども、最初の人間アダムにあって人は神さまに背き、神のもとを離れました。この罪ゆえに、人の霊の目は曇らされてしまい、造り主なる神さまが見えなくなってしまったのです。それでも、神さまを求める思いはなお残っている。それで、神さまと神さまによって造られたものを神さまと取り違えて、それにひれ伏す。星を、山々を、岩を、人間を、動物を、鳥を、あらゆる被造物を神だと思って、神に仕立ててその前にぬかずく。天の父、愛の神。このすばらしいお方を捨てて、自分勝手な欲望をかなえるために自分の言うことを聞く神々をこしらえる。生きておられる永遠の神と、物を言うことも、人間を救うこともできない無力な神々、命のない神々とを取り違える。これが偶像を礼拝するということです。イザヤが描いたように、これは愚かな、さかさまの姿です。

この偶像を礼拝する愚かさから人を救うため、神さまは聖書を与え、聖書をとおしてご自身と出会うことができるようにしてくださいました。聖書をとおして、わたしたちは神さまをまっすぐに仰ぐことができるようになるのです。まことの神と偽りの神々との区別もつくようになるのです。偶像にひれ伏すことがいかにみじめなふるまいであるのかもわかってくるのです。

聖書はイエスさまの救いのみわざについて語り示します。わたしたちを罪から救うため、父なる

神さまは御子イエスさまを十字架につけ、よみがえらせてくださいました。ここに、人を救う神さまの力があらわされました。わたしたちはイエスさまの御名によって祈ります。「御名」とはただイエスさまのお名前ということでなく、イエスさまの救いの力そのものを意味します。それゆえ、祈りには力があるのです。

偶像にささげられる祈りは「自分の益のためだけの願いごと」(『子どもと親のカテキズム』問87) にすぎません。命のない神への祈りはほんとうの対話とはならず、独り言のようなものにすぎません。しかし救われたわたしたちの祈りは「神さまをあがめ、神さまの御心を求め」る祈りです。これがほんとうの祈りです。

お正月には毎年多くの人々が初詣に出かけ、そこに祀られている神々に祈りをささげます。けれどもそこでの祈りは一方的なしかたでご利益を求めるか、苦しいときの神頼みのような祈りか、自分自身に語りかけるような祈りか、知られない何者かに呼びかけるような祈りにしかならないでしょう。

わたしたちは聖書をとおしてまことの神さまと出会い、信仰を与えられ、まことの祈りを祈る者とされました。それはほんとうに大きなことです。イエスさまの救いにあずかり、古い人を葬られ、新しい人となり、祈りの姿も、祈りの言葉も変えられていく。それは大きな幸せです。父よと呼びかけることのできるお方を持つ。そこでこそ、わたしたちの命と人生に確かな土台が据えられるのです。揺らぐことのない、確かな命のいとなみが始められていくのです。

アウグスチヌスという人がこのように言っています「神よ、あなたはわたしたちをあなたに向けて造られました。それゆえわたしたちの心は、あなたのうちに憩うまでは安らかではありません」。

まことの神を知り、ほんとうの祈りに生きる。その恵みを与えられていることを感謝しましょう。そして、ここにほんとうの救い、幸いがあることをのべ伝えましょう。　(木下裕也)

〔今週の暗唱聖句〕　ヤコブの手紙 5章16節

正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。

1月15日　祈りに生きる道・主の御名による祈り 小学科下級

イザヤ44:15〜17をよみましょう。

1. 木をどのようにつかったのですか？

2. 木は、自分がどのようにつかわれるか、わかっていますか？

3. 木で作ったかみは、おがんだらすくってくれますか？

イザヤ44:21，22をよみましょう。

4. イスラエルの人たちは、何をわすれてしまったのですか？

5. わたしたちを作られた神さまは、どなたですか？

6. かみさまはわたしたちのそむき（つみ）をどうされますか？

1月15日　祈りに生きる道・主の御名による祈り　中学科

イザヤ44:15～17を読みましょう。

1. イスラエルの民は、木をどのように用いましたか？なぜ、そのようなことをしたと思いますか？

2. 木像の神は、イスラエルの民を救ったでしょうか？

イザヤ44:21，22を読みましょう。

3. イスラエルの民が、忘れてしまっていたことは何ですか？

4. 私たちも、このことを忘れてしまうことがあるでしょうか？

5. かみさまは、私たちの背きの罪を、どのように扱われますか？

6. あなた自身は、このメッセージをどのように受け止めますか？

1月22日　祈りに生きる道・祈りの内容　聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 6章5〜9節
子どもと親のカテキズム 問88

問88　イエスさまが祈りの手本として教えてくださった「主の祈り」の内容は何ですか。
答　それは、神さまへの賛美、感謝、私たちの罪の赦し、願いごと、他の人たちのためのとりなしなどを含んでいます。

〈カテキズムの解説〉

ウェストミンスター小教理問答と比較すると、子どもと親のカテキズムは、祈りについて多くの問答を用いている。そのような付加のひとつが、この問88である。ここには主の祈りが扱っている内容が俯瞰的にまとめられている。主イエスは私たちに、「人間の祈り」ではなく、より地平の広く大きい「主の祈り」を与えてくださった。これは、主イエス御自身の祈りの、私たちへの伝授である。祈られる対象である主なる神の、その御子主イエスが祈る、神様直伝の祈りが、私たちに伝授される。これは特別なことではないか。主の祈りを知る前は、人間の祈りは、下から上への、人間から神様への呼びかけだった。しかしこの主の祈りは、人間がつむぎ出した宗教的な言葉のかたまりなのではなく、御自身が神であられる主イエスが、上から私たちに伝えてくださった、主の息がかかった、特別な祈りの言葉として与えられている。

ドイツの神学者ティーリケは、「主の祈り」について記した自身の説教集に、「世界を包む祈り」と副題を付した。この問88の答えとして語られている主の祈りの内容は、神学的にも優れて包括的であり、かつこれは、縦の地平で天地をつなぐ祈りであり、さらに横の地平で世界を跨ぐ祈りでもある。まさに縦軸と横軸において、天を含めたこの天地を大きく包み込むようなスケールの大きな祈りが、この主の祈りである。

主の祈りの全体を俯瞰する際には、そこで語られる「私たち」「我ら」という言葉と、祈りの最後に付されている「国と力と栄えとは、限りなく、なんじのものなればなり」という結びの言葉に目を注がないわけにはいかない。

問88に列挙されている、賛美、感謝、罪の赦し、願い、とりなしは、すべて「わたし」個人のものではなく、「私たち」「我ら」を主体として祈り出される。そしてその際の「私たち」は、時と場所を超えて、人類全体を背後に背負うほどの大きなスケールを持つ「私たち」である。よって、主の祈りを祈るということは、そのこと自体が、すべての人々と共に、またすべての人々を背後に構えつつそれを代表して神に賛美をすることなのであり、またそれはすべての人々と共に感謝することであり、共に赦され、共に願い祈ることを意味する。

「国と力と栄えとは、限りなく、なんじのものなればなり」という主の祈りの結びは、聖書には記されていない。しかしこれは、この日本という国にありながら、この国を神様のものと宣言することであり、貨幣経済至上主義とも言えるこの世の中にありながら、真の力と栄光は神に属すると宣言する、これはまるで、デモ行進で叫ぶシュプレヒコールのような、極めてラディカルで、社会変革的な主張である。そのような突き抜けた主張で、主の祈りは閉じられる。ということは、この祈りを祈ること自体が、その祈り手をこの世における地の塩、世の光として、神を証して生きる特別な存在に引き上げるのである。

〈聖書テキストの解説〉

主の祈りを俯瞰して、その総合的・包括的な内

容を述べる問88に対応するような聖書テキストをひとつ選択するということは容易ではないが、問88は、主の祈りの解説が始まる直前の問答に位置しているので、マタイによる福音書で語られている、主イエスによる主の祈りの導入の御言葉が、当該聖書テキストとして相応しいと考える。主の祈りを含むマタイによる福音書6章5〜15節の聖書テキストは、ちょうど一連の山上の説教の中心に位置している。山上の説教には、敵を愛することなどの到達不可能なほどの、神の国の高い倫理が示されるが、その御言葉は、私たちの生きる現実との間に深いギャップを生じさせる。その理想と現実のはざまに置かれる私たちは、山上の説教をどのような言葉として受け取るのかを考え抜かなければならないし、その点が正に問われる部分なのであるが、その山上の説教の真ん中に主の祈りが置かれているという事実が、そのことへの回答となっている。もし中心に祈りをもたない山上の説教があるならば、それは私たちの頭の上を通り過ぎるだけの机上の空論となってしまうが、しかし主の祈りは、山上の説教の真ん中にあって、その体の隅々にまで生きた血を送る、心臓のようなものとなり、そこで生み出された力が、山上の説教を生きる私たちの体全体を動かす動力となる。神御自身がそこでは豊かに働いてくださり、御自身が命じられたこと、御自身が約束されたことを、実際に、この私たちの中に実現する力となってくださる。

主イエスは5節から6節で、祈りとは、人間の上におられる神との対話であることを語られた。「偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる」を訳し変えるならば、「偽善者たちは、会堂や大通りの角に立って祈るのが、好きでたまらないのだ」という言葉になる。偽善者たちの人前で見せつける祈りが、ここで批判されている。そして、人に見られることのない密室で祈りなさいと主は言われた。

次に主イエスは7節から8節で、祈りは確かに父なる神によって聞き届けられると教えられた。「異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをしてはならない。」ここで引き合いに出されている異邦人の祈りとは、異教の迷信的祈りである。彼らは長く繰り返して、言葉数を多く祈れば祈るほど、その祈りは聞かれると考えていた。けれども祈りとは、力ずくで神を動かして、こっちの要求に屈服させるようなそのようなことではない。

「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」私たちは、既に私たちを知っていてくださるお方と、祈りによって語り合う。神は私を知っておられる。よって形式的な型にはまった祈りに、私たちはこだわる必要はない。私たちがどんなにロベタでも、祈りが神様によって誤解されることは決してない。祈りは間違いなく、そして確実に、神様のもとに届く。

（吉岡契典）

1月22日　祈りに生きる道・祈りの内容　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書　6章5〜9節
子どもと親のカテキズム　問88

〔単元のねらい〕

この単元のねらいは、祈りを包括的に理解すること。祈りの神学を知ることである。その際に具体的には、主の祈りが提示され、主の祈りを学ぶことによって私たちは祈りに含まれる、神賛美、感謝、罪の赦し、願い、とりなし等を学ぶことができる。

主の祈り：世界を包む祈り

皆さん、「主の祈り」というお祈りを知っていますか？ それを覚えていますか？ それは特別なお祈りの言葉です。なぜでしょうか？ それは、「“わたしの”祈り」ではなく、「“主の”祈り」だからです。「“主の”祈り」であるということは、神様の祈りだということです。少し変に感じませんか。神様は天国にいて、私たちの祈りを聞いてくださる方ですね。けれども、私たちの祈りを受け取る側の神様が、イエス様を通して、ご自分へのお祈りを、私たちに教えてくださいました。手紙を受け取る側が、自分のためにはぜひこういう手紙を書いてねと、わざわざ手紙の下書きを渡してくれるようなものです。少し変なことのように感じますけれども、でもその「“主の”祈り」のとおりに祈ることができれば、そのお祈りは、神様が喜んで聞き入れてくださる、絶対に間違いのない祈りになりますね。

間違いのない祈りと今言いましたけれども、逆に間違った祈りとは、どんな祈りなのでしょうか？ イエス様は、主の祈りを教えてくださる前に、こういう祈りの仕方は間違っていますと、はっきりと教えてくださいました。その間違ったお祈りとは、どのようなお祈りだったのかというと、まずイエス様は、「偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる」(マタイによる福音書6章5節) と語られました。この言葉は、訳し変えれば、「偽善者たちは、会堂や大通りの角に立って祈るのが、好きでたまらないのだ」という言葉です。間違った祈りの第一番目は、人前で見せつける祈りです。神様に向かって祈るよりも、自分が熱心にお祈りをしていますよと、周りの人に自慢するためにお祈りをする人たちが、イエス様の周りにはいたのです。イエス様はその人たちに、奥の部屋に入ってお祈りをしなさいと教えられました。当時の家の奥には、食べ物の貯蔵室があって、その場所は、玄関以外で唯一、完全に戸を閉めることのできる部屋であったそうです。祈る時には、その場所で、人に見られることのない密室で、人に見せるためにではなく、神様にお祈りしなさいとイエス様は言われました。

そして、次にイエス様が教えてくださった間違った祈りとは、くどくどと祈る祈りです。「また、あなたがたが祈るときには、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。」(マタイによる福音書6章7節)

聖書の神様を知らない人々は、長く、繰り返して、言葉数を多く祈れば祈るほど、その祈りは聞かれると考えていました。けれども私たちの神様は、言葉数を多くして、繰り返し波状攻撃のように祈りを繰り出さなければ、祈りを聞いてくださらず、それに答えてくださることのない神様ではありません。お祈りとは、そうやって力ずくで神を動かして、こっちの言うことを聞かせるようなことではありません。

イエス様は言われました。「あなたがたの父は、

願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」(マタイによる福音書6章8節) 神様は私たちのすべてをご存知です。ですから、私たちが願う前から、この心の中にある思いも神様は分かってくださっています。けれどもそれは、だからもう祈る必要はないということではありません。私たちは、既に私たちを知っていてくださるお方と、祈りによって、親しく語り合うのです。難しい要求を通すために、私たちは神様に祈ってお願いしたり、交渉したりするのではありません。私たちの心の内側を神様は知っておられる。ですから、変に緊張して祈ったり、強い言葉で強引に願い出たりしなくていい。型にはまった祈りに、私たちはこだわる必要はありません。そうしなければ祈りは聞かれないのでもありません。それから祈るときに、私たちは、色々な言葉を使って、やたらと器用に、またおしゃべりになる必要もないのです。どんなにロベタでも、なかなか上手に祈れなくても、大丈夫です。心の内側を知ってくださっている神様は、私たちのお祈りと願いを誤解されることは決してありません。祈りは間違いなく、そして確実に、神様の元に届きます。

イエス様は8節で、神様のことを、「あなたがたの父は」と言ってくださいました。私たちと神様の関係は、父と子の関係です。天のお父さんである神様の姿は見えません。けれども私たちは、毎日、毎晩、天の父なる神様と電話で話しをするようにして、お祈りをするのです。お父さんがいるのに、今日一日の間にあったこと、明日のために必要なこと、楽しみなことなどを話さない子供は不自然だと思います。だから私たちは、自然なこととして、神様にお祈りをする。私のことをとてもよく分かってくださっている天のお父さんに、喜んでお祈りをするのです。

そこでイエス様は、お祈りするときには、こういう風に祈るといいよと、正しいお祈りはこれだよと、「主の祈り」を、私たちに教えてくださいました。昔のクリスチャンの人たちは、朝10時、昼の12時と3時に、一日三回は必ずこの「主の祈り」をお祈りしたそうです。「主の祈り」には、お祈りのために必要な言葉が、すべて入っています。

神様への感謝、賛美、罪を赦してくださいという私たちにとってとても大切な願い、そして、自分のことだけではなくて、他の人たちのことも守って支えてくださいというお祈りも、その中には入っています。ですから、「主の祈り」を祈るだけで、私のこと、家族のこと、友達のこと、この世界のこと、神様のこと、そのすべてのことを、私たちは間違いなく、神様に喜ばれるようにお祈りすることができるのです。ぜひ、この大事な「主の祈り」を覚えてください。いつでもこの祈りを、口に出して、あるいは心の中で祈れるようにしてください。そうしたら、そのことによって私たちは本当に力をもらうことができますし、神様に親しく電話や、心のメールをお祈りで送りながら、神様といつも一緒に歩むことができます。

(吉岡契典)

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 6章8〜9節

あなたかたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。
だから、こう祈りなさい。

1月22日　祈りに生きる道・祈りの内容　小学科下級

マタイ6:5,6をよみましょう。

1. ぎぜんしゃは、どうして会堂や大通りで祈りたがるのですか？だれに聞いてほしいのでしょうか？

2. わたしたちは、どのように祈るのですか？だれが聞いてくださるのですか？

3. 神さまは、どんなお祈りをよろこばれるでしょうか？

マタイ6:7〜9をよみましょう。

4. いほう人は、どのように祈りますか？それはなぜですか？

5. 神さまは、わたしたちがいのるまで、わたしたちのねがいをしらないのですか？

6. さいしょにどういのるようにおしえられていますか？

1月22日　祈りに生きる道・祈りの内容　中学科

マタイ6:5,6を読みましょう。

1. 偽善者とは、どのような人のことですか？

2. 偽善者はどのように祈りますか？それにはどんな理由がありますか？

3. 私たちは、誰に対して、どのように祈るべきですか？

マタイ6:7～9を読みましょう。

4. 異邦人はどのように祈りますか？それはなぜですか？

5. あなたも、異邦人と同じ考えを持ったことがありますか？

6. 言葉の少ない祈りでも、神さまは理解してくださいますか？

7. 初めにどう祈るように教えられていますか？

1月29日　主の祈り・わたしたちの父よ　聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書　6章5〜9節
子どもと親のカテキズム　問89
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問100
ウェストミンスター大教理問答 問189
ハイデルベルク信仰問答 問120

問89 「天にまします我らの父よ」という「主の祈り」の呼びかけは、私たちに何を教えますか。
答　私たちは、神様の子どもです。ですから、「私たちの天のお父さま」と呼びかけて祈ります。しかも、独りぼっちではなく、神さまの家族のひとりとして、神さまの子どもたちといっしょに心を合わせて祈ります。

〈父なる神〉

今回のテキストは、山上の説教（5〜7章）の中で、主イエスが「善行」、「施し」(6:1,2) に続いて、弟子たちの「祈り」を問われている箇所である。その中で、祈りの手本としての主の祈りも語られている。

今回のテーマとなる箇所は、「天におられるわたしたちの父よ」(6:9) である。ここで主イエスは繰り返し、「父」である神に言及されている。「隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」(6:6)。「そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」(6:6)。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」(6:8)。

ここにあるように主イエスは、私たちの心が真実に父に向けられることを求めておられる。それは「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。」(6:5) という警告が語られる中でのことである。

「偽善者」という｀ギリシア語には、「芝居の俳優、役者、演技者」などの意味がある。つまり、ここで主イエスが弟子たちに語られている警告は、私たちが長い見せかけの祈りをして自らを演じてしまうところにある。

「偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。」(6:5)。この主の厳しい言葉を通して教えられるのは、祈る私たちの内に、このような「人に見てもらおう」とする強い思いが潜んでいるということである。それは、人目に付きやすい「会堂や大通りの角に立って」祈るほどの大胆さとして語られている。私たちが教会で祈る時も、このような思いから全く自由ではないだろう。子供たちもそうであろう。例えば、子供たちが教会学校の礼拝や分級で祈る時も、周りを気にして立派な祈りをしようとすることもあるかもしれない。

しかし、私たちの内にこのような思いがあることを指摘される中で、主イエスは、一人一人が隠れたところにおられる父に心を向けて真実に祈ること、そして、一人一人が父からの報いを受けて生きることを語っておられる。それは、この天の父こそ、私たちにとっての真実の父であり、「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。」(7:11) という方だからである。この真実の父は、私たち以上に私たちのことをご存じであり、私たちの救いのために必要な全ての良い物を与えてくださる。だから私たちは、自分たちに与えられた試練の時も、心からの信頼をもって「父よ」と呼び求めることができる。

まずは主イエス御自身が、神様に「父よ」と呼びかけられた方である。十字架に付けられた時、主イエスの心は父なる神に向けられていた。主は十字架上で、父に、御自分を十字架に付けた者たちへの赦しを願って祈られた。またゲツセマネでも、父に、その御心を求めて祈られた。キリストを信じる者には、救い主である主イエスと共に、心からの信頼をもって、父よ、と祈る幸いが与えられている。

〈他の人々と共に、他の人々のために〉

イエス・キリストによって神の子とされた私たちが主と共に天の父に呼びかけることと共に、子供カテキズム、ウェストミンスター大教理、小教理が教えているもう一つのことは、私たちがこの祈りをたった一人で祈るのではなく、他の人々と共に、他の人々のために祈る、という点である。

そもそも、これは「われらの父よ」という呼びかけである。教会には、共に「われらの父よ」と祈る神の子たちが与えられている。この祈りは自分だけが孤独に祈るものではない。私たちの父に向けた真実の祈りは、他の人たちと共に祈る祈りであり、他の人たちにも向けられる祈りとなる。ウェストミンスター小教理問100は、6:9の主の祈りの序言について「わたしたちが、他の人々と共に、また他の人々のために祈るべきであることを教えています。」と教えている。

私たちがただ、人のために見てもらおうと祈るなら、それは天の父を無視したものとなり、単に自分のための祈りとなるだろう。隣人にも心を向けず、ただ自分が神のようになり、自分がすべてのものになりかねない。しかし、キリストに救われ、この方に捕らえられた信仰者は、天におられるわたしたちの父よと、他の一人一人と共に、また一人一人のために、心から父に祈ることへと導かれる。

（宮崎契一）

1月29日　主の祈り・わたしたちの父よ　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書　6章5〜9節
子どもと親のカテキズム　問89

〔単元のねらい〕

私たちの祈りの確かさは、それがまずどなたに向けられたものか、という点にある。主イエスは、ご自身が試練の中で、父よ、と天におられる神にすべてを委ねて祈られた。十字架の主イエスを仰ぎ見る時、私たちも試練の中で、父よ、と祈りを注ぎ出すことへ導かれる。

一番信頼できる私たちのお父様

今日から、主の祈りを共に見たいと思います。みんなも、教会で主の祈りを祈ることがあります。この中には何も見なくても祈れる人もいると思います。

でも、祈りとはどなたに向けたものでしょうか。そのことが今日の箇所にあります。祈りは神様に向けたものです。しかも、「天におられるわたしたちの父よ」とあるように、父である神様に向けて私たちは祈ります。

私たちの祈りが、父なる神様に向けられたものであることを知ることはとても大切なことです。それは、天におられる神様は、私たち一人一人にとっての本当のお父様と言える方だからです。この方は、みんなのお父さんやお母さん以上に、みんなのことをよく知っておられます。そして、みんなを助けるために必要なものを与えてくださるお方です。このお父様は、みんなを愛しておられます。それは愛する独り子であるイエス様を与えてくださったほどのものです。そして、この神様に、みんなが心から、父よ、と感謝と願いと助けを求める声を上げるとき、神様はそのことを心から喜ばれるのです。

私たちの心がこのお父様に向かないなら、私たちの祈りや願いはただの自分勝手なものになってしまいます。自分自身が大きくなること、自分自身が立派になること、ただそのことを喜んだり、周りの人たちに自分の立派さを見せつけるような言葉になってしまいます。私たちの中にある罪は、私たちを神様から離し、ただ自分が大きくなり、自分が立派になることを喜びとさせます。

けれども、私たちが天のお父様に祈る時、私たちはひざをかがめて、心から神様に祈ります。そのような祈りは、単に自分の喜びを語るものではなく、神様が喜ばれる祈りです。ここでイエス様は、そのような主の祈りを私たちに教えてくださいました。

そして、天の父よ、と祈る時、私たちにとって大切なことがあります。それは、まずはイエス様ご自身が、天の父よ、と祈られた方だということです。だから、私たちもイエス様と一緒に、神様の子供として、父よ、と祈ります。

イエス様の心は、いつも天の父に向けられていました。地上での歩みをされる中で、いつもイエス様は天の父に祈られ、十字架にお掛かりになる前も天の父の御心を求めて祈られました。イエス様は地上での歩みにおいて、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある神様に祈りと願いとを献げられました（ヘブライ人への手紙5章7節）。そのお姿は、十字架上でも変わることはありません。いいえむしろ、十字架でこそ、イエス様が父なる神様に信頼する姿は明らかにされたのです。イエス様御自身が、私たちのために計り知れない試練と苦しみを受けられる中で、父なる神に信頼し、従われ、父よと祈られました。

イエス様を信じるみんなは、神様の子供です。神様の子供は、イエス様と同じように、試練や苦みの時に、心を神様に向けて父よと祈ります。みんなにも、お父さんお母さんがいますよね。一人一人の家族はみんなにとって大切な存在です。でも、それ以上に私たちにとって大切なのは、私たちに天の父がおられ、この方こそ私たちのことを愛され、苦しみの時や悩みの時に助けてくださるということです。みんなも毎日の生活の中で苦しんだり、悩んだりすることがあると思います。特に友達や家族、その他の人たちとの関係で悩むことは多くあるかもしれません。人との関わりの中で、自分の罪が示されることもあると思います。でも、そのような悩みの中で、私たちが信頼をもって父よと祈り願うなら、このお父様はそのように祈る私たちのことを誰よりも大きく喜ばれ助けを与えてくださるのです。

この祈りは、私一人の祈りではありません。私たちはみんなで一緒に「天におられるわたしたちの父よ」と祈ります。天におられるのは、「わたしたち」の父です。一緒に、父よ、と祈る仲間が教会にはいます。私たちは一緒に、父よ、と祈る教会の一人一人のことも祈りに覚えたいと思うのです。祈りは、イエス様がされたように、私たちが父なる神様を愛し、私たちの隣人を愛する歩みそのものです。

イエス様はその十字架によって、私たち罪人と神様の間に立って下さり、私たちと神様とを結び合わせてくださいました。私たちを父よ、と祈る者にしてくださいました。十字架のイエス様を見つめましょう。そのイエス様の十字架を見る時に、私たちも心から祈る者にされます。　（宮崎契一）

〔今週の暗唱聖句〕　　マタイによる福音書 7章11節

このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。
まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。

1月29日　主の祈り・わたしたちの父よ　小学科下級

マタイ6:5〜9をよみましょう。

1. イエスさまは、だれにおいのりをおしえましたか？（マタイ5:1,2もよんでみましょう。）

2. ぎぜんしゃやいほう人のいのりと、イエスさまがおしえてくださったいのりは、どこがちがいますか？

3. まずはじめに、何といのりますか？

マタイ6:10〜13を読みましょう。

4. しゅのいのりを、あなたのことばでいのるとしたらどうなりますか？

5. みじかいいのりや、こえに出さないいのりでも、かみさまはきいておられますか？

1月29日　主の祈り・わたしたちの父よ　中学科

マタイ6:5〜9を読みましょう。

1. イエス様は、どのような状況でこの祈りを教えられましたか？（マタイ5:1,2参照）

2. 偽善者や異邦人の祈りは、何が間違っているのですか？

3. なぜ、まず初めに「天におられるわたしたちの父よ、御名があがめられますように」と祈るのですか？

マタイ6:10〜13を読みましょう。

4. 主の祈りの内容は、どんなものですか？

5. 私たちの日頃の祈りとの、共通点や相違点はどこですか？

6. 私たちの祈りを、神様は聞き届けてくださっていますか？

2月5日　主の祈り・御名を崇める祈り　聖書黙想

テキスト　詩編 67編3〜4節
子どもと親のカテキズム　問90
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問101
ハイデルベルク信仰問答 問122

問90 「み名をあがめさせたまえ」では、何を祈り求めるのですか。
答　私たちの生活のすべてを通して神さまの栄光があらわされ、
すべての人が神さまのお名前をあがめ、ほめたたえるようになることを祈り求めます。

今回、私たちに与えられている子どもカテキズムのテキストは、「主の祈り」の第一の祈願「み名をあがめさせたまえ」である。前回学んだ「天にます我らの父よ」という呼び掛けに続いて、「神のために」祈る祈りが続いていく。不思議に思う人もいるかもしれない。主の祈りは、初めに神のために祈っているのである。祈りとは、自分の必要を言葉にし、神さまに聞いていただくことだと多くの人が思っている中、主イエスはまず祈るように勧めるのである。「祈ることと生きること」は結びついているとよく言われる。日々の生活のあり方は、日々どのように祈って生活しているかということと深く関係しているというのである。自分の願いばかりを中心にして祈っているならば、本人の気づかないうちに、自己中心的な生き方になってしまっているかもしれない。そういうところに気を付けなければいけないと改めて思わされた。主イエスは私たちが神さまの御心から離れないように、神さまに造られた人間として正しく生きることができるように導いてくださるのである。「祈るときには、こう言いなさい。み名をあがめさせたまえ……。」

さて、子どもたちは、今回の「み名をあがめさせたまえ」という言葉を聞いてどういう印象を抱くだろう。「み名」とあるのだから、神さまのお名前のことが言われていることは、何となく分かるだろう。「あがめる」というのは、「聖とする」ということである。また「礼拝する」「大きくする」と言うこともできる（ルカ1:46,47)。要するに、「神さまのお名前が大きくなるように」とお祈りするのである。これは分かりやすいようで、案外分かりにくい事柄ではないだろうか。逆に、「自分の名前が大きくなる」ということならばよく分かるだろう。有名な人になること、立派な人になること、勉強やスポーツが上手くできるようになること。そのようにして自分の名前を大きくするということならよく分かるのである。私たちが生きる世界もそのような生き方を勧めていると言ってもおかしくはないからだ。しかし、最初にも記したように、「主の祈り」は、自分の名前を大きくしなさい、とは教えていない。み名があがめられますように、神さまのお名前が大きくなりますようにと祈るのである。ある人が「主の祈りは、私たちの生き方に立ち向かってくる」と言っていた言葉を今でも覚えている。ここでもそのことが言われている（問87参照)。自分の名前を大きくしようとうする私たちの生き方に、神さまご自身が立ち向かってこられる。そして、あなたもみ名をあがめる人生を生きてごらんなさい、と招いておられるのである。そこに神さまだけが与えてくださる本当の幸いがある。人間が自分をどれだけ大きくしても、決して到達することができない真の幸いがある。

カテキズムではまず、「私たちの生活すべてを通して神さまの栄光があらわされ」と教えている。この文言を聞いて、ウェストミンスター小教理問答の問1を思い起こす人も多いことだろう。「人のおもな目的は、何ですか。人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。」私たちの人生の究極的な目標を問うのである。それは、自分のために生きることではない。自分の夢を実現したり、目標に到達することでもない。

もちろん、夢の実現のためにあらゆる努力をすることがわるいわけではない。基本的には良いことだと思う。しかし、それがすべてではない。それらが私たち人間の価値を決定的に決めるのではない。私たちは、志し半ばで人生を諦めてしまうことがある。しかし、神さまはそういう私たちを憐れんでくださった。救ってくださったのである。今回の参照聖句の一つであるコリントの信徒への手紙一6章20節に次のような御言葉がある。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」私たち人間の価値を決めるのは、神さまが私たちに何をしてくださったかということである。神さまは独り子であられるイエス・キリストをこの世にお遣わしになり、私たちを罪と滅びから救い出してくださった（ヨハネ3:16,17)。そのために、ご自身の命を代価として支払ってくださった。十字架についてくださった。そのように私たちはキリストに救われた人間として、今、ここに生かされている。ここに私たち人間の真の価値がある。だから、私たちはキリストに救っていただいた人間として、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜んで生きるのである（コリント二3:18)。しかも、「私たちの生活すべてを通して」である（コリント一10:30)。イエスさまによって罪赦されながらも、私たちはまだ自分を主張して生きようとしてしまうところがあるのではないだろうか。「この部分においてはあなたの言うとおりにしますが、ここここだけは私の好きなようにさせてください」というふうに。まだまだ自分を捨てきれない部分があることを正直認めざるを得ない。だから、イエスさまに日々赦していただきながら、新しい思いをもって神さまのために生きていく者とされたい。

次にカテキズムの後半の部分を見てみよう。「すべての人が神さまのお名前をあがめ、ほめたたえるように祈り求めます。」とある。子どもたちは、子どもたちなりの目で敏感にこの世界の様子を見ているのではないだろうか。この世界には、嬉しい出来事や楽しい出来事ばかりが起こっているわけではない。悲しく辛い出来事を見聞きし、あるいは自分自身が経験し、とても傷ついている子どもたちもいるのではないだろうか。なぜそんなことが起こるのか。一言でそのすべてを説明することは難しい。しかし、一つ言えることは、そこには、すべての人が神さまのお名前をあがめていない現実があるからではないだろうか。神さまを中心に生きるのではなく、自分中心に生きている世界がある。神さまではなく、自分をほめたたえて生きている罪深い人間の現実がある。だからこそ、私たちは祈り求めるのである。「み名をあがめさせたまえ」と。「神さま、この世界を、私たちをお救いください。」と。ただ、このみ名を崇める祈りは、悲痛の叫びで終わる祈りではない。次の「み国を来らせたまえ」や「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」という祈りとも重なる部分もあるが、私たちは主の再臨を待ち望みながら、希望をもって祈ることができるのである(黙示録19:7、21:11)。

最後に、今回の聖書テキストである詩編67編の黙想を少しだけ記す。詩人は繰り返し歌う。「神よ、すべての民が／あなたに感謝をささげますように。すべての民が、こぞって／あなたに感謝をささげますように。」(4、6節）この詩編の言葉にじっと耳を傾けるとき、本当に自分は、このような祈りや賛美を心からささげているのだろうか、と正直恥ずかしくなった。本当に心から「み名をあがめさせたまえ」と祈っているのだろうか。正直そうではない。心の奥底に諦めの心があることを認めざるを得ない。この世の悲惨な現実や伝道が上手く行かない現実を前にして、すべての民が神さまに感謝をささげるなどということは、絶対にあり得ないことだと疑ってしまっている。そういう心が今もなお、自分の心の中にあることを、神さまにたいへん申し訳なく思う。詩編67編2,3節にはこのようにある。「神がわたしたちを憐れみ、祝福し／御顔の輝きを／わたしたちに向けてくださいますように　あなたの道をこの地が知り／御救いをすべての民が知るために。」私自身、神さまの憐れみの中で、この詩人のように、心から祈れる者でありたい。「私たちの生活のすべてを通して神さまの栄光があらわされ、すべての人が神さまのお名前をあがめ、ほめたたえることができますように。」　（藤井　真）

2月5日　主の祈り・御名を崇める祈り　説教展開例

テキスト　詩編 67編3，4節
子どもと親のカテキズム　問90

〔単元のねらい〕

お祈りとは、自分の心の中にある願いを言葉にすることだと思っている人が、案外多いのではないだろうか。もちろん、それは間違いではないし、「主の祈り」の中でも、私たちの願いが祈りとして捧げられている。しかし、それがすべてではない。それが第一ではないのである。「主の祈り」は、まず「神のために」祈る祈りを捧げるように勧めるのである。祈りは、私たちの生き方と深く結びつく。「主の祈り」の第一の祈願である「み名をあがめさせたまえ」という祈りをとおして、子どもたちが、まず神さまを大切にして生きることを学びたい。それと共に、神さまを大切にできない私たちを、神さまご自身が憐れんでくださって、イエス・キリストを遣わしてくださったこと。この恵みに感謝し、神さまの栄光をあらわす者として生きていく幸いを伝えたい。

み名を崇める祈り

イエスさまが「祈るときには、こう言いなさい」と教えてくださった「主の祈り」について今週も一緒に学びましょう。イエスさまは「主の祈り」を通して、私たちにお祈りのお手本を示してくださいました。「こうやってお祈りしてごらん」「こうやって生きてごらん」と、イエスさまはいつも私たちに教えてくださいます。みんなの中には、もしかしたら、「お祈りすることなんか簡単だ」と思っている人もいるかもしれません。それは、素晴らしいことかもしれません。いつでも、自由に神さまにお祈りすることができる。それは素晴らしいことです。でも、もう一度、いや何度でも、イエスさまが教えてくださった「主の祈り」の言葉に耳を傾けて、主の祈りを祈ってみるということも、大切なことです。お祈りの中で、自分一人わがままになって、神さまを困らせてしまっているということもあるかもしれません。そうならないためにも、今日も、私たちのお祈りのお手本である「主の祈り」について学んで、一緒にお祈りを捧げたいのです。今日は、「主の祈り」の中の最初のお祈り、「み名をあがめさせたまえ」というお祈りです。みんながお祈りしている「主の祈り」の言葉は、昔の言葉で、少し難しいですから、覚えることはできても、何をお祈りしているか分からない人もいるかもしれません。でも、ちゃんと「主の祈り」の一つ一つの言葉には意味があるのです。

「み名をあがめさせたまえ」―「み名」というのは、神さまのお名前のことです。「あがめる」というのは、礼拝するということです。今日の聖書の箇所にも次のような言葉がありました。「神よ、すべての民が／あなたに感謝をささげますように。すべての民が、こぞって／あなたに感謝をささげますように。」(詩編67:4)「すべての民が神さまに感謝をささげることができますように。すべての民が神さまを礼拝することができますように」とこの歌をつくった人は歌っているのです。また、「あがめる」という言葉は、「大きくする」と言い換えることもできます。「神さまのお名前が大きくなりますように」とお祈りをするのです。これは、分かるようであまりピンと来ないかもしれません。逆に、「自分の名前が大きくなりますように」というお祈りならばよく分かるかもしれません。立派な人になれますように、有名な人になれますように、成績がよくなりますようにというふうに。そうやって、自分の名前が周りの人よりも、大きくなりますようにということならよく分かるのです。目標に向かって頑張ることは大事

なことだと思います。夢を掴み取ること、実現することも素晴らしいことだと思います。でも神さまが教えていることは、それがすべてではないのです。それが一番大事ではないのです。大事なのは、神さまが、イエスさまがみんなに、あなたに何をしてくださったかということです。目標に向かって努力して生きてみたものの、途中で挫折してしまうこともあるかもしれません。人生を諦めたくなるほどに絶望してしまうこともあるかもしれません。また、大きな失敗や過ちを犯して、ずっとそれに引きずられながら生きなければいけないということもあるかもしれません。私たち人間は、自分を大きくしようとすればするほど、惨めになって行くのです。なぜなら、それは神さまが望んでおられる生き方ではないからです。しかし、神さまは、愛と憐れみに満ちたお方です。だから、独り子であるイエス・キリストをこの世に遣わしてくださいました。そして、私たちの罪を背負って十字架について死んでくださったのです。だから、もう私たちは自分を大きくすることに苦しまなくてもよいのです。そのことで苦しむ私たちのために、来てくださったイエスさまを見つめて、歩んでいけば、それでよいのです。

今日のカテキズムにこのような言葉がありました。「私たちの生活のすべてを通して神さまの栄光があらわされ」―「神さまの栄光をあらわす」というのは、神さまの素晴らしさをあらわすということです。今日、お読みした詩編の言葉で言えば、神さまに「感謝」して生きるということです。「神さま、イエスさまを与えてくださってありがとうございます。」「わたしの罪を赦してくださってありがとうございます。」そうやって神さまに感謝しながら生きるのです。私たちは自分ばかり見つめて生きていてはいけません。そこからは本当の喜びも感謝も生まれてきません。自分の心の奥底にあるドロドロとしたものが見えてくるだけです。だから、イエスさまを遣わしてくださった神さまの愛を見つめて生きましょう。そうすれば、必ず、喜びと感謝が沸き上がってきます。

さて、今日のカテキズムの後半では、次のようなことも記されていました。「すべての人が神さまのお名前をあがめ、ほめたたえるようになることを祈り求めます。」この言葉にじっと耳を傾けて聞いていると、世界の様々な現実が見えてきます。私たちが生きている世界には、もちろん嬉しいこと、喜ばしいことがたくさんあります。けれども、一方で、悲しく、辛い出来事もたくさんあります。人と人とが愛し合い、支え合い、助け合うのではなくて、憎しみ合い、傷つけ合い、殺し合う悲しい現実があります。もし、世界中のすべての人が、神さまのこと、イエスさまのことを知っていたら、こんなことにはならなかったのになあと思うことがたくさんあります。だから、イエスさまはこう祈りなさいと教えてくださるのです。「み名をあがめさせたまえ……」。私たちは、すべての人が神さまのお名前をあがめ、ほめたたえるようになることを、諦めずに祈り続けたいと思います。

神さまは、私たちが捧げる祈りにいつも耳を傾けてくださいます。必ず私たちの祈りに答えてくださいます。それは私たちが望んだような答えではないかもしれません。しかし、それは私たちにとって、この世にとって最も良いことなのです。神さまは、イエス・キリストをこの世にお遣わしになったほどに愛に満ちておられるお方です。私たちにわるいものをお与えになるはずはありません。いつでも良いものを与えてくださるのです。だから、「み名をあがめさせたまえ」と祈ること、つまり、「神様のために祈る」ことというのは、自分たちのために何の益もないから無意味だというのではありません。むしろ、神さまのために祈ることが、私たちの幸せにつながっていくのです。同じように、神さまのために生きることが、私たち人間にとっての本当の幸せなのです。

（藤井　真）

〔今週の暗唱聖句〕　詩編 67編4節

神よ、すべての民が／あなたに感謝をささげますように。
すべての民が、ごぞって／あなたに感謝をささげますように。

2月5日　　主の祈り・御名を崇める祈り　　小学科下級

しへん67:1〜6をよみましょう。

1. はじめに、かみさまに何をねがっていますか？

2.「あなたの道」とは、何のことですか？

3. かみさまのすくいを、まだしらない人はいますか？

4. このおいのりは、だれのためのおいのりですか？

5. このおいのりと、わたしたちがいつもしているおいのりは、どこがちがいますか？

6. このおいのりと、しゅのいのりがにているところはどこでしょうか？

2月5日　主の祈り・御名を崇める祈り　中学科

詩編67:1～6を読みましょう。

1. まず初めに、神様に何を願っていますか？

2. 「あなたの道」「この地」とは、それぞれ何を指していると思いますか？

3. 神様の御救いを、まだ知らない人がいますか？

4. 「すべての民が」神様に感謝をささげることは、実現するでしょうか？なぜ、このように祈れるのですか？

5. この祈りとわたしたちの祈りは、どんな点で違いますか？

6. この祈りと主の祈りは、どんな共通点がありますか？

2月12日　主の祈り・御国を求める祈り　聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 第12章31，32節
子どもと親のカテキズム 問91

〈信教の自由の生命的尊さ〉

今朝の単元は、主の祈りの第二祈願を扱います。しかも、昨日は「信教の自由を守る記念日」でしたので、今朝のカリキュラムはこれを積極的に踏まえて編まれています。

信じ告白する自由は、わたしどもの肉体の生命よりはるかに重要な神から与えられた自由であり権利であり責任（教会とキリスト者の務め）に他なりません。それを徹底してわきまえるために、教育を施す権利は誰にあるのかという基本的な前提について確認しておきます。

〈神を知るための人生〉

古代ギリシャの哲学者は、「すべての人は生まれつき、知ることを欲する」と言いました。人間は、知るために生まれて来たのだというわけです。しかも、「汝自身を知れ」と言う有名なソクラテスの言葉を待つまでもなく、世界にある科学的知識を知ることはもとより、人間を知ること、自分自身を見つめること、洞察することをこそ大切にしてきました。それは、キリスト教においても引き継がれた思想です。しかし、教会改革者カルヴァンは、「人生の主な目的は、神を知ること」(ジュネーブ教会信仰問答問一）と言いました。ここにキリスト教（旧新約聖書）の決定的主張が込められています。(「主を畏れることは知恵の初め。」箴言1:7）つまり、神を知ることを通してのみ、自分と世界を「正しく」認識する「知恵」が与えられるのです。

キリスト教教育何より私どもの教会教育の主な目的は、神を全人格的に知ることにあります。それは、「神との交わりに生きる」ことに他なりません。具体的には、神を知り、神に知られている自分自身を知ること。神を喜び、神の喜びの対象とされている自分を喜ぶこと。神の栄光の現れとして創造された自分を知ることによって、自ら神の栄光をあらわそう、たたえようと意欲しつつ生きることとなります。そして、教育の根本は、「良心」を磨くことにあります。キリスト教においては、まさに究極の目標です。何故なら、人間は、神に似せて創造されたからです。従って、神に似た者となるため、新約で言えば真の神であり真の人である主イエスの姿を映し出すためには、「良心」を磨くことが不可欠です。そして、人間の良心を磨くことがおできになるのは、ただ神のみでいらっしゃいます。

〈教育の権利は誰にあるのか〉

教育の主でありその主体は、ただ創造者なる神のみにあります。神は、教育する責任を、第一に親（養育者）に与えられました。「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。（申命記第6章4～9節）同時に、その親自身は、教会共同体の信仰教育によって養われます。親こそがこの共同体において生涯学習を続けるのです。親も子も、共に「神の子」であるという共通認識のもとにみ言葉を学び、これを実践するようにと励ましあいます。こうして教会の交わりに共に生き、共に「学びの家」を受け継ぎ、建てあげて行く務めを生きるのです。その意味で、教会は、親の教育権を「共に行使する主体」と言っても過言ではないと思います。

〈本当の義務教育とは〉

教育権は親にあるという妥協を許してはならない命題は、この国においては闘いとらなければならない課題です。そもそも「義務教育」を、近代

の教育の歴史から顧みるとき、自分たちの「権利」ではなく課せられた「義務」でした。御国(おくに)つまり天皇の支配する国家を「強く」(富国強兵）するための「臣民」(天皇の民）となるために課せられた義務に他なりませんでした。

しかし日本国憲法はついにこれを破棄し、基本的な教育を受ける「権利」を保証しました。「(旧)教育基本法」は、この精神に則って編まれた言わば教育の憲法でした。しかし、第一次安倍政権によって、旧来の悪しき教育観によって改変されてしまいました。さらに今や、憲法改正の議論によって、再び、私たちの教育権が国家に奪われようとしています。信教の自由を守る戦いは、真の「教育権」を常に明瞭にすることによっても担われるべきものです。

〈信仰告白の事態と第二祈願〉

私たちが置かれた政治状況は、上述のように決定的な旧日本への回帰がなされています（第一次安倍政権)。今や、さらに酷いものとされる直前にあります。まさに、信仰を告白すべき事態」に追い込まれていると言っても過言ではないだろうと思います。何故なら、聖書の言う「み国」とは、神の主権的ご支配とその領域のことです。一方、旧憲法は、「御国(おくに)」とは、天皇（権力者）のそれのことでした。今回の憲法改正議論とは、他ならないこの憲法体制へと復帰させることが目的とされたものに他ならないからです。

私たちは、キリストこそ国家の「見えざる」「まことの」「唯一」の主であるとの信仰を与えられています。国家が、信仰（宗教）の領域を侵犯することは許されていません。もっとも分かりやすい例となるのは戦争です。そのとき、十戒のすべてが公然と破られるはずです。私どもの教会もまた、戦前戦中まさに十戒のすべてを破ったのです。しかも、神を神とせず、偶像を拝み、殺し、むさぼってなおキリストの教会を標榜していたわけです。十戒を真剣に学んでいなかったと言われても仕方がないのではないでしょうか。同時に、主の祈りも「お念仏」のようなものとされてしまったと言えるかもしれません。「御国を来たらせたまえ」の「御国」が「主なる神の国」として理解されなかったことは、当時の教会の文書や賛美歌などに明らかです。つまり、全世界を「現人神である天皇の国（神の国)」である「大日本帝国」に統一させる「八紘一宇」の思想によって、聖書の教理はからめとられてしまいました。

〈み国を求めさせる祈り〉

主イエスは、御自身の民を地上の国家に属する民ではなく、父なる神の国の住人とするために、贖いの御業を成し遂げられました。そのようにして、この現実の世界に、神の国を始めて下さいました。主イエスの説教とは、要するに、「神の国は近づいた」だから「悔い改めて」、「私を信じなさい」と言うものでした。そして、やがて私は再びこの地に戻るときに、始められた神の国を一瞬にして完成なさること、そしてその国こそ永遠の国、平和の国であることを示されました。

ただし、それまでは、この地上はなお罪とサタンが力をふるっています。戦争があり、不正があり、不法がはびこっています。しかし、主イエスはまさにその現実のただ中で、この第二祈願を祈れと命じて下さいました。ですから、この祈りを祈るとき、私どもが置かれた時代、国に無責任でいることは決して許されないはずです。御国が来ますようにと祈る者は、「何もせず」に待っているわけにはまいりません。むしろ、み国の拡大を阻み、破壊しようとするいかなる企てにも抵抗することへと促されるはずです。

そもそも、この祈りを祈れと命じられた教会こそ、神の国の地上における前線基地、モデルだからです。それゆえ、「待つ」とは、教会が「教会になり続ける（教会形成)」ことに他なりません。教会によってみ国は地に拡大するからです。この祈願は、教会とキリスト者をして、平和を造りだすための力を求めさせると同時に力を受ける通路となります。それゆえカテキズムは、神の国の平和を実現し、「広げる」方法である「福音伝道」と「愛の働き」(問91）に言及します。この祈りによって奉仕、行動へと励まされて行くのです。

子どもたちもまた、教室で御国を求める者としての実践が求められています。そのための力、勇気は、この祈りによって与えられることを示し、励まし、共に祈りかつ行動してまいりましょう。

(相馬伸郎)

2月12日　主の祈り・御国を求める祈り　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 12章31，32節
子どもと親のカテキズム　問91

〔単元のねらい〕

神の国は、既に私どもの教会において地上に始まっています。教会は、「神の国の中心的現れ」(60周年宣言）です。したがって、教会が教会になり続ける営み（教会形成の戦い）なしに、これを具現することはできません。そのために、主の祈りが与えられています。主イエスは、神の国を求めよと招かれます。父なる神は喜んで、教会に与えて下さると約束されました。子どもは、子どもとして神の国の奉仕者として召され、用いられます。特に、小学2年～4年生くらいの契約の子どもたちの伝道力は、大人たちのそれをはるかに上回り、また神に用いられます。教師も子たちも共に教会と共に、教会を通して生きて行く喜びと使命について確認し合えたら幸いです。

教会といっしょに生きて行こう

今朝も、主の祈りを学びます。最初におさらいします。神さまは、神さまの恵みを与えるために特に三つの方法を与えて下さいました。み言葉と礼典とお祈りです。「み・れ・お」と覚えました。神さまは、この三つの方法のすべてを豊かに用いることができる主の日の礼拝式に今朝もお招き下さいました。ただし、皆は、まだ聖餐の礼典にあずかっていません。ですから先生は、一日も早く聖餐の礼典にあずかってほしいと、その日を楽しみにしながら、子どもの教会の準備をしています。で、み・れ・おの中で、いつでもどこでもできるのは、お祈りです。僕たち私たちは、お祈りを通して、いろいろなお願いごとをすると思います。どうぞ、どんなことでも自由にお願いしてください。神さまの子どもなのですから、少しも遠慮はいりません。そこで、質問します。これまでお願いごとをぜんぶかなえてもらった人はいますか。はい、誰もいません。先生たちも手を挙げません。むしろ、先生の方が、かなわなかった願い事は山のようにあると思います。「それなら、なんでお祈りなんてするの、意味がないじゃん」と不思議に思うかもしれません。その気持ちはよく分かります。でも、先生は、お祈りを止めません。何故でしょうか。それは、お祈りによって、神さまの恵みが豊かに注がれることを、毎日、毎回、体験しているからです。確かに願い事がかなうのは嬉しいです。けれども神さまは、一番すばらしい恵みを必ず、与えて下さいます。それは、イエスさまがいっしょにいてくださることです。どんな願いごとがかなうより、イエスさまがいっしょにいてくださることよりすばらしいことはありません。だから、お祈りはやめられないのです。

さて、主の祈りの二番目のお祈りは、「み国を来たらせたまへ」です。「み国」とは何ですか。み国とは、神さまの国のことです。つまり天国のことです。

それなら僕たち私たちが今いる、ここは、どこですか。地球の上の日本という国です。世界には、今、およそ200の国があると言われています。国が国であるというのは、人が住む場所とそこを治めている人がいるということです。日本にも住む場所があって、今、暮らしています。そこを治めているのは選挙によって政治に参加する人々で、主権者と言います。つまり、僕たち私たちがこの国を治めているわけです。だから日本は国です。

それなら、神さまの国、天国、み国はどこにありますか。イエスさまはルカによる福音書の第17章で教えて下さいました。天国は、まだ目に見えません。どこにある、ここにあると言うこと

もできません。それなら、天国はないのでしょうか。まったく違います。イエスさまは、「あなたがたの間にある」と教えて下さったのです。つまり、そのことを語られたイエスさまが僕たち私たちの真ん中に一緒にいてくださるところ、そこが天国、み国だと言うことです。つまり、み国とは、イエスさまが治めておられるところ、神さまの支配されるところのことです。

み国は、二つに分けることができます。イエスさまを信じて死んだ人は、すぐにイエスさまのおられる天に戻ります。そこを天国と言います。けれどもイエスさまが教えて下さったように、み国は、この日本にもあります。それが、教会です。教会は、イエスさまによって天のお父さまを礼拝しています。礼拝式にはイエスさまが共におられます。つまり、教会の礼拝式こそ、天国に限りなく近いところということになります。つまり、イエスさまは僕たち私たちの教会によって、この町にも天国を始めておられるということです。

確かに、神さまのみ国は、今、教会を通してこの世界、この国に始まっています。しかし、教会をつくっている僕たち私たちひとり一人が、教会の主、頭でいらっしゃるイエスさまに従っていなければ、見えにくくなったり、なくなってしまうことさえあります。ですから、僕たち私たちがどれほど、神さまのみ言葉に素直に従っているか、聖霊なる神さまにすなおに導かれているか、そこが大切になります。

つまり、み国を来たらせたまへと祈ることは、「どうぞ、イエスさまを深く信じれるようにして下さい。私が、イエスさまの言うことをちゃんと聴いて従えるようにして下さい」という意味です。ですから、教会に集う人たちが、イエスさまが主権者で、王さまだと心から信じて従うとき、イエスさまのご支配ははっきりと世界の中に現されます。教会はみ国に近づくことができます。実は、僕たち私たちはまさにそのために神さまの子どもとされているのです。だから、教会に通いましょう。心を込めて礼拝しましょう。

それなら、僕たち私たちは何をしたらよいのでしょうか。それには二つの方法があります。一つは、イエスさまのことをお友だちに伝えることです。カテキズムには「福音を宣べ伝える」とあります。お友だちを礼拝式に、子どもの教会に誘いましょう。もう一つは、「愛の働き」です。これをディアコニアと言います。イエスさまが困っている人、苦しんでいる人の隣人となって下さったように、僕たち私たちも「隣人となる」と言うことです。それは、特に困っている人と一緒にいてあげることです。助けてあげることです。つまり、お友だちになるということです。この二つの方法で、神のみ国はこの世界にどんどん広がって行くのです。

実は、僕たち私たちのこの世界は、真の神さまなんていないのではないかと言う人が多いのです。ときどき、自分の心の中にもそんな気持ちが湧いてしまうこともあるかもしれません。この同じ世界の中で、戦争で子どもたちが殺されています。子どもたちが戦争で人を殺すように教育され、駆り出されています。実は、この国も、70年前は同じことをしていました。何より今、もう一度、そんな国にさせられようとしています。今こそ、主の祈りを祈って、そんな国にならないようにしたいと思います。

最後に、僕たち私たちはどんなにがんばってもみ国を造り出すことはできないことを確認します。み国は、イエスさまが必ずもう一度この世界に帰って来られることによって完成されるからです。この世界は、まったく新しくされて、み国になるのです。だったら、ただ待っているだけで、何もしなくてよいのでしょうか。違います。イエスさまがいっしょにいてくださる人はそうしたくなるのです。そして、イエスさまは、その努力を決して無駄にはなさらないのです。そして、天のお父さまは伝道し、お友だちになろうと努力している人を、神の子どもと呼んでくださいます。天のお父さまは、そんなあなたを最も喜んで下さいます。

（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 12章32節

小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

2月12日　主の祈り・御国を求める祈り　小学科下級

マタイ4:23〜25をよみましょう。

1. イエスさまは、ガリラヤで何をされましたか？

2. イエスさまのしたことを見た人は、どう思ったでしょうか？

3. ぐんしゅうは、なぜイエスさまについて行ったのですか？

マタイ5:1,2をよみましょう。

4. イエスさまは、何のために山にのぼったのですか？

マタイ5:9をよみましょう。

5.「へいわ」とは、どんなことですか？

6. なぜ、「かみの子」とよばれるのですか？

7. 今、わたしたちのせかいはへいわですか？

8.「へいわ」のために、わたしたちにできることは何でしょうか？

2月12日　主の祈り・御国を求める祈り　中学科

マタイ4:23〜25を読みましょう。

1. イエスはガリラヤで何をされましたか？

2. イエスの評判を聞いた人々は、どうしましたか？

3. なぜ、大勢の群衆がイエスに従ったのですか？

マタイ5:1,2を読みましょう。

4. イエスが山に登られたのは、何のためですか？

マタイ5:9を読みましょう。

5.「平和を実現する」とは、どういうことですか？

6. なぜ、「神の子」と呼ばれるのですか？

7. 今、私たちの世界に平和は実現していますか？

8. 平和を実現するために、私たちにできることは何だと思いますか？

2月19日　主の祈り・御心を求める祈り　聖書黙想

テキスト	ルカによる福音書 22章39～46節
子どもと親のカテキズム	問92
参考教理問答	ウエストミンスター小教理問答 問103
	ハイデルベルク信仰問答 問124

問92 「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」では、何を祈り求めるのですか。

答　天においては神さまの御心が完全に支配しているように、地においても、すべてのことにおいて神さまの御心が支配するように求めます。また、神さまの子どもであるわたしたちは、御心に聞き従い、喜んで神さまのお役に立てるように祈ります。

〈子どもカテキズム・聖書テキストの解説〉

主の祈りの第3番目の祈願を扱う問92は本カテキズムでは第三部「感謝しつつ歩む道」3「祈りに生きる道」に位置している。一つ前の2「愛に生きる道」では神への感謝を表す方法として十戒が取り上げられた。その締めくくりに問83は十戒を「父なる神さまの愛の親心」と言い表す。併せて、「祈りつつ、聖霊に助けられながら、光の子どもらしく、喜んで『十戒』を守って歩みます」と語られ、十戒から祈りへと橋渡しをしている。

十戒は何が神さまを悲しませる罪であるか、裏返して言い換えれば何が神さまの御心であるかを示すものの一つである。神さまの御心が天では実現しているが、地では十分には実現されていない、という判断はこの十戒との関連から下される。神さまが愛の親心として示された御心を愛の親心として受け取ることができず、聞き従えないのである。主の祈りで神の御名をあがめさせてください、神の御国が来ますように、と祈る中で、なかなかその祈りが応えられない理由として、祈る私自身、特にその罪が問われることになる。

だが神さまは十戒以外にも愛の御心を示された。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)み子イエス・キリストにより、この世と地に生きる人間を滅びから救い御自身の元に取り戻すという御心を表わされた。この実現のためには罪・悪と徹底して戦い打ち勝つことが必要になる。そのために神さまはイエス・キリストが罪無くして十字架にかかり、罪を償ういけにえとして罪の罰と呪いを引き受け死ぬことを要求された。救いのためとはいえ実に過酷な主の御心を間近にして、相当な葛藤のうちに献げた祈りの一部がマタイ26:39，ルカ22:42である。この祈りなくして、キリストは神の御心を全うすることができなかった。

こうしたキリストの十字架の出来事の後に神さまの御心について語られた聖句の一つがローマ12:1，2である。1節では自分のものでなく神さまのもの、神さまへのいけにえとして自らを献げるという「礼拝」行為が求められている。それは2節でこの世に倣わないこと、何が神の御心であるかをわきまえること、とも言われる。ここで神さまの御心は「何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるか」を示すものであると言い換えられている。更に、この世に倣わないようにするため2節で「心を新たにして自分を（神に）変えていただく」ことを求めている。神さまの御心がこの地にも実現するためには、それを妨げてきた人の罪を取り除くことが不可欠となる。そのために、己の身勝手な野心でなく神さまの御心の実現を望み、自らを神さまに献げること、神さまに喜ばれることをこそ求め、愛の御心を実現させるために罪と戦うことも辞さないものへと変わることが求められる。ただこれは人の一念のみでできることではない。聖霊による生まれ変わり、神の子として絶えず天の父なる神さまに祈り、寄り頼むこと、そして祈りを通して神の御心を「愛の親心」と確信することによるのである。

〈黙想〉

神の御心が天でなるようには地でなっていない。この状況はこの地に生きる子どもたちに大きなしわ寄せをもたらす。近年の日本では子どもが保育園の園庭や公園で無邪気にはしゃごうにも、近隣の大人から「やかましい、近所迷惑だ」と抗議される。更には「騒音を未然に防ぐため」として保育園の建設に反対する動きも顕在化している。そうでなくても、子育て支援を実施するのに必要な少なからぬ経費や手間に皆たじろぎ、子育て環境の改善は遅々として進まない。更には家庭における児童虐待、学校などでのいじめにより心身共に深く傷つく子どもも続出している。この地ではともすれば子どもは面倒がられ、厄介者扱いすらされてしまう。子どもが20歳を迎えた時に大人の仲間入りをする儀式を日本で「成人式」と呼ぶことは、子どもは大人と同等の「一人前の人間」として位置づけられない、との意識を裏打ちする。

他方子どもについての神の御心はこの地の現状とは反対である。イエスさまが人々に話しておられたところに子どもたちが近寄ってきて話が中断する。弟子たちが子どもたちを咎めるとイエスさまは言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(マルコ10:14、ルカ18:16) またヨハネ福音書5章では、子どもが差し出した5つのパンと2匹の魚をイエスさまは手に取って「5000人養い」に用いてくださった。未熟さ、足りなさ、といった点から子どもにマイナスの評価を下すこの世と異なり、神様を天の父としてためらうことなく駆け寄り、すがりつく子どもをイエスさまは喜んでくださる。この神の御心が地でも完全に実現するなら（つまりこの地が天と同じくパラダイスとなるなら)、この地が子どもにとって生きづらい場所では無くなる。

この祈りにおいて、神の御心がなっていなかった地を、神の御心のなる地に回復させる、子どもが生きづらかった場所を生きやすい場所へとひっくり返す働きが要請される。ただの微調整ではすまない。生きづらさの根幹である人の罪を砕かなければならない。このために、子どもを愛するイエス様は十字架の死までも引き受けてくださったのである。

〈子どもたちに対して〉

神さまがこうなりますように、神さまの御心がなりますように、と祈り求めることはわたしと何の関係があるんだろう、と思う子どももいるかもしれない。だが「み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」との祈りは、地に住む子どもたち一人一人に喜ばしい、幸いな状況（パラダイス）を目指す祈りでもあると知ってほしい。そして子どもたちには、私にも深く関わる祈りであるとわきまえて、「御心に聞き従い、喜んで神さまのお役にたてるように」と心を込めて祈ってもらいたい。

（吉田　崇）

2月19日　主の祈り・御心を求める祈り　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 22章39〜46節
子どもと親のカテキズム 問92

〔単元のねらい〕

神さまの御心は本来愛に満ちた「父なる神さまの親心」であるのに、罪ある人間が受け入れることができないために、私たちが生きるこの地では神さまの御心が実現していない。それをよしとせず、なんとしてもこの地を天国（パラダイス）と同じく神さまの愛の御心が実現する場所とするために、天の父なる神さまは独り子イエスさまを十字架にかけるまでなさった。私たちもこの地が神さまの御心の完全に実現するパラダイスとなるよう祈り励むものとなりたい。

この地にもパラダイスを

いつも一緒に祈っている主の祈りについて、どんなことを願い祈るお祈りなのかを今一度丁寧に取り上げています。今日は「み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」というお祈りについて取り上げます。

「み心」とは、天の父なる神さまの御心のことです。こうなるのがよい、という神さまのご判断と言ってもいいでしょう。この神さまの御心が天国で完全に行き渡り実現しているように、私たちの住むこの地でも実現しますように、というのがこの祈りです。

神さまが私たちに示してくださった御心の一つが、十戒です。子どもと親のカテキズム問83を振り返ると、「十戒は、父なる神さまの親心です」と言われていました。光の子どもとして、神さまを愛し、家族や友だちを愛して生きていってほしい、そのためにこうしていこうね、との御心が十戒で表わされていました。

この十戒と照らし合わせた時、私たちが今住んでいる所は十戒が完全に守られ、神さまの愛の御心が十分に実現していると言えるでしょうか。残念ながらそうなっていません。人の命が大切にされないで、傷つき痛んでいる人が何人もいます。私たちの身近にもいじめなどで傷ついている子がいるのだと思います。神さまの御心が実現しないところでは、私たちもまた住みにくい、生きづらいのです。

逆に神さまの御心が十分に実現するなら、つらいことや意地悪なことは遠ざかるでしょう。今この時、天国では神さまの御心が十分に実現しています。意地悪なこと、いやなことをされたり、傷つけられたりすることもありません。こんな天国のことをパラダイス、と言う人もいます。そんなパラダイスにぜひ住んでみたい、と先生も思いますし、みんなも思うことでしょう。

では、神さまの御心がこの地を支配するのを邪魔しているものは何でしょうか。私たち一人一人のうちにある、神さまに聞き従えない心ではないでしょうか。「日曜日には教会に来て、神さまを礼拝しましょう」というのも神さまの御心の一つですが、いつでも素直に受け入れることができているでしょうか。「朝起きてみて、体に疲れが残ってるし眠いから、行きたくない」とか、「学校の宿題が残っているから、日曜も宿題をやるのに使いたい」とか思ってしまうことがあるかもしれません。神さまの御心よりも、自分の思うこと考えることの方がわたしにとっていいことだと思い、神さまの御心を押しのけようとしてしまうのです。

確かに、神さまの御心が示された時、私たちにとって厳しいように感じることがあります。「神さま、神さまがおっしゃった御心のとおりにするなら、僕はボロボロになってしまいはしませんか」と言いたくなってしまう時があります。私たちは

神さまの御心に逆らう罪や悪がある中で、この地の上で神さまの御心を行なうよう求められます。神さまの御心を行なおうとするなら、罪や悪に邪魔されながら、戦いながらとなることが避けられないのです。誰かがいじめられている場面を見かけたとします。神さまの御心は、いじめをやめさせ、いじめられている子を助けるように、ということです。でもその通りにしたら、今度は自分がどうなるだろうか。そう考えを巡らせるうちにためらいを覚えてしまうことがあるのです。

今日の聖書の箇所は、神さまの独り子イエスさまが、天の父なる神さまの御心にたじろぎ、ためらいを覚えられた場面です。人々を罪から救うため、十字架にかかって死になさい、というのがイエスさまに対する神さまの御心でした。イエスさまはすんなりとこれを受け入れることはできませんでした。そこでオリーブ山に出かけてお祈りをなさいました。お祈りの最初に、イエスさまはこう祈られました。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行なってください。」神さまの御心は簡単には聞き従えないものであることを素直に打ち明けられたのです。でも最終的には神さまが御心のままにしてくださるように、とも祈られました。イエスさまは苦しみもだえながら、切に祈り続けられました。この祈りの中で、イエスさまは天使の力づけも受けながら、恐れやためらいをぬぐい去られ、だんだんと神さまの御心を受け入れるように導かれていきました。そして神さまの御心に従って十字架にかかってくださったのです。そして、神さまの御心に従いきったイエスさまを、天の父なる神さまは十字架の死の後3日目に復活させてくださったのです。

神さまの御心が簡単には受け入れられないように思えた時には、天の父なる神さまにお祈りをすることです。今わたしは、神さまの御心に従うことがこわいです、すぐには「はい、そうします」と言うことができません、どうかわたしの心にある恐れやためらいを取り去ってください、最後には喜んで神さまの御心に従えるようにしてください、と祈るのです。神さまは私たち一人一人を確かに愛してくださっています。私たちの命がボロボロになって滅び去ることは絶対に望んでおられません。そのためにも、愛する独り子でいらっしゃったイエスさまをこの地に送ってくださり、十字架の死、そこからの復活によって、罪と悪に打ち勝ってくださったのです。神さまの御心に徹底して従ってくださったイエスさまによって、私たちは本当の幸いをいただくことができたのです。

神さまの御心に従う人生は、途中には苦しいことも伴いますが、神さまに祈る中で、喜んで御心に従うことができるように導いてくださいます。今住んでいるこの地がもっと住みやすいところとなるためにも、神さまの御心を喜んで行なうものになりたいものです。　　（吉田　崇）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 12章2節

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。
むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、
何が善いことで、神に喜ばれ、
また完全なことであるかをわきまえなさい

2月19日　主の祈り・御心を求める祈り　小学科下級

ルカによるふくいんしょ22章39〜46をよみましょう。

1. イエスさまはどこへ行かれましたか。

2. だれがついて行きましたか。

3. イエスさまはでしたちになんとおっしゃいましたか。

4. イエスさまはそれからなにをしましたか。

5. イエスさまのいのりのことばを言ってください。

6. イエスさまのおいのりするようすはどうでしたか。

7. イエスさまがおいのりしているあいだ、でしたちはなにをしていましたか。

8. でしたちのすがたをみて、イエスさまはなんとおっしゃいましたか。

9. あなたには、おいのりするためのばしょがありますか。

10. あなたがおいのりすることをじゃまするものはありますか。

11. あなたはおいのりで、かみさまになにをおねがいしますか。

2月19日　主の祈り・御心を求める祈り　中学科

ルカによる福音書22章39～46節を読みましょう。

1.イエス様はどこへ行かれましたか。誰がついて行きましたか。

2.イエス様は弟子たちになんとおっしゃいましたか。

3.イエス様のお祈りの内容をふたつに分けてみましょう。

4. イエス様のお祈りする様子はどうでしたか。

5.イエス様がお祈りしているあいだ、弟子たちはなにをしていましたか。

6.弟子たちの姿をみて、イエス様はどんな気持ちだったと思いますか。

7.あなたには、神様と向き合うための「いつもの場所」がありますか。

8. あなたを祈りから遠ざける誘惑はありますか。

9.エフェソの信徒への手紙6章18節を読みましょう。

2月26日　主の祈り・ゆだねる祈り　聖書黙想

テキスト　申命記 8章2節～10節
子どもと親のカテキズム　問93

〈聖書テキストの解説と黙想〉

主の祈りの構造は、第一～三の祈願で、「神の栄光」、第四～六の祈願で、「神の栄光を表すための人の必要」を祈る、と一般的に区分けして説明されます。それと共に、どの祈願も、第一の祈願へ向かう祈りです。

主の祈りの第一～三の祈願の関係

第一祈願は、御名が崇められること。

第二祈願は、御名が最も鮮やかに崇められるところは御国なので、御国が来ること。

第三祈願は、御国が来るのを、御心を行うことによって早めることができるので、地上で私たちが御心を行うこと。

この第四の祈願は、第三の祈願における「御心を行う」ことのために、「毎日のすべての必要」が満たされることを祈ります。このことは、「神は、私たちのどんな必要を満たしてくださるのか」、という疑問を持つ人の答えになるでしょう。こうして、第四の祈願から第一の祈願である「御名が崇められるように」との結びつきが明確になるでしょう。

申命記8章2節～10節

荒れ野で、神がイスラエルの民を訓練しました。「主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわちご自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。」(2節）とあります。そして、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きること」を教えました。マナは、毎日振ります。とっておいても次の日には腐り、仕えなくなります。ですからマナ、明日も必ず与えられるという神の言葉を信じるしかありません。（安息日の前日は日を越しても腐りませんでした。）食べ物は人にとって必要です。それゆえに、食べ物という必要だけに心を奪われやすい罪人を、神の言葉に信頼させる訓練を通して、神は彼らを神の子として成長させ、神を畏れることを教育させました。

同じように、私たちも生きる上で、食べ物や物質的なものを必要とする存在ですが、その都度の必要を神が満たしてくださいます。私たちが神へ心を向け、畏れることを、神はお求めになっています。

良いものの源である神

神は、無限の恵みを持ち、いかなるものでも与えることができるお方です。一方で、与えるものは神のご意志によります。私たちに与えられないから神は恵みをもっていないのではありません。神は、本当に無限の恵みをお持ちだからこそ、人が最善と思う以上のものを、最も相応しい時にお与えになるのです。人の目には、なぜ今、神はお与えにならないのかと、疑問を持つかもしれませんが、神の御心を知ろうと心を高く挙げることが重要です。神は、徹底的に「すべての良いものの源である」のです。

さらに、神は、与えるだけでなく、取り去ることもできる全能者です。（ヨブ1:21、詩編104:27～30）私たちは、与えられ、取り去られることを通して、すべてが神のものであることを知らされます。それは、神の子として、所有欲や支配欲から解放され謙遜にさせられる営みです。こうして全能者である神に健全に依り頼みながら、私たちは神の民として成長し、聖化させられていくのです。

また、良いものの源は、唯一、神です。このことは不変です。良いものを与えておられた神が、ある時から悪いものや、ほどほど良いものを与える神に、変わることはありません。ヤコブ1:17にあるとおりです。「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。」

人が神について知るところはわずかであり、良いものを本当に与えてくださるのか不安を覚えることもあるでしょう。神が与えてくださったものが、たとえ私たちの罪の目には、良いものとは映らないように見えたとしても、それは私たちにとって最善なのです。例えば、神は、欠け弟子たちを選びました。それは、キリストを通して神の愛を表すために、この弟子たちが最善でした。また、貧弱なイスラエルが選ばれているのも、神の愛を世界に表すために最善の民でした。

必要が満たされないときの罪

さて、「日用の糧を今日も与えたまえ」の、「糧」は、日本語で食べ物を表しているように、新約聖書のギリシャ語原文では、パンです。食べ物のことが直接的に語られています。

私自身は、食べ物に困った経験はなく、恵まれた家庭で育ちました。感謝すべきですが、一方で食べ物のことで切実に祈った経験のない者です。ですから、この苦しみを知らない無知な者で、この解説のために主の導きを一層願い求めながら、続けて記します。

食べ物は、生きるための基本的な必要で、キリストも食べ物を必要としました。この生死に関わる重大なものを、「日用の糧を与えたまえ」と、主に祈るのです。聖書では、食べ物の欠乏は、罪の結果であったり、また主の訓練であったりします。いずれにしても、飢えの苦しみが極限に至るとき、人は本性を現し、ある人は狂うでしょう。食べ物のために争い、盗みや不正を働き、家族すらも殺しかねません。聖書にある人の姿は、現実をはっきり描いています。(申命記28:53、列王記下6:28、エゼキエル5:10等)

このような中でも、この主の祈りを祈ります。飢えの中で、なお、必要な糧を神に祈り、そして祈り求めることを止めないなら、罪を犯すことから守られ、糧を盗み奪うのではく、主の御前に相応しく得られるように導かれていくのではないでしょうか。そして、主が食べ物を備えてくださる時、その人の信仰は強められる機会となるでしょう。

必要を神に祈る

一方で、現代は多くの物や情報に溢れています。しかし、私たちにとって、生きる為に必要なものは多くはないでしょう。にもかかわらず、あれもこれも必要だと思わせる誘惑や、物質的なものに安易に頼らせようとする誘惑が無数に襲ってきます。このようにして、私たちの心には、神よりも物質的なものが占めてしまいかねません。

今回の聖書箇所で、神はこう述べました。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」(申命記8:3)私たちは、主の口からでるすべての言葉に生きる時、本当に必要なものを、神様が相応しい仕方で満たしてくださいます。それがマナでした。

また、マタイ6章25〜34節では、「思い悩むな」と主イエスが教えています。何を思い悩む必要がないかと言うと、御心を行うために必要なものです。「これらのものはみな加えて与えられ」ます(33節)。

神が、私たちの本当の必要を満たしてくださることを心に留めて、「日用の糧を今日も与えたまえ」と、神にますます寄り頼むことができるように祈っていきたい。　(酒井啓介)

2月26日　主の祈り・ゆだねる祈り　説教展開例

テキスト　申命記 8章2〜10節
子どもと親のカテキズム　問93

〔単元のねらい〕

神様は、必ず良きものを与えて下さいます。神は無限の恵みをもち、良きものを与え、それは永遠に変わることのないお方です。子供たちが、自分勝手な必要のために、罪へ走るのではなく、ひたすらに神に求め続ける姿勢を持てますように。

最も良いものをくださる神様

〈第4の祈願の位置〉

一般に、主の祈りの第一から第三の祈願は、神の栄光を祈り、第四〜第六は神の栄光の為の人の必要を祈ると言われます。

今日は4番目の祈りです。

「日用の」とは、毎日の。

糧とは、必要な物のこと。

毎日の必要なものを、神様に祈り求める祈りです。私たちは、色んなものを必要と思うかもしれません。でも、本当に必要なものより、多くのものを求めてしまう弱さが、私たちにはあります。

神様が私たちに必要だと思われるものと、私たちが自分で必要だと思うものは、必ずしも同じではありません。

主の祈りの第三の祈りでは、「御心を行う」ことを祈りました。これに続く祈りですから、「御心を行う」ための「必要な糧を今日も与えたまえ」と祈ります。

〈無限の恵みを持つ神様〉

誰でも、人に何かをあげるには、それを自分が持っていないと挙げられません。100円をあげるには、自分が100円以上持っていないと挙げられませんし、1万円あげるには、1万円以上持っていないとあげられません。10kgの荷物を運ぶのを手伝うには10kg以上の力がないと、100kgの荷物を運ぶには100kg以上の力がないと運べません。これは富や力だけではなくて、知恵や知識の面でも同じです。

では、神様はどれほどお持ちでしょうか。

神様は、無限の恵みを持っています。だから、何でも与えることができるお方です。人間の目で見て、無理だろうと思っても、神様に無理はありません。5つのパンと2匹の魚を5000人以上の人たちに増やして分けましたし、どんなお医者さんも直せなかった病気の人をいやしましたし、死んだ人をも生き返らせて、それを見ていた人たちはみんなびっくり驚いきました。それができるのは、それだけの力や知恵を神様がもっているからです。

そして、与えるものは、神様がお決めになります。例えば、私たちに与えられないから神様は恵みをもっていない、と考えるのは間違いです。神様は、本当に無限の恵みをお持ちだからこそ、人が一番良いと思う以上に、最高に良いものをお与えになるのです。しかも、お与えになる最も相応しい時を神様は選んでいます。だから、神様に心から期待しましょう。私たちをいつも愛し、強めてくだいます。

このことをもう少し分かりやすく言い換えましょう。

ときどき、神様がわたしたちに必要なものを与えてくださらないように思える時があるかもしれません。しかも、祈っているのに、与えてもらえないし、助けてもらえなくて、悲しい思いをしたことや、嫌な思いをしたことはないでしょうか。それは信徒の皆さんも、牧師の皆さんもだれでも経験があるはずです。自分の何かがいけなかった

のかなあ、と思うかもしれません。たとえ、何もいけないことがなかったとしても、そういうことは起こります。なぜなら、神様は、本当に無限の恵みをお持ちなので、人が一番良いと思う以上に、最高に良いものをお与えになるのです。苦しい時こそ、神様は、絶対に「すべての良いものの泉です。」ということを信じましょう。

〈すべては神様のもの〉

また、神様に対して喜ばれる態度をもつことが大切です。神様は、与えるだけでなく、取り去ることもできる全能者です。取り去られる、と聞くと、恐いと思うかもしれませんね。私たちは、与えられ、取り去られることを通して、すべてが神様のものであることを教えられます。持っているものは、まるで自分のものだと思い込んでいる人がいたらそれは間違いです。すべては神様のもので、私たちが持っているものは、神様からまかされているものです。だから、自分勝手に何でも思い通りにしよう、と思ったらいけません。それを気付かせてもらえるのが、神様は与え、取り去られる、ということなんです。神様が喜ばれることは何だろう、と考えて成長することを、神様は望んでおられます。

〈必要が満たされないときの罪〉

神様がくださるものの中で、食べ物は、生きるための基本的な必要です。キリストも食べ物を必要としました。この生死に関わる大切なものを、「日用の糧を与えたまえ」と、主に祈ります。

飢えの苦しみが極限に至るとき、人は本性を現し、ある人は狂ってしまいます。食べ物のために争い、盗みや不正を働き、人を殺してしまうこともあります。これが世界の歴史の中で起こったことでした。もし、お腹がすいて、必要な物がなくて苦しい時に、必要な糧をいつも神様に祈り、そして祈り求めることを止めないなら、罪を犯そうとする気持ちを、神様が静めてくださって、罪から守られることになるでしょう。

〈必要を神様に祈る〉

一方で、現代は多くの物や情報に溢れています。そして、あれもこれも必要だ、欲しいなあ、と思わせる誘惑がたくさん襲ってきます。スマホやパソコンを通してたくさん襲ってきます。この誘惑に負けると、私たちの心には、神様よりも物質的なものが占めてしまいかねません。

今回の聖書箇所で、神様はこう述べました。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」(申命記8:3)私たちが、主の口からでるすべての言葉に生きる時、本当に必要なものを、神様が相応しい仕方で満たしてくださいます。

また、マタイ6章25〜34節では、「思い悩むな」と主イエスが教えています。何を思い悩む必要がないかと言うと、御心を行うために必要なものです。「これらのものはみな加えて与えられ」ます(33節)。

神様が、私たちの本当の必要を満たしてくださることを信じて、「日用の糧を今日も与えたまえ」と、神様にますます寄り頼むことができるように祈っていきましょう。　(酒井啓介)

〔今週の暗唱聖句〕　申命記 8章3節

「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」

2月26日　主の祈り・ゆだねる祈り　小学科下級

しんめいき8章2〜10節をよみましょう。

1. かみさまは、なにをおもいおこしなさいとおっしゃいましたか。

2. かみさまがあれののたびをさせたのは、なぜですか。

3. かみさまは民(たみ)にどんなけいけんをさせましたか。

4. そのくるしいけいけんで、民はなにをしりましたか。

5. 40ねんのあいだ、着るものやからだのようすはどうでしたか。

6. かみさまは、ごじぶんの民をくんれんするおかたですか。

7. あなたは、かみさまからくんれんされたことがありますか。

8. そのくんれんは、なんのためだとおもいますか。

2月26日　主の祈り・ゆだねる祈り　中学科

申命記8章2〜10節を読みましょう。

1. 神様は、何を思い起こしなさいとおっしゃいましたか。

2. 神様が荒野の旅をさせたのは、なぜですか。

3. 神様は民(たみ)にどんな経験をさせましたか。

4. その苦しい経験で、民はなにを知りましたか。

5. 神様がマナを食べさせた理由はなんですか。

6. 神様は、ご自分の民を訓練するおかたですか。

7. あなたは、神様から訓練されたと思うことがありますか。

8. その訓練は、なんのためだと思いますか。

■案内者のために■

出エジプト記16章を味わっておくことをお勧めします。

3月5日　主の祈り・赦され、赦す祈り　聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 18章21〜35節
子どもと親のカテキズム　問94
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問105
ウェストミンスター大教理問答 問194
ハイデルベルク信仰問答 問126

問94 「我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ」では、何を祈り求めるのですか。

答　私たちが、イエスさまの十字架の恵みによって罪が赦されていることをいつも思い起こし、他の人たちの罪をも赦すことができるようにと祈り求めます。さらに自分自身の罪をますます深く悲しみ、罪の赦しを祈り求めます。

〈第五の祈りと聖書テキストとの関係〉

主の祈りの第五の祈りはマタイ福音書6章12節に記されている（ルカ11:4参照）。

「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」。

「負い目」という言葉は「借金、負債」をも意味する。罪とは返済しなければならない借金、負い目のようなものであるというのが聖書的な理解である。そしてこの祈りで重要なことは後半に「わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」と続いていることである。マタイ福音書ではこのことの注釈として6章14〜15節に次のような言葉がある。

「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」。

このように、わたしたちが人の罪を赦すかどうかが、神がわたしたちの罪を赦すかどうかと関わっていることが教えられている。このことをどのように理解すべきだろうか。わたしたちが人の罪を赦すことが条件あるいは根拠となって、神はわたしたちの罪を赦されるのだろうか。そうではない。主の祈りにおいてまず神による罪の赦しを求めるように、神の赦しがわたしたちの赦しに先行している。それに続いて「わたしたちも」、すなわち神が赦して下さったが故に、わたしたちも人を赦すのである。

このことをさらに詳しく、わかりやすい仕方で教えているのが、「仲間を赦さない家来のたとえ」（マタイ18:21〜35）である。

〈聖書テキストの解説〉

このたとえが語られたきっかけはペトロの主イエスに対する質問である。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」。当時のユダヤ教のあるラビ（教師）は「隣人からゆるしを三回以上請うことはできない」と言ったそうである。それに比べるならば「7回までですか」と尋ねたペトロの態度は寛大だと言える。また7は聖書において完全数でもある。しかし、主イエスは「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」と言われた。「七の七十倍」とは「七十七」とも訳し得る言葉である。そしてこの言葉の背景には創世記4章24節があると考えられる。そこでレメクという人物は自分に危害を加えた者に対して七十七倍の復讐をすると豪語している。それは復讐の思いに捉われた堕落した人間の姿である。しかし主イエスは罪を犯した人に七十七倍の復讐をするのではなく、むしろ七十七回、あるいは七の七十倍までも赦しなさいと教えられた。これは無制限に赦しなさいという意味である。

しかし、なぜそのようにしなければならないのか。そのことを説明するために主イエスはたとえ

を語られた。そこには「天の国」、すなわち「神の王としてのご支配」がどのようなものかが示されている。王に対して一万タラントンの借金をしている家来がいた。タラントンとは六千デナリオン。そしてデナリオンとは当時の一日分の給料である。計算すると、一万タラントンとは、約16万年分の給料ということになる。これはとんでもない巨額であり、一生かかっても返済できるような額ではない。返済できない家来に対して、王は自分も妻も子供もすべて奴隷として売り払って借金を返済するように命じた。家来はひれ伏して「どうか待ってください。きっと全部お返ししますから」と、返せるはずがないにも関わらずその場しのぎの懇願をする。すると、王は深く憐れんで(内臓まで動かされるという表現)、彼を赦し、借金を帳消しにしてやった。これがたとえの第一のポイントである。

しかし、この後その家来は自分に百デナリオンの借金をしている仲間を見つける。百デナリオンは百日分の賃金であり、その額自体は小さなものではないが、彼がさきほど帳消しにしてもらった一万タラントンと比べるならば、六十万分の一というわずかな額である。しかし、家来は仲間の懇願にも関わらず、彼を赦さず、借金を返すまで牢に入れてしまった。それを聞いた王はその家来に「不届きな（悪い）家来だ……わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」と言う。そして家来を牢役人に引き渡す。このたとえにおいては、家来の莫大な借金を帳消しにしてやった王の驚くべき憐れみと、それに比べればささいな借金をも赦さず、仲間を牢に閉じ込めてしまった家来の憐れみのなさ（冷酷非道さ）が対照されている。

そしてたとえの結論を主イエスは35節で語られる。大切なことは、わたしたちが「心から」、すなわち神から憐れみを受けたように、自分も仲間への憐れみをもってその人を赦す、ということである。それは赦した回数を数える赦し方とは根本的に異なる。本当に兄弟を心から赦すならば、それは回数無制限に赦し続けることになる。

〈子どもカテキズムの解説〉

カテキズムにおいてはまず、私たちが人を赦す前に、神の赦し、すなわちキリストの十字架によってただ恵みによって赦されたという事実があることが明確にされている。そして人の罪を赦すにためには自分が罪赦されたという恵みの事実をいつも思い起こすことが大切だと教えられている。逆に、それを忘れてしまう時、あの家来のように、仲間に憐れみをかけず、罪を赦さないということになってしまう。そして人の罪を赦すことも、そうできるようにとわたしたちが祈り求める事柄なのである。「さらに自分自身の罪をますます深く悲しみ、罪の赦しを祈り求めます」。主イエスを信じた後も、なお罪を犯してしまう弱いわたしたちである。そのことを深く悲しみつつも、なお神の憐れみにすがり、罪の赦しを請い求める続けることが大切である。

〈黙想、子どもたちに対して〉

わたしたちは、神に対して自分がいかに大きな罪・負債を負っているかということに関して鈍感である。一方、他人が自分に犯した罪・過ちに関しては敏感である。そして「相手を恨み、赦さない」、あるいは「相手に復讐（報復）してやる」という思いに捉われがちである。また一応は赦したつもりでも、どこかで根に持っているということがある。

世界で繰り返される争い・戦争、またもっと身近な人間関係においてもそのようなことは起こっているだろう。子どもたちが生きている世界も例外ではない。自分自身の視点にとどまり、自分の正義に固執している限り解決はない。わたしたちは目を天の国に、神のご支配に向ける必要がある。神の御前に自分がいかに罪深いものであるか、それにもかかわらず神は豊かな憐れみによって、御子イエスの犠牲によってわたしたちの罪を赦して下さった、借金を帳消しにしてくださった。そのことを深く心に留めるときに、わたしたちも人を赦す、心から、憐れみの心をもって赦すことへと導かれてゆく。祈る中で、神に赦され、わたしたちも人を赦す生き方へと導かれてゆく。

（坂尾連太郎）

3月5日　　主の祈り・赦され、赦す祈り　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書 18章21〜35節
子どもと親のカテキズム　問94

〔単元のねらい〕

神様に対するわたしたちの大きな罪を神様は憐れんで赦してくださること、またわたしたちも自分に罪を犯した人を憐れみ、赦すよう神様から招かれていることを伝え、そのように祈るよう促す。

神さまの赦しとわたしたちの赦し

序：人を赦すことの難しさと第五の祈り

おはようございます。みんなは人から嫌なことをされたことはありますか。悪口を言われたり、痛いことされたり。そんなときはどうしますか。やりかえしますか。我慢しますか。誰かに告げ口しますか。

嫌なことをされたら、まず一対一で本人に注意するようイエス様は教えています（マタイ18:15）。では、その人が自分の間違いを認め、謝ってきた時にはどうしますか。すぐに赦してあげられるでしょうか。もちろん、やられたことにもよるでしょう。かなり嫌なことをされた、また何度も何度も嫌なことをしてくる相手は赦せないということも出てくるでしょう。

しかし、それでよいのでしょうか。イエス様はわたしたちの祈りのお手本として「主の祈り」を教えてくださいました。5つ目の祈りは「我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ」です。これは「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちもわたしたちに罪を犯す者を赦しましたように」という意味のお祈りです。この祈りには罪を赦して下さいというお願いだけでなく、「わたしたちもわたしたちに罪を犯す者を赦しましたように」という言葉がついています。なぜでしょうか。これがないほうが祈りやすいでしょう。この言葉がなければ、自分が人の罪を赦したがどうかに関わらず、言わば気楽に祈れます。しかし、イエス様はそうは教えられませんでした。神様に罪の赦しを祈り求める時にも、わたしたちが他の人の罪を赦すということが大切だからです。なぜでしょうか。そのことをイエス様は「仲間を赦さない家来」というたとえを通して教えてくださっています。

1. たとえの内容

ある王様が、家来たちに貸したお金を返してもらおうとしました。この王様は神様をあらわします。そして家来たちに貸したお金というのは、わたしたち人間が神様に負っている借金、すなわち罪を表しています。ある家来は王様に一万タラントンの借金をしていました。これは当時で約16万年働いてもらえる賃金です。とんでもない大金です。そんな借金は死ぬまで働いても返せないのです。その家来に対して王様は、自分と奥さんと子ども、また持っているものをすべて売って借金を返すように命じました。しかし、家来は何とかそうならないように王様にお願いしました。「どうか待ってください。きっと全部お返しします」。全部返せるはずがないのですが、家族や持ち物を失いたくないので彼は必死に願いました。すると王様は、この家来を憐れに思いました。心の底から可哀そうに思い、同情したのです。そして王様は、この家来を赦し、1万タラントンという莫大な借金をすべて帳消しにしてあげたのです。家来にとってはこんなにありがたいことはありません。

この家来が外に出ると、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に会いました。百デナリオンというのはそれ自体は安い金額ではありませんが、この家来が王様に帳消しにしてもらった一万

タラントンに比べれば、六十万分の一、ほんのわずかな金額です。しかし、その家来はその借金している仲間を捕まえて、首を絞めて言いました。「借金を返せ！」。仲間はひれ伏して、必死に頼みました。「どうか待ってくれ。返すから」と。しかし、この家来は仲間の願いを受け入れず、借金を返すまでと彼を牢獄に入れてしまったのです。それを見ていた他の仲間たちはとても心を痛めました。そしてそのことを王様に告げたのです。王様はその家来を呼びつけて言いました。

「不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」。そして王様は怒って、借金をすべて返すまで彼を牢獄に入れたのです。

イエス様はこのたとえを語り終えられた後、言われました。

「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう」。

2. わたしたちへのメッセージ

みんなはこのたとえ話を聞いてどう思うでしょうか。その家来のことを血も涙もないひどいやつ、冷酷なやつだと思うかもしれません。しかし、ここに出てくる家来はわたしたちのことかもしれないのです。つまり、仲間の罪や過ちを赦さそうとしないわたしたちの姿です。

このたとえに出てくる家来の過ちはどこにあったでしょうか。この家来は自分が莫大な借金を王様から帳消しにしてもらったにも関わらず、一歩外に出るとまるでそれを忘れたかのように仲間に対して厳しく、冷酷に振る舞っています。このようなことをわたしたちはしてはいないでしょうか。神様に対するわたしたちの罪、借金は一万タラントンにものぼる莫大なものです。とても自分では返済することができない、その罪を償うことができないのです。そうであるならば、本当はわたしたちが刑罰を受けなければなりません。しかし、神さまはそのようにどうしようもないわたしたちを憐れんで下さり、すべての罪・借金を帳消しにしてくださった。わたしたちを罪の負い目から解放し、自由にしてくださったのです。そして、そのために神さまの独り子であるイエス様が十字架にかかり、わたしたちの身代わりとして罪の刑罰を受けて下さったのです。すべては神様がわたしたちを憐れみ、わたしたちの大きな罪をすべて赦してくださるためだったのです。

そのように神様からの憐れみを受け、大きな罪を赦されたにも関わらず、仲間のそれよりもはるかに小さな罪や過ちを赦そうとせず、厳しく、冷たくするならばどうでしょうか。それはあの家来と同じことになってしまいます。神様から「悪い家来だ」と怒られてしまいます。わたしたちは、神様から大きな罪を赦されたのですから、仲間のそれよりははるかに小さな罪や過ちを赦すべきなのです。わたしたちは、神様から憐れみを受けたのですから、自分の仲間をも憐れんであげるべきなのです。神様はそのことをわたしたちに求めておられます。

もちろん、何度も何度も嫌なことをされたりするとき、赦すのが難しいということはあるでしょう。しかし、そのような時こそ、神さまのことを思い起こしましょう。神様がただ憐れみによって自分のどれほど大きな罪を赦してくださったのか。それを思い起こすなら、自分も人に憐れみをかけ、人の罪を赦すべきだと気づくはずです。そのことに気づかせるために、イエス様はこのたとえをお語りになりました。また主の祈りでは次のように祈るよう教えられました。「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちもわたしたちに罪を犯す者を赦しましたように」と。神様から罪赦された者として、人を赦すことができるように。共に祈ってゆきたいと思います。　（坂尾連太郎）

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 6章12節

わたしたちの負い目を赦してください、
わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

3月5日　　主の祈り・赦され、赦す祈り　　小学科下級

マタイによるふくいんしょ18章21〜22節をよみましょう。

1. ペテロのしつもんはなんですか。

2. イエスさまのこたえはなんですか。

マタイによるふくいんしょ18章23〜35節をよみましょう。

3. 天のくにのたとえはどんなおはなしですか。

4. いちまんタラントンを、いきているあいだにかえせるとおもいますか。

5. かえせないしゃっきんは、どうしたらよいとおもいますか。

6. あなたはイエスさまにしゃっきんがありますか。

7. そのしゃっきんはどうしたらよいでしょうか。

3月5日　主の祈り・赦され、赦す祈り　中学科

マタイによる福音書18章21～22節を読みましょう。

1. ペテロの質問はなんですか。

2. イエス様の答えはなんですか。それはどういう意味ですか。

マタイによる福音書18章23～35節をよみましょう。

3. 天の国のたとえを簡単に説明してください。

4. 一万タラントンを、生きている間に返せるとおもいますか。

5. 返せないほど大きな借金があったら、どうしたらよいと思いますか。

6. あなたは友人や家族をゆるせないと思ったことがありますか。

7. 人をゆるすために、私たちが覚えておく必要があるのは、どんなことでしょうか。

3月12日　主の祈り・神の子の勝利の祈り　聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 17章12〜19節
子どもと親のカテキズム　問95
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答　問26、36、106

問95 「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」では、何を祈り求めるのですか。
答　今も弱さをもっている私たちは、神さまのあわれみがなければ、一瞬でも神さまの子どもとしての祝福に生きることはできません。ですから罪と悪魔の支配から救い出され、聖霊の力によって勝利を得ることができるように祈り求めます。

〈聖書テキストの解説〉

ヨハネによる福音書においてキリストは、十字架を前に弟子たちと食卓を囲みます。そこで行われますのが、「洗足」の出来事を含む「告別説教」と呼ばれる長い教えです（ヨハネ13章〜17章）。その最後に置かれるのが、「大祭司の祈り」と呼ばれるイエス様のとりなしの祈りです。

この祈りにおいてイエス様は「時が来た」こと、すなわちイエス様の救いが実現する十字架の時が来たことを父なる神様に感謝します。それはすなわちイエス様の救いがどんなものであるかを最終的に宣言するものです。次いで、イエス様に従う人々について、守られるよう執り成し、さらにはその「従う人々」によってさらにイエス様を信じる人々についても神様によって一つにさせていただくようにとりなします。これらは信仰者が神様に対して、またこの世に対してどういう関係であるかを改めて示すものです。

このように「大祭司の祈り」はイエス様の救いがどのようなものであるかを改めてその構造を示すと同時に、その構造から必然的に生じる「信仰者とこの世の対立」において、神様が信仰者を守ってくださるようにと願い、世にある信仰者を励ます祈りです。

当該箇所は第二の部分に属し、信仰者と世が相対立するものであること、それゆえ信仰者は世に憎まれる者であることを示しています。私たちの信仰の生涯における苦しみが、信仰に必然的なものであること、しかしその中で神様に固く守っていただけることを覚えることができれば良いと思います。

〈子どもカテキズムの解説〉

子どもかテキズムの問95は、主の祈りの第6の祈願を取り上げています。主の祈りの中で照英に先立つ最後の祈願であり、私たちの信仰生活が守られるように祈る祈りです。

「こころみ」は私たちの人生にはつきものであり、信仰者が苦しみ悩むことは、ヨブをはじめとして、信仰に伴う大きな課題です。聖書は私たちの苦しみについて主から与えられる鍛錬であると教え、私たちがそれを耐えるように勧め、必ずその苦難を乗り越えることができると励まします（ヘブライ12:6、一コリント10:13）。しかし、主の祈りにおいてはそれらの試みからさえも守られるようにと主に祈り求めます。そのように祈るのは、神様が私たちの信仰はもちろん、肉体もすべての生活をも支え守る能力を持ち、実際に支えていてくださることを信じるところによっています。

参考教理問答に挙げたウェストミンスター小教理問答はキリストの王職との関係（問26）、有効召命との関係（問36）で、聖徒が堅忍されることを教える教理問答です。私たちが神様に守りを祈るとき、神様は必ず私たちを守ってくださいます。主の祈りの第六の祈願を祈ることができることは、主が必ず私たちを守り、支えてくださることの確信と平安に結びつくのです。

〈黙想〉

子どもと言っても様々な困難や試練を経験することは避けられない。むしろ、この世の仕組みに馴れていない子どもは人間関係の小さなつまずき

にも大きな苦しみを感じてしまう。小学校高学年や中学生にもなると、クリスチャンとして教会の礼拝に出席することも、学校の友人たちとのすれ違いや、部活や塾などの活動との悩みなど様々な苦難を生み出すことになる。教会の楽しさや喜びを感じつつもそのような苦しみを経験しなければならないことが、教会への否定的な感情を生み出す要因となっている。教会学校の時代に、様々な悩みに応えを得た経験は、その後の信仰生活に確かな土台となるはずである。子ども達の悩みに対して頭ごなしに「こうするものだ」と押し付けて幼いなりの悩みに耳を傾けないのは問題外であり、親や教師は全力でその悩みを受け取ること、またその姿勢を示すことで子どもが信仰に歩むことへの信頼を持つことができるように心がける必要がある。

第一コリントやヘブライ書の教えは、苦難にも積極的な意味があることを教える。意味がない事柄、否定的な意味しかない事柄は私たちにとって苦難であり、私たちはその出来事に何らかの意味を見出すことで積極的に向かい合うことができる。しかし、まさに苦難のただ中にいる人に対して、「その苦難には積極的な意味がある」と伝えることは必ずしも慰めとならず、むしろ、苦しんでいる自分を切り捨てられる感覚を覚える。苦難に積極的な意味があることを学ぶのは、苦難にない時に知識として蓄え、実際に苦難を乗り越えた時に実感すべきことであろう。

当該聖句等は、苦難に対して全能にして慈しみに満ちた神が手を差し伸べてくださることを確かな約束として示している。神の約束は、約束として与えられた時に既に事実として実現したものとして実感し、語ることができる確かさを持つ。たとえ苦難のただ中にあっても神様の約束を覚えることができるなら、私たちは慰めと励ましを得ることができるであろう。しかしこの確信も、神の約束の確かさへの確信が揺らいでいる時や、確立していない時には、かえって、神への不信を生みかねない。

そのように信仰が不確かな時であっても、最も確かなことは、その悩みを受け止め、共感し、共に苦しんでくれる人の存在である。キリストは、当該聖句において弟子たちを心から愛し、のちに訪れる苦難に対して執り成しの祈りを献げている。弟子達の弱さを受け止め、それまで共にいてくださったように、昇天後も弟子達を支えてくださることを示しておられるのである。教会において教師が子ども達と同様に悩み、その悩みに信仰によって立ち向かっている姿勢を示すこと、子ども達の悩みをも共に担っていく姿を示すことは、子ども達に確かな信仰の支えとして伝えられるであろう。

〈子どもたちに対して〉

大人達も悩みや苦しみを持っていること、キリストがその悩みを知ってくださって、守り支えてくださることを、語る者の確信として伝えることができるように。（長田詠喜）

3月12日　主の祈り・神の子の勝利の祈り　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 17章12〜19節
子どもと親のカテキズム　問95

〔単元のねらい〕

そもそも私たちが祈りを必要とすることの前提として、信仰を持って生きることが、必然的にこの世との摩擦を生み、様々な苦しみを生じること。その摩擦や苦しみは私たち人の力では乗り越えることができないような大きな力であり、私たちは私たちを支えてくださる神に頼ることが必要であることを知る。また、そのような困難の中で私たちが頼るお方は、全てのこの世の力を超えて私たちを救うことがおできになる力を持ったお方であり、私たちはそのお方に頼ることで、全ての平安を受けることができると確信する。私たちが祈ることができること自体がそのしるしである。

いつでもどんなことでも神さまに祈る

イエスさまのお祈り

今日の聖書の箇所は、イエスさまが十字架に疲れるまえの夜に、お弟子さん達と食事をした時のお話です。イエスさまはそのときいろいろなことをお弟子さん達にお教えになりましたが、その最後に、弟子達がみんな守られるようにとお祈りを捧げました。これまではイエスさまが弟子達を守ってくださり、色々と教えてくださっていたのですが、イエスさまは天に帰られてしまうので、父なる神様に改めて弟子達のために祈られたのです。これはちょうど、イエスさまが教えてくださった「われらを試みに合わせず悪より救い出したまえ」という祈りを、イエスさまが私たちの代わりに祈ってくださったことなのです。

みなさん「試み」というのがわかりますか？四年生になると「試験の試」という漢字を習います。その訓読みが「こころみ」という読みです。「試す」とも読みます。試験とか試すとかいうとちょっとわかるかもしれません。何が試験なのでしょうか。学校でも試験というのはあまり楽しみなものではないでしょう。試験をすれば勉強がわかるようになりますし、よい点を取ることができれば、お母さんに褒められたり、友達に自慢できたり、よいことがあるのはわかります。でもそのためには、遊びに行くのを我慢して勉強をしなければならなかったり、テストの点が悪かったりすると叱られてしまったりと、辛いこと我慢しなければならないこともありますよね。そんな辛いこと、苦しいことを我慢するからこそ、勉強ができるようになったり、褒められたりと楽しいことがあるのです。

それとよく似ていることが、学校の勉強だけでなく、毎日の生活の中でもあるのです。学校の勉強だけでなく、私たちは、子どもでも大人でもいろいろなことを我慢しなければいけません。でもそうやって我慢すると、私たちはいろいろなことができるようになったり、元気になったり、一番大事なことは神様のことがよくわかるようになったりするのです。神様は、私たちが神様のことがよくわかるようになるために、少しだけ我慢するようにしておられます。ちょっと嫌なこと、ちょっと我慢することがあるのは、そんな意味があるのです。

祈りを聞いてくださる神様

神様は、私たちに意地悪をしようと思っているわけではありません。私たちが少しでも神様のことがわかるように、神様を信じることができるようにと、テストをしてくださっているのですから、我慢できないような大変なこと、頑張れないような辛いことはなさいません。そのことは安心してよいのです。

けれども、やっぱり「試み」はあまり嬉しいものではありません。「試験は嫌だなあ、やりたくないなあ」と思うこともあるでしょう。学校の先生やお父さんお母さんでしたら、「試験は仕方がないのだから我慢しなさい」といって相手にしてくれないかもしれません。けれども神様は、私たちのそんな気持ちもとてもよくわかってくださいますし、私たちの思いを聞いてくださるのです。試みが私たちに必要なもので、必ず乗り越えることができること、乗り越えたらちゃんと成長できることはその通りなのですが、それでも私たちは試みが辛い時には、「神さま試みないでください」とお祈りすることができるのです。そして、私たちがそんな風にお祈りしたら、神様はその祈っている祈りをちゃんと聞いていてくださって、ちゃんと応えてくださるのです。その辺は、神様は本当にきちんと全部の祈りをいつでも聞いていてくださいますし、どんなお願いでも答えることができる力を持っています。もちろん、神様は私たちよりもずっとずっと賢いお方ですから、私たちの言うなりではなくて、私たちがお願いするよりもずっとずっと素晴らしいものを私たちにくださるのですが、

イエスさまが助けてくださる

お弟子さん達はこのあと、イエスさまが捕まってしまうとみんな逃げてしまいます。イエスさまの最も近くにいたペトロは、イエスさまのことを知らないと3回も誓ってロにしました。でも、イエスさまが復活したときにはまた集まってきていました。そして、復活したイエスさまに会って、改めてイエスさまを信じます。イエスさまは改で弟子達をイエスさまに従ってくるようにおっしゃって、弟子たちを遣わします。そのあとは、弟子たちはずっとイエスさまのことを伝える働きをすることができました。世界中あちこちに出かけて行って、たくさんの人たちにイエスさまがどんな方であるか、私たちのために十字架にかかってくださって、天に昇った後も私たちのことを守ってくださっていることをお話して歩くことができました。お弟子さんたちの伝道の様子は聖書の中にも記されています。その他にも大変なことはたくさんあったと思います。けれども、神様に守られたこともっとたくさんありました。イエスさまがお祈りしてくださったように、イエスさまを信じる人たちはどんなに大変でも、どんなに辛くても、神様から守られるのです。弟子たちだけではありません。私たちもみんなイエスさまに守られています。辛いことがあるとき、嫌なことがあるとき、私たちは遠慮することなくイエスさまにお祈りできます。そしてイエスさまはその時、必ず守ってくださることを忘れないでください。

（長田詠喜）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 17章12節 b

わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。
聖書が実現するためです。

3月12日　主の祈り・神の子の勝利の祈り　小学科下級

ヨハネによるふくいんしょ17章12〜14節をよみましょう。

1. イエスさまはでしたちをどうしましたか。

2. それはなんのためですか。

3. イエスさまは、このとき、どこへいこうとしていますか。

4. イエスさまはみことばをつたえました。そうしたら、世(よ)はどうしましたか。

5. それはなぜでしょうか。

ヨハネによるふくいんしょ17章15〜19節をよみましょう。

6. イエスさまは、かみさまになにをおねがいしていますか。

7. かみさまのみことばはどんなものですか。

3月12日　主の祈り・神の子の勝利の祈り　中学科

ヨハネによる福音書17章12～14節を読みましょう。

1. イエス様は弟子たちをどうしましたか。

2. それはなんのためですか。

3. イエス様は、このとき、どこへいこうとしていますか。

4. イエスさまが御言葉をを伝えたときの、世(よ)の反応はどうでしたか。

5. それはなぜでしょうか。

ヨハネによる福音書17章15～19節を読みましょう。

6. イエス様は神様になにをお願いしていますか。

7.「世に属していない」とは、どういうことだと思いますか。

8. あなたは、自分が世に属していないと思ったことがありますか。

9. あなたは、自分が世の中の人と違うために悩むことがありますか。

■案内者のために■

聖書発見学習では、「わからない・答えたくないときはパスしてOK」です。
はじめにそれを伝えてください。
最後の質問では、教師の証しを交えることができればより豊かになるでしょう。

3月19日　主の祈り・確信の祈り　聖書黙想

テキスト　歴代誌上 29章10〜20節
子どもと親のカテキズム　問96
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問107
ハイデルベルク信仰問答 問128

問96 「国とちからと栄えとは、限りなく、なんじのものなればなり」という結びの言葉は、何を意味していますか。

答　祈りが確かに聞かれる理由は、いつも良いものだけを与えてくださる恵みの神さまにこそあります。ですから、神さまの子どもである私たちは、喜びと感謝をもって神さまの栄光をほめたたえるのです。

〈聖書テキストの解説〉

この箇所は、ダビデ王が神殿建築をこれから始める時に、イスラエルの全会衆の前で主をたたえて（10節）祈る場面である。先の28章で、ダビデ自身が神殿を建てることを神はお許しにならなかった（歴上28:3)。そして、ダビデの子ソロモンの時代にその神殿建築を許され、また民の繁栄を約束された（歴上28:6)。今ダビデはその神の御前で、また全会衆の前で、全ての材料、また全ての事情がいま整い、神殿建築を前に神への許可を乞い、栄光を神に帰してイスラエルの繁栄がこれによって現されることを願い祈っている。

ダビデの祈りの内容は以下の通りである。まず、彼は賛美の祈り（10〜13節）から始める。彼の祈る賛美のそれは、これ以上言い表せないほどに壮大なものである。そしてその中で、この度の主の祈りの中心にもなって来るワード、『国と力と栄え』が神にこそあることを誉め謳っている（11節)。

次に彼は、神の御前において、自身と民が何者に過ぎないかを告白して祈る（14〜17節)。彼はこの箇所の祈りにおいて、徹底的に神に対する謙遜を表す。歴史を司り、民に全てを添えて与えてきた創造主にして統治者に、今この告白の言葉をもって感謝を表し、栄光を神に帰している。

最後に、18節からは祈願をもって祈りを閉める。彼の願いは、ひと言で言えば神の栄光と民の繁栄である。ダビデは、自身では決して果たせない願いを神に率直に祈り、イスラエルの繁栄を願うのである。イスラエルの民とソロモンの心がこれからも永遠にあなた（神）に向かうように、そしてこれから建て上げて行く神殿が主に許され、その神殿を通してあなたとの関係が豊かなものとされるようにとの願いで祈りを閉じる。

〈子どもカテキズムの解説〉

今回の主の祈りの言葉は、新約聖書内の主の祈りが記されている箇所には無い言葉である。しかしこの言葉は、余りにも祈りを締め括る言葉としてふさわしい。教会が、後の時代に皆で唱和するために、付け加えたものだと言われている。

私たちも礼拝の最後で、神を賛美・頌栄するように、旧約の時代から、祈りの最後は必ず神を大いなる方としてほめたたえて結んでいた。それと同じように、主の祈りの最後で今回の言葉をもって私たちは、主への確信、この祈りが必ず主に聞かれることを信じて祈り、そして締め括るのである。

この問答で何より注目したいことは、『祈りがきかれる理由は、……神さまにこそある』と教えている、この点である。ウ小教理問答85,88で示されているように、祈りは、神（キリスト）が外的手段としてお与え下さったものである。祈る者の信仰以上に、祈りをまず神が許可下さり、聖霊を通して言葉に表せないうめきさえも執り成して下さるこの点に祈りの確信の根拠がある。それ故祈る側にも、願いが必ず聞かれる喜びと感謝とが沸き起こり、いよいよ力強く祈る者へと作り変え

られる、このダイナミズムを覚えたいのである。

この主の祈りの最後のひと言は、限られた言葉で最高度に神をほめ讃えている。と同時に、このひと言は次の事柄も表している。それは、神にこそ国も力も栄光もあるのであり、自分にそれらは全くありませんという、その事である。つまり、神を他にしてどこにもこれらを保持する者はいないのだとする信仰の表明でもある。この主の祈りの結び言葉において私たちは、神を賛美すると共に、祈りを許可し、祈りへと執成し導く神に喜びと感謝とをもって祈りたいのである。

〈黙想〉

この度のダビデの祈りのスピリットは、自らの信仰の立ち位置を改めて考える機会であった。この代表祈祷は、徹底的な神賛美とともに、自らと民とを謙遜な者へと導き、そして自らは王にもかかわらず、有限な者に過ぎず、永遠者の前にとるに足らない者だと告白する。更には、イスラエルの未来の繁栄を祈り願う姿に、揺るがない神信頼と、神が必ず事を為し給うと確信する一信仰者としての姿を見る。ダビデの祈りを通して、王として民を愛し、これを神にこそ委ねる潔さを見る。

この事と、この度の主の祈りの結びとを重ね合わせる時に、次の事を思わされる。それは私たちの思いを超えた方が、時間空間を超えて絶対者として統べ給う事への感謝と信頼である。ここからくる確信は揺るがないのであり、と同時に、この方がこれからの教会とそこに集う民（子どもたちも）を顧みておられる事実を見る時に、自らが一時代の者に過ぎず、罪と弱さと欠けを担う謙遜な者にさせられる。

主の祈りの最後で、この言葉をもって神を賛美・頌栄することは、取りも直さず、「生きるも死ぬるも神に依り、すべての事は神によって帰結する。」との確固たる信仰の表明に他ならない。

〈子どもたちに対して〉

このダビデの祈り、そして、主の祈りの結びが表すものは何でしょうか。それは徹頭徹尾、この神賛美のなかに表されています。つまり、神ならぬものには国も力も栄えも無いという告白であり、まして人にもその力はありませんという信仰の表明でもあるというこの事です。

ですので、子どもたち対しては次のことをお伝えすることが出来たら良いのではないでしょうか。①改めて、神さまはどんなお方なのか。賛美の限りを尽くしても、それでも賛美の言葉が足らない程に、力と栄光に満ちておられる方だということ。②と同時に、これを祈る私たちの信仰の態度についてです。自分は全く神ではないということ。自分には国も力も栄えも全くないということ。すべては神さまに由来するのであり、神さまの他に誰もその様な力を持った方はいないという信仰告白をこの度の主の祈りの言葉は含み込んでいるという事です。

私たちは、ともすると神では無く、自分の栄光・栄誉を求めがちです。自分のために力を注ぎがちです。また自らの力を誇ろうともします。この主の祈りの結びの言葉は、唯一この方のみに『国も力も栄えも』(すべてものが）帰されますようにとする神賛美と共に、自らが何者であるかを教えるもの、更にはその信仰さえも謙遜にさせられる告白です。

神を正しく知ることは、自らの信仰をも正されることにもなります。私たちは、御言葉から毎週教えられると共に、この主の祈りの言葉からも教えられたいと願います。　　（大木　信）

3月19日　主の祈り・確信の祈り　説教展開例

テキスト　歴代誌上 29章10〜20節
子どもと親のカテキズム　問96

〔単元のねらい〕

主の祈りの最後の一文は、神への賛美・頌栄である。神がどの様な方か、そして自分が何者に過ぎないか、神をほめたたえる中で知り、更には、この祈りを通して神にこそ栄光を帰し、自らが永遠にこの方によって養われていることの確信と喜びに導かれたい。

私たちの確信は神にこそある

3月に入り、卒業シーズン、そして一年の終わりの時期となりました。「今週、終業式で春休み！」という学校も多いのだろうと思います。昔から「終わり良ければすべて良し」なんて言いますが、皆さんの学校生活、家での生活はこの一年どうでしたか。そして、一つの学年を終えるにあたり、皆さんは今どんな気持ちなのでしょうか。

さて、2年間続いてきました「子どもと親のカテキズム」の学びもいよいよ終えようとしています。残すところ、今日を入れて2回だけになりました。残り二回となった学び、「終わり良ければすべて良し」ではありませんが、気持ちよく学び終えて、新しい学年となる4月を迎えたいと思います。

今日の聖書の箇所は、ダビデのお祈りの箇所でした。そしてカテキズムの主の祈りの方は一番最後の一文です。最後の一文はどんな言葉だったでしょうか。もう一度見てみましょう。『国と力と栄えとはかぎりなくなんじのものなればなり』です。

ダビデさんの祈りでもそうですし、この主の祈りの最後の文章もそうですが、神さまをほめています。神さまをほめたたえています。簡単に言えば、「神さま、あなたは本当に素晴らしい方です」と言葉にして表しているのです。

みんなは、神さまをほめる言葉としてどんな言葉が思いつきますか。「神さまは素晴らしい」という事を表すのに、どんな言葉を使って表しますかね。ちょっと考えてみて下さい。先生も色々考えてみました。例えばこんな言い方、「神さま、あなたは正直な方です。決して嘘をつかれません。」こう言い方は、たしかに神さまをほめていますね。また、こういうのはどうでしょう、「神さま、あなたは私たちを愛して下さる方です。決して嫌ったり、手を放したりしない方です。」これも神さまの事をほめ謳った言葉ですね。或いは、「神さま、あなたはどんな事でもできる方です。全てを造ることが出来ます。」これも、神さまをほめた表現ですね。他にも色々あると思いますし、みんなも色々考えてくれたと思いますが、神さまをほめるには、聖書は、神さまをどんな風に教えてくれているのか、これを知るのが重要です。聖書が私たちに教えている神さまと少しも違っていない仕方で、神さまを褒めることが大事です。

ダビデさんの祈りも、そして今日の主の祈りの言葉もこの様に聖書が教えてくれているように神さまを褒めている言葉、褒め称えている言葉です。これをちょっと難しい言葉で言うと、これを「賛美」と言います。みんなが礼拝の中で歌っている讃美歌、これも、神さまをほめ謳うために歌っているのです。

なんで、神さまを賛美するのでしょうか。神さまをどうしてこれ以上ない言葉で褒めるのでしょうか。何でダビデさんも、そして主の祈りの最後も、神さまをこれ以上の無い言葉で褒めているのでしょうか。なぜなのでしょうか。それは、その神さまによって今の自分があるからです。祈る者

に共通するのは、この神さま抜きでは生きていけないことをよく知っている、この事です。

ですからダビデさんも祈りの中で告白しています。『わたしなど何者でしょう。わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの』ですと言い、また、『この地上におけるわたしたちの人生は影のようなもので、希望はありません』あなた、神さまが助けてくれなければ。こうダビデさんは祈ったのです。

ダビデさんは、神さまをほめる、褒め称えるのと同時に、自分がどんな者なのか、どんな人に過ぎないかをお祈りの中で告白しています。これはとても大事なことです。人は神さまから造られました。神さまに守ってもらわなければ生きてはいけません。神さまが、命も食べ物も生きるに必要な全てのものを、人にお与え下さるのです。この事をダビデさん自身、よく分かっていたのです。

そう考えて行けば、今日の主の祈りの言葉も同じ事です。『国と力と栄えとはかぎりなくなんじのものなればなり』と祈って、神さまをほめているのですから、それは同時に、次の事も言えると思います。それは、「私には、国も力も栄えもありません」という告白をしている事でもある、その事です。つまり、「この地上の国々も、そして天の御国も、治めておられる方はあなただけです。そして力も神さま、あなたにこそあります。私にその力は全くありません。また、栄え（栄光）も、神さまにこそあります。私には栄えなんてありません。また求めません。」こういう祈りでもあるのですね。これを忘れないようにしましょう。

神さまを知ることは、自分を知ることであり、人間を知ることです。聖書に書かれてある神さまがどんな方なのか分かって来ると、神さまをほめる言葉がだんだんと増えて行きます。そしてその事は同時に、「自分は神さまではありません」と告白出来ることへと繋がっていくのです。

私たちの神さまは、祈りを求めておられます。私たちがお祈りすることを求めておられます。そしてそれだけありません。祈る人のその祈りを導いて（執り成して）も下さいます。神さまに全てをお任せして、私たちは素直に祈りたいと思いますし、神さまを心から喜んで、ほめたたえて、祈りが必ず聞かれるとの確信へと導かれたいと思います。

（大木　信）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネの手紙 一 5章14節

何事でも神の御心に適うことをわたしたちが
願うなら、神は聞き入れてくださる。これが、
神に対するわたしたちの確信です。

3月19日　主の祈り・確信の祈り　小学科下級

れきだいし上29章10〜13節をよみましょう。

1. ダビデは、どんなことばでかみさまをほめたたえていますか。あげてみましょう。

れきだいし上29章14〜20節をよみましょう。

2. ダビデはしんでんをつくるために、じぶんのざいさんを、たくさんささげました。そのことについて、なんといっていますか。

3. わたしたちは、かみさまのまえではどんなものだといっていますか。

4. しんでんをつくるためのざいりょうは、だれのものですか。

5. かみさまは、わたしたちのなにをみていますか。

6. わたしたちのこころは、だれにむかうべきですか。

3月19日　主の祈り・確信の祈り　中学科

歴代誌上29章10〜13節を読みましょう。

1. ダビデは、どんな言葉で神様をほめたたえていますか。あげてみましょう。

2. あなたなら、どんな言葉で神様をほめたたえますか。

歴代誌上29章14〜20節を読みましょう。

3. ダビデは神殿をつくるために、自分の財産をたくさん捧げました。そのことについて、なんと言っていますか。

4. わたしたちは、神様の前ではどんなものだと言っていますか。

5. 息子ソロモンについて、神様に何を求めていますか。

6. 神様は、わたしたちの何を見ていますか。

7. ダビデの祈りとあなたの祈りを比べてみましょう。同じところはどこですか。違うところはどこですか。

3月26日　主の祈り・神の真実による祈り　聖書黙想

テキスト　コリントの信徒への手紙二 1章15〜22節
子どもと親のカテキズム　問97
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問4

問97 「アーメン」とは、どういう意味ですか。
答 「アーメン」とは「真実です」という意味です。私たちは、神さまが私たちの祈りをイエスさまの真実によって受け止めて、確かに聞き入れてくださることを信頼して、「アーメン」と唱えます。

〈聖書テキストの解説〉

コリント書、特に第二コリント書の成り立ちと手紙の順序については様々な説がありますが、ここでは単純に、開拓伝道（使徒18:11）の後、第一コリント書がエフェソで（使徒19:10）記され、その後現存しない書簡のやり取り（2:4）や、使徒言行録に記されない訪問（2:1、13:1）を経て、第三次宣教旅行中のマケドニア州を巡っている間に第二コリント書を送ったと考えます（2:16、使徒20:1）。すなわち、第二コリント書が当初から一貫した一つの書物として記されたことを前提とし、記されている出来事をそのまま採用することとします。

当該箇所は、パウロのコリントの町の教会にあてた手紙の冒頭のあいさつ文です。パウロはここで自身がコリントの教会に対して強い思いを持って訪問の計画を立てつつもその計画が実現していないことを認めます。しかし、そのことは、神様の真実性を損なうものではありませんでした。そもそも神様は是と非が共存するお方ではなく、是が非へと変わるお方でもありません。是は必ず是として実現するお方です。これらのことは聖書のあらゆる箇所において私たちに示されており、私たちはそれらの箇所から、そのお方を全面的に受け入れ、承認するのです。そのことによって神様は全てを実現する保証を私たちに与えてくださるのです。

「アーメン」という言葉は、旧約時代以来、礼拝などにおいて民が祈りや賛美に同意する時の言葉としてずっと用いられてきた言葉でした。また福音書においては、主イエスが度々用いられた言い回しとして、(ギリシア語を使う人が多数であった）当時の教会の中でイエスさまが口にされたアラム語のまま用いられました。私たちはアーメンを口にすることによって、今祈りを共にする人々と思いを合わせ、歴史を貫く神の民と思いを合わせ、真理を貫かれる神であるイエスさまと思いを合わせるのです。

なお、当該箇所で、「然り」と訳されている単語は「アーメン」というギリシア語ではないことには注意する必要があります。

〈子どもカテキズムの解説〉

子どもと親のカテキズムの最後の問いは、主の祈りの最後に加えられている「アーメン」という言葉についてです。「アーメン」という言葉はキリスト教の最も象徴的な言葉の一つであり、肯定的にも揶揄される形でもキリスト教徒を表す印象的な単語です。歴代の教会の中でずっとアラム語で使われていたことからわかる通り、教会はむしろ意味を持たない記号的な掛け声として用いてきました。しかし、その言葉の持っている意味を確かめる時に、「アーメン」という単語は単なる掛け声にとどまらず、むしろ私たちの信仰の核心を表す重要な意味を持った言葉であることがわかります。意味を明らかにしてこの言葉を口にすることで、共に祈る祈りに対して思いを合わせることができ、祈りの内容をしっかりと受け止めることができます。また祈りをとりなす主イエス・キリストと祈りを受け入れてくださる父なる神様の真実への信頼が確かめられ、特に願い祈る祈りが受け入れられることを確信し、慰めと励ましをますます確かなものとすることができるのです。

特に低学年の子どもがふざけてこの言葉を口に

したり、周囲の人から冷やかし半分に言われたりする時にも誇りを持ってこの言葉を口にできることは、信仰生活を支える力となるでしょう。

〈黙想〉

私たちが祈るときは、感謝と願いをもって主に向かい合う。満たされた時、感謝を捧げる時も主に祈るが、ほとんどの場合は何か必要を満たすため、願いを献げるために祈るのである。私たちが祈りを必要とする存在であること、祈りを持って主に頼らなければならない存在であることを認めるのは信仰の基礎である。その上で、いかなる状況にあっても祈りを通して主に自身を委ねることで私たちは平安を得ることができる。なぜなら、祈りは、たとえたった一人で祈る密室の祈りであっても全ての信仰者と共に声を合わせる祈りであり、聖霊なる神様が共に祈り、御子イエスキリストが執り成し、父なる神様が聞き入れるという神様の全能性と真実性に委ねる行為だからである。さらにその祈りが公の祈りとなる時に、その場で共に祈る人々と思いを一つにする行為であり、礼拝の場において、祈りの場において、目に見えて聖徒の交わりを表す行為だからである。

「アーメン」という印象的な言葉において、私たちは、今目の前で共に祈る兄弟姉妹たちと一つになり、歴史を超えた全ての教会の信徒たちと一つになり、三位一体の神様と一つになり、神様の真実さ、特に御子の真実さと一つになります。

〈子どもたちに対して〉

お祈りをすること、特に礼拝の中で皆の前でお祈りをするのは恥ずかしさや照れ隠しもあって、苦手な子が多いようです。またノンクリスチャンに囲まれた学校などで自分がクリスチャンであることが知られるのを嫌がる子どもも少なくありません。なぜ祈るのか、何を祈るのか、どんな風に祈るのか、その意味について知り、語ることができることは、子ども自身の信仰生活を支えるためにも極めて有益です。祈りは私たちが神様を信頼し、全てを委ね、全てを求め、全てを感謝することができるしるしであり、祈ることで私たちは自分と神様の関係を確かめることができます。そしてあらゆる不安や苦しみが祈りを通して神様の導きの光の中に置かれるのです。信仰について学ぶカテキズムの最後が祈りについての学びであり、祈りについての学びの最後が、神様に対する賛美と確信を宣言する「アーメン」についての学びであることは、私たちの信仰の有り様を示すものであると言えます。その信仰の確かな喜びを子どもと共有できればと願います。　　（長田詠喜）

3月26日　主の祈り・神の真実による祈り　説教展開例

テキスト　　コリントの信徒への手紙二 1章15〜22節
子どもと親のカテキズム　問97

〔単元のねらい〕
主の祈りの最後であり、「子どもと親のカテキズム」の最後の問答となる。

私たちの合言葉

今日は子どもと親のカテキズムの一番最後、問97を読みました。子どもと親のカテキズムの一番最後は、主の祈りの最後の言葉についてです。お祈りの最後に言う言葉はもう皆さんわかりますよね「アーメン」という言葉です。お祈りの時はみんなこの言葉を言います。みんなだけではありませんよ。教会の人は、日本の人も韓国の人も、アメリカの人もドイツの人も世界中の教会でお祈りの時には最後に「アーメン」と言います。百年前も二百年前もそうです。五百年前も千年前も二千年前、イエスさまの時代も、もっとずっとずっと前、ダビデ王さまやソロモン王の時代にも、神様を信じる人たちはお祈りの最後に「アーメン」と言っていました。この言葉は、ダビデやイエスさまの暮らしていたユダヤの言葉で「本当です」「真実です」という意味の言葉です。誰かがお祈りをする。「本当にその通り」「私もそう思います」という時に、みんなでアーメンと声を合わせていうんです。さっきもお祈りをしました。「みんなが元気に教会に来ることができてありがとうございます」「本当にその通り」「元気に礼拝ができるようにしてください」「私もそう思います」「今日お休みのお友達も守ってください」「本当にその通り」で、「アーメン」というのです。みんなが勝手にお祈りをするのではなく、みんなの心を一つに合わせて、みんなで声を合わせてお祈りをする。その時に、「アーメン」というのです。外国の人でも大昔の人でも、みんなが心を合わせてアーメンということができるのが教会の素晴らしいところなのです。

それだけではありません。実はこのアーメンという言葉はイエスさまの口癖でもありました。イエスさまは大事なことを教えられる時に、よく「アーメン」と言いました。ちょっと聖書の箇所を読みますね。有名なところでは、迷子の羊の話で「はっきり言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう（マタイ18:13)」、この「はっきり言っておく」というのが「アーメン、言います」という言葉です。他にも祈りの力について、「はっきり言っておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる（マルコ11:23)」、子どもたちを招き寄せて「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない（ルカ18:17)」、救いについて質問したニコデモに「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない（ヨハネ3:3)」等々、イエスさまは何回も何回も「アーメン」「アーメン」と言って、大事な信仰の教えをされました。「本当にそうだよ」「はっきりと本当のことだよ」と繰り返し繰り返しおっしゃったのです。弟子たちはそれを聞いておりました。イエスさまと言えば、アーメンとおっしゃる方、アーメンと言って私たちに教えてくださる方なのです。ですから私たちも、お祈りの時に、イエスさまと同じように「アーメン」と言って、イエスさまにお祈りを献げる。イエスさまと一緒になるのです。

言葉で言うだけではありません。実際イエスさまは、「はっきり本当にその通り」のお方です。神様は「本当のお方」だから、神の子であるイエスさまもその通りのお方なのです。

最初に読みましたのは、イエスさまのことを教えて旅をしたパウロさんの手紙ですが、ここでパウロさんは神様が本当なお方であることを書いています。

この手紙でパウロさんは、自分がコリントの町の教会に、自分はコリントに行こうと思っているけど、まだ行けないでいることを書いています。パウロが約束したけれど実現できないのは、神様が「本当だよ、本当だよ」と言いながら「嘘だよ、嘘だよ」と言ったり、「本当だ」と言うのと同時に「嘘だよ」なんて言うお方だからではないよ。と書いています。神様は「本当」だけが実現するお方なのです。パウロさんは、コリントの町に行って、コリントの教会の人たちを励まして、イエスさまの教えを改めて教えてあげたいと思いました。そのことを計画し、準備し、神様にお祈りをしました。「神様、私はコリントの町に行きたいのです。神様が私をコリントに行かせてください」たぶんこんな風に祈って「アーメン」とお祈りしたのでしょう。そうお祈りしたのですから、神様がアーメンと言ってくださったのだから、今までは行けなかったけれど、必ず行くよ、必ずコリントの教会の人に会えるよ。というのです。パウロさん自身が何か頑張ってやるからというのではなく、神様が真実なお方だから、神様に祈ったことは必ず真実として受け止められ、実現していくのです。

ですから、私たちは神様が約束してくださること、つまり神様が私たちを愛してくださり救ってくださるお方であること、私たちの祈りを全部漏れなく聞いていてくださって、その祈りに応えて、私たちに必要な最も良いものを必要なだけ十分に与えてくださるお方であることを信じて、祈るときに、「アーメン」「本当だよ」「その通りだよ」と応えるのです。神様がアーメンのお方であること、イエスさまがアーメンのお方であること、神様の愛が私たちに本当にアーメンなものであること、私たちの祈りがイエスさまによってアーメンであることを、心から喜んで、心から感謝してみんなで「アーメン」というのです。

「アーメン」というたびに私たちは、世界中の教会、大昔の教会、天国の教会のすべての人たちと一緒に、まことの神様と一緒に歩むことができるのです。　（長田詠喜）

〔今週の暗唱聖句〕　コリントの信徒への手紙 二 1章20節 b

わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。

3月26日　主の祈り・神の真実による祈り　小学科下級

コリントのしんとへのてがみ2　1章15〜20節をよみましょう。

1. パウロたちがコリントへいくけいかくをたてたのは、なんのためですか。

2. そのけいかくは、まだじつげんしていません。なぜだとおもいますか。

3. かみさまはどんなおかたですか。

4. かみさまのやくそくは、だれによってじつげんしましたか。

5. おいのりのさいごに「アーメン」というとき、あなたはなにをかんがえていますか。

6. これから、どんなきもちで「アーメン」といえばよいとおもいますか。

3月26日　主の祈り・神の真実による祈り　中学科

コリントの信徒への手紙2　1章15〜20節を読みましょう。

1. パウロたちがコリントへ行く計画をたてたのは、なんのためですか。

2. その計画は、まだ実現していません。なぜだと思いますか。

3. 神様はどんなおかたですか。

4. 神様の約束は、だれによって実現しましたか。

5. 私たちが交わす約束は、いつも真実ですか。

6. お祈りの最後に「アーメン」というとき、あなたはなにか考えていますか。

7. これから、どんな気持ちで「アーメン」と唱えればよいと思いますか。

2017年4〜6月カリキュラム（第65号）

―救済史に基づくサイクルカリキュラム―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月2日 レント	創造主なる神	創世記1:1〜5	創世記1:1
	天地の創造主である神は、ただお一人。創造主なる神をたたえて賛美しよう		
4月9日 受難週	十字架のキリスト	マタイ27:45〜56	マタイ27:54
	わたしたちのために神に見捨てられて死なれた救い主キリストに感謝しよう		
4月16日 復活祭	復活のキリスト	マタイ28:1〜10	マタイ5:12
	主イエスはよみがえられた。罪と死に勝利された主イエス・キリストを仰ごう		
4月23日	被造物の祝福	創世記1:6〜25	テモテー4:4
	神の創造のみわざを学び、神の愛がこめられた被造世界であることを知ろう		
4月30日	神の栄光の舞台	創世記1:31〜2:3	詩編19:2
	七日目の安息によって世界は祝福されている。神の栄光の舞台で喜び生きよう		
5月7日	人間の創造と人生の目的	創世記1:26〜31	詩編8:2前半
	神は人を創造し、生きる目的を与えられた。神の御心に応えて歩もう		
5月14日	男と女の創造	創世記2:18〜25	創世記2:18
	男と女に創造された。人は共に生きる存在である。互いに愛し合って生きよう		
5月21日	罪と堕落	創世記3:1〜13	ローマ6:23
	罪とは何か。神の御言葉にそむき、自分が神になってしまう罪を知ろう		
5月28日	救いの約束（原福音）	創世記3:14〜24	ローマ5:8
	神は人の罪を裁き、また、憐れむお方である。裁きと救いの神を知ろう		
6月4日 聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会	ヨハネ20:19〜23	創世記2:7
	人はキリストの聖霊（神の息）によって生かされる。聖霊によって歩もう		
6月11日	カインとアベル	創世記4:1〜16	詩編46:2
	神から離れて、人は罪に支配されてしまう。罪の悲惨と神の憐れみを知ろう		
6月18日	ノアの箱舟	創世記6〜7章	創世記6:9
	神は人の罪に心を痛めておられる。罪に心を痛め、人を憐れむ神を知ろう		
6月25日	ノアの契約	創世記8:1〜9:17	創世記8:21
	神はノアを通して、あらためて人を祝福してくださった。神をはめたたえよう		

2017年度 年間カリキュラム（第65～68号）

―救済史に基づく一年サイクル―

（2017年4月～2018年3月）

	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2017年	4月2日		創造主なる神	創世記1:1～5
65号	4月9日	受難週	十字架のキリスト	マタイ27:45～56
	4月16日	復活祭	復活のキリスト	マタイ28:1～10
	4月23日		被造物の祝福	創世記1:6～25
	4月30日		神の栄光の舞台	創世記1:31～2:3
	5月7日		人間の創造と人生の目的	創世記1:26～31
	5月14日		男と女の創造	創世記2:18～25
	5月21日		罪と堕落	創世記3:1～13
	5月28日		救いの約束（原福音）	創世記3:14～24
	6月4日	聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会	ヨハネ20:19～23
	6月11日		カインとアベル	創世記4:1～16
	6月18日		ノアの箱舟	創世記6～7章
	6月25日		ノアの契約	創世記8:1～9:17
66号	7月2日		バベルの塔	創世記11:1～9
	7月9日		アブラハムの召命	創世記12:1～9
	7月16日		アブラハムへの約束	創世記15:1～21
	7月23日		イサクの誕生	創世記21:1～8
	7月30日		イサクを献げる	創世記22:1～19
	8月6日		ヤコブとエサウ	創世記27:1～40
	8月13日	平和主日	売られたヨセフ	創世記37:1～36
	8月20日		総理大臣になったヨセフ	創世記41:1～44
	8月27日		摂理の主の勝利	創世記50:15～21
	9月3日		モーセの誕生	出エジプト1:22～2:10
	9月10日		モーセの召命	出エジプト3:1～22
	9月17日		十の災いと過ぎ越し	出エジプト7:8～24
	9月24日		葦の海を渡る	出エジプト14章

年・号	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
67号	10月1日		天からのパン	出エジプト16章
	10月8日		十戒を授かる	出エジプト19:1〜20:21
	10月15日		金の子牛の事件	出エジプト32章
	10月22日		幕屋の建設	出エジプト40章
	10月29日		荒れ野の放浪	民数記13〜14章
	11月5日		ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章
	11月12日		約束の地カナンへ	ヨシュア6章
	11月19日		ギデオンの召命	士師記6章
	11月26日		ギデオンの精鋭	士師記7章
	12月3日		ささげられるサムソン	士師記13章
	12月10日		サムソンの祈り	士師記16章
	12月17日	アドベント	待降節・捕囚からの解放	イザヤ40:1〜11
	12月24日	降誕祭	降誕祭・主イエスの降誕	ルカ2:8〜21
	12月31日		サムエルの召命	サムエル上3章
2018年	1月7日		サウルの召命	サムエル上9〜10章
68号	1月14日		ダビデの召命	サムエル上16章
	1月21日		ダビデへの契約	サムエル下7章
	1月28日		ソロモンの知恵	列王記上3:4〜15
	2月4日		ソロモンの偶像礼拝	列王記上11:1〜13
	2月11日		バアルと対決するエリヤ	列王記上18:16〜45
	2月18日		バビロン捕囚	歴代誌下36:11〜23
	2月25日		回復の約束	イザヤ35章
	3月4日		解放の告知	イザヤ61:1〜4
	3月11日		新しい契約	エレミヤ31:31〜34
	3月18日		主の日が来る	マラキ3:19〜24
	3月25日	受難週	十字架のキリスト	ヨハネ19:17〜30

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの

～「あとがき」より～

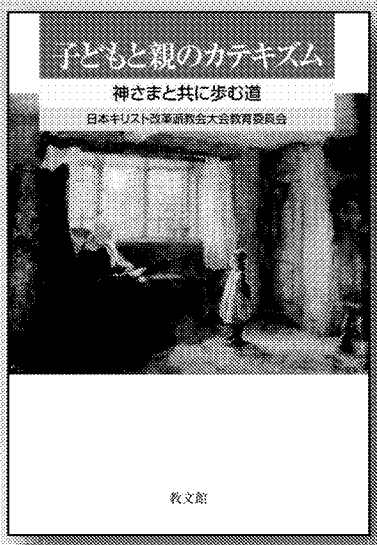
このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格400円（税込）

書店での販売価格は540円（税込）ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円（税込）です。

申込先　E-mail　shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp　長田詠喜

振込先　01620-8-39213　長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館　〒104-0061　東京都中央区銀座4-5-1　TEL03-3561-5549　FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/　【呈・図書目録】

大会教育委員会

「教会学校教案誌」

継続発行のための

自由募金のお願い

いつも弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申しあげます。

第６２号に引き続き第６３号の発行も大幅に遅れ、読者の皆様には多大なるご迷惑をおかけいたしました事、深くお詫び申し上げます。編集実務責任者の突然の離職によるものとはいえ、私どもの責任を痛切に覚えさせられております。

さらに、中部中会から大会教育委員会への移管後、大会の財務状況の厳しさに鑑み、また創刊時の志に基づき、できる限り有志の皆様の「募金」という形でのご支援を願ってまいりました。しかしながら、現状は（裏ページご参照）、極めて厳しい状況に陥っております。

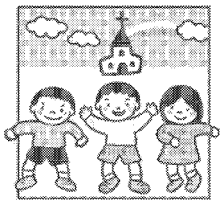
第７０回定期大会で「５０万円」の募金願いは満場一致で受け入れて頂きました。**教会**また**個人**としてご協力を伏してお願い致します。　*Soli Deo Gloria!*

※ 購読申し込みは、辻　幸宏（大垣伝道所：yukihiro.tsuji@nifty.com
〒503-0996 岐阜県大垣市島町 283　℡/Fax:0584-91-3538　）
お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額　５０万円

送 金 先　郵便振替　伊藤治郎

００８９０－２－１４８１８３



※振替通信欄に、「自由募金」とご明記くださいませ。

〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●教育委員会が新しい体制になり、教案誌についても、改めて体制を立て直し、より良いものとなるように、新しく様々な企画を考え始めています。この働きのためにぜひお祈りください。

（長田詠喜）

〈あとがき〉

●教会学校訪問は新所沢伝道所をご紹介いただきました。関係の皆様に感謝します。

●赤石純也先生のイスラエル史は休載しました。ご了承ください。

●巻末に並行して用いることができる「救済史カリキュラム」を付けてあります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、参考にしてくだされば幸いです。

●今号も、IBUKI の中村未生兄、高橋乃亜兄が表紙デザインのためにご奉仕くださいました。感謝いたしします。

●『教会学校教案誌』をぜひご購読下さい。バックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています。(一部品切はご容赦下さい)

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡下さい。

大垣伝道所　辻幸宏
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
E-mail:yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき
　相馬伸郎（名古屋岩の上教会）
教会学校訪問
　新所沢伝道所
絵本に心を耕されて
　望月鈴子（浜松伝道所信徒）
教会・国家・平和・人権
　木下裕也（名古屋教会牧師）
神様のみこころを祈る
　保田広輝（長丘教会信徒）

聖書黙想・説教展開例
　宮武輝彦　（男山教会牧師）
　坂部　勇　（厚木教会牧師）
　木下裕也　（名古屋教会牧師）
　吉岡契典　（板宿教会牧師）
　宮崎契一　（奈良教会牧師）
　藤井　真　（休職教師）
　相馬伸郎　（名古屋岩の上教会）
　吉田　崇　（坂出飯山教会牧師）
　酒井啓介　（宿毛伝道所宣教教師）
　坂尾連太郎（南与力町教会牧師）
　長田詠喜　（新所沢伝道所宣教教師）
　大木　信　（西鎌倉教会牧師）

分級展開例
　島野美佳子（坂戸教会所属新潟伝道所信徒）
　愛智　愛　（新座志木教会信徒）
イラスト作画
　表紙　中村未生（春日井教会信徒・IBUKI）
　　高橋乃亜（湘南恩寵教会信徒・IBUKI）
　本文　岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会
小宮山裕一	ひたちなか教会牧師・大会教育委員会
長田詠喜	新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会
木下裕也	名古屋教会牧師
辻　幸宏	大垣伝道所協力牧師

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会『教会学校教案誌』
2017年1・2・3月号（季刊）
第64号
2016年12月1日発行

発行　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
発行所　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
名古屋岩の上教会　牧師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座　00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

２０１７年１～３月号（２０１６年１２月１５日発行）　発行：日本キリスト改革派　大会教育委員会